

近畿自動車道(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査報告

第 5 分 冊

中ノ垣外遺跡

寺原 B 遺跡

ハノカ遺跡

口山田遺跡



1992・3

三重県教育委員会

三重県埋蔵文化財センター

近畿自動車道(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査報告

————— 第 5 分 冊 —————

序

近畿自動車道関・伊勢線にかかる現地の埋蔵文化財発掘調査は第8次区間（久居～勢和）が昭和63年度に終了し、その年度後半から第9次区間（勢和～伊勢）が開始され現在に至っております。第9次区間は多気町・玉城町・伊勢市に所在する30遺跡の調査を対象とし、昭和63年度から調査を行ってまいりました。

第9次区間については平成5年に予定されている伊勢神宮式年遷宮、及び翌年の祝祭博開催を臨んだ県行政の大幹に関連した道路建設でもあり、当事業にかかる埋蔵文化財の保護とその円滑な調整については鋭意努力いたしている処であります。

第9次区間の路線となる前述の市町が所在する地域は、古来から伊勢神宮との関連が深いことが分かっております。この地域に考古学的なメスを入れることは、当該地域の歴史を考えていくうえで、重要な資料を提供することになりましょう。またこの調査によって得た資料を基に、当該地域の歴史を考えていくことも発掘調査を行った我々の大きな責務のひとつであり、ここに公刊する中ノ垣外遺跡・寺原B遺跡・ハノカ遺跡・口山田遺跡についても同様であります。開発と文化財の保存との接点を学術的な方面に求めることも重要なことといえましょう。

調査に際しては日本道路公団、県土木部近畿道対策室、三重県土地開発公社、並びに伊勢市、多気町、玉城町の各関係機関、及び地元各位の多大なるご理解とご協力を得ることができました。文末となりましたが、ここに心からの御礼を申し上げます。

平成4（1992）年 3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 中 林 昭 一

例 言

1. 本書は、平成3年度に三重県教育委員会が日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した、近畿自動車道関・伊勢線第9次区間（勢和～伊勢）建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査（調整・報告書作成業務）にかかる報告書（第1～5分冊）のうちの中ノ垣外遺跡他3遺跡の報告書（第5分冊）である。

2. 調査にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。

3. 整理・報告書の作成は次の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター調査第2課第1係

調査第2課長 新田 洋・主事 角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）

主事 河瀬信幸・主事 稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）

主事 河北秀実・主事 前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）

（室内整理員）

反町瑩子 谷久保美知代 采野妙子 田中ゆかり

4. 本書作成にかかる遺物整理および報文執筆について、下記の方々から指導、助言を賜った。また、広瀬和久、原正之の両氏からは玉稿を賜わった。記して謝意を表する。（敬称略、順不同）

渡辺 寛（皇学館大学教授） 青木哲哉（立命館大学講師） 植野浩三（奈良大学助手）

広瀬和久（三重県農業技術センター室長） 原 正之（三重県農業技術センター研究員）

5. 本書の執筆は調査担当者が目次に記載する分担によって行い、編集は角谷が担当した。

6. 当該遺跡については、すでに『きんき道調査ニュース』No.28、および『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅵ・Ⅶを公表しているが、当報告をもって正式報告とする。ただし、ハノカ遺跡のA地区、B地区については、本報告書ではA地区をハノカ遺跡、B地区を口山田遺跡とした。

7. 本書で報告した記録および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

8. 当該遺跡の位置は国土座標第Ⅵ系に属している。挿図の方位は全て座標北で示している。真北は座標北のN0°21′ W、磁北は座標北のN6°41′ Wである。

9. 当報告書に使用した遺構表示記号は次のとおりである。また「どこう」の用語は次のように統一した。

S B 掘立柱建物 S D 溝 P 柱穴、ピット S K 土坑 S X 墓塚 S Z 不明

「どこう」の用語としては「土壇」あるいは「土塚」があるが、「土坑」とした。なお、墓と考えられるものについては、「墓塚」とした。

10. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

I. 前言

1. 調査に至る経過…………… 新田 洋… 1
2. 調査および整理の方法…………… 角谷泰弘… 5
3. 調査の体制…………… …… 6

II. 中ノ垣外遺跡…………… 前川嘉宏… 7

III. 寺原B遺跡…………… 角谷泰弘… 25

IV. ハノカ遺跡…………… …… 47

V. 口山田遺跡…………… …… 52

(付 篇)

口山田遺跡土壌分析結果…………… 広瀬和久・原 正之… 63

図 版 目 次

中ノ垣外遺跡

PL. 1 調査前遠景
調査区全景

PL. 2 調査区全景

SB1・SB2・SD5

PL. 3 SB3

作業風景

PL. 4 出土遺物

PL. 5 出土遺物

寺原B遺跡

PL. 1 調査前全景
調査区全景

PL. 2 SB9

SK1

PL. 3 SK3

SK5

PL. 4 SK6

SK7

PL. 5 SK10

下層調査トレンチ

PL. 6 出土遺物

PL. 7 出土遺物

ハノカ遺跡

PL. 1 調査前全景

調査区全景

PL. 2 ピット群(1)

ピット群(2)

PL. 3 ピット4 縄文土器出土状況
出土遺物

口山田遺跡

PL. 1 調査前全景

調査区全景

PL. 2 SZ1全景

SZ1発掘状況(1)

PL. 3 SZ1発掘状況(2)

出土遺物

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図……………2	第16図 寺原B遺跡 SK6実測図……………30
第2図 中ノ垣外遺跡 遺跡地形図……………8	第17図 〃 SK7実測図……………30
第3図 〃 調査区位置図……………9	第18図 〃 SK10実測図……………31
第4図 〃 調査区平面図……………9	第19図 〃 出土遺物実測図……………36
第5図 〃 調査区南西壁土層断面図 ……………12	第20図 〃 出土遺物実測図……………37
第6図 〃 調査区横断土層断面図…13	第21図 〃 出土遺物実測図……………38
第7図 〃 SB1・SB2・SB3 実測図……………14	第22図 ハノカ遺跡 遺跡地形図……………47
第8図 〃 出土遺物実測図……………15	第23図 〃 ハノカ遺跡・口山田遺跡 調査区位置図……………48
第9図 〃 出土遺物実測図……………16	第24図 〃 調査区土層断面図……………49
第10図 寺原B遺跡 調査区位置図……………25	第25図 〃 調査区遺構平面図……………50
第11図 〃 調査区土層断面図……………26	第26図 〃 出土遺物実測図……………51
第12図 〃 調査区遺構平面図…27・28	第27図 口山田遺跡 調査区東西土層断面図…52
第13図 〃 SB9実測図……………29	第28図 〃 調査区遺構平面図……………53
第14図 〃 SK1実測図……………29	第29図 〃 SZ1遺構実測図……………54
第15図 〃 SK5実測図……………29	第30図 〃 SZ1遺構実測図……………55
	第31図 〃 出土遺物実測図……………56

表 目 次

第1表 発掘調査遺跡一覧……………3・4	寺原B遺跡
第2表 実測図整理番号一覧……………5	第5-1表 出土遺物観察表……………32
中ノ垣外遺跡	第5-2表 〃 ………………33
第3-1表 出土土器観察表……………17	第5-3表 〃 ………………34
第3-2表 〃 ………………18	第5-4表 〃 ………………35
第4表 出土土錘観察表……………18	第5-5表 〃 ………………36

I. 前 言

1. 調査に至る経過

近畿自動車道関・伊勢線（伊勢自動車道）の第9次区間（勢和～伊勢）の建設区間については昭和47年に基本計画、57年に整備計画が、そして昭和60年2月に建設大臣から日本道路公団に施行命令が出されている。また、翌月の3月には実施計画認可と路線発表がなされている。

この第9次区間は第8次区間（久居～勢和）の延長路線として、勢和・多気インターチェンジから仮称伊勢インターチェンジまでの延長21.5kmの建設計画であり、行政区画としては、勢和村、多気町、玉城町、伊勢市をほぼ東西に横断する形をとっている。

そして、この路線は三重県の中・南伊勢と近畿、及び中部経済圏を結ぶ幹線道路として、一般国道23・42号の交通緩和とともに伊勢湾岸と内陸部の産業、あるいは伊勢志摩・紀州への観光ルートとしての大きな使命をもつものといわれている。

そのうち、第8次区間（久居～勢和）については、平成2年12月に供用開始されている。

さて、この第9次区間（勢和～伊勢）建設にかかる埋蔵文化財の保護、調整協議については昭和50年段階に建設省名阪国道工事事務所、県道路建設課と県教育委員会文化課との協議と現地立会い調査という形で開始された。また、事業地内にかかる埋蔵文化財の分布調査については昭和53・55・56年に3次にわたって県教育委員会文化課が県文化財調査員等の協力を得て実施し、昭和56年3月14日付、教文第429号で道路建設課あてに「近畿自動車道伊勢線関係遺跡分布調査結果報告について」として文書通知をしている。

その後については、第8次区間（久居～勢和）の埋蔵文化財発掘調査の体制と諸準備に追われた形となり、昭和59年度末には第8次区間の現地発掘調査を実施するに至った。そして、この第8次区間の現地発掘調査には59年度を皮切りに開始され、昭和63年度前半までの足かけ5年余の期間が費やされた。

さて、第9次区間の遺跡取り扱いについては、昭和61年度になって具体的に浮上し、試掘計画等について、日本道路公団松阪工事事務所と調整・協議するに至った。また、62年度初めには再度、第9次区間（勢和～伊勢）建設予定地についての遺跡確認と分布調査を実施した。この段階で公団あてに提示した遺跡は計26件、面積にして114,200㎡である。

なお、この第9次区間については、その後の新発見等の協議を経て、玉城町で1件（泉貢窯跡）、多気町で1件（佐奈水銀鉱山跡）、伊勢市内で2件（大谷古墳、古市・中之地蔵町遺跡）の遺跡が追加されている。

以上のような経過を経て、第9次区間の現地における埋蔵文化財発掘調査は昭和63年度の後半期から開始することとなった。（第1表参照）

また、最後となりますが、調査の円滑推進にあたっては、日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、伊勢市近畿自動車道対策室他、伊勢市・多気町・玉城町の各教育委員会に、現地にあつては各地元自治会長をはじめ、多くの方々のご理解とご援助を得ました。加えて、発掘業務については三重県土地開発公社のご協力をいただきました。文末ながらここに記して厚くお礼申し上げます。

（新田 洋）

2. 調査および整理の方法

1. 現地調査の方法

調査の方法は、近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）の調査方法に則って行った。以下



第1図 遺跡位置図 (1 : 100,000)

近畿自動車道第9次区間（勢和～伊勢）

埋蔵文化財発掘調査計画

No	遺跡名	所在地	確認面積(㎡)	調査面積(㎡)								合計
				昭和63年度		平成元年度		平成2年度		平成3年度		
1	王子谷遺跡	多気町前村字王子谷	1,000	48		144						192
2	桃谷古墳	＊ ＊ 桃谷、五桂字ツツジ	100			27						27
3	ツツジ古墳	＊ 五桂字ツツジ	100			20						20
4	牛ノサマA遺跡	＊ 野中牛ノサマ・字定越	1,500		304			3,000				3,304
5	牛ノサマB遺跡	＊ ＊ ＊ ＊ 字ナルコ	4,700		336 (1,200)			5,500				5,836
6	ヒジヤ口遺跡	玉城町原字ヒジヤ口・国東河内	5,600	288								288
7	のせんじ遺跡	＊ 積良字のせんじ・泉貫	1,000	96								96
8	樋の内遺跡	＊ ＊ 字樋の内	2,800	192 (2,000)			2,500					2,692
9	上ノ垣内遺跡	＊ 山神字上ノ垣内・坂ノ辻	3,400	196								196
10	富ヶ城跡	＊ ＊ 字西老谷・老谷	2,000					286	2,180			2,466
11	山神東城跡	＊ ＊ 字東老谷	2,700					441	3,922			4,363
12	黒山古墳	＊ ＊ 字黒山・東岡谷・仲山	100			30						30
13	楠ノ木遺跡	＊ 勝田字楠ノ木・二ノ谷・ヤケ山他	39,000			2,032	6,890					8,922
14	矢倉戸前古墳	＊ 宮古字細谷	100			20						20
15	敷山遺跡	＊ 岩出字塚名・左郡	10,000	587			11,500					12,087
16	宮地遺跡	＊ ＊ ＊ 所り垣	2,300	144				3,300				3,344
17	中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町字中之垣外	4,400			400	2,100					2,500
18	寺原B遺跡	＊ ＊ 字寺原	2,400			224	500					724
19	ハノカ遺跡	＊ 津村町字ハノカ字口山田、佐八町字南口、	10,000			792		147	2,800			3,739
20	落合古墳群	＊ ＊ 字口山田	1,200			151		3,165				3,316
21	井戸谷遺跡	＊ 前山町字井戸谷	400			336						336
22	河原谷遺跡	＊ ＊ 字河原谷	100					100				100
23	世義寺跡	＊ ＊ 字亀谷郡	3,500			312		2,195				2,507
24	中起遺跡	＊ 勢田町字中起	3,500				257					257
25	蠟尾遺跡	＊ 久世戸町字蠟尾	520							32	520	552
26	奥遺跡	＊ 椿部町字奥	11,800				494					494
27	泉貫跡	玉城町積良字泉貫・向山丑岡	4,500			330		2,556				2,886
28	佐奈水銀鉱山路	多気町前村字井戸谷	400				400					400
29	大谷古墳	伊勢市佐八町字大谷	400					120				120
30	吉布・中之嶋町遺跡	＊ 中之町・板木町	5,000							112	2,500	2,612
		計	124,520	2,191 (3,200)		4,818	35,590	1,745	16,918	144	3,020	
		合計		2,191 + (3,200)		40,408		18,663		3,164		64,426

第1表 発掘調査遺跡一覧

原則的な方法を記す。

地区割

計画路線がほぼ東西方向をとるため、4 m方眼で設定する地区割は各遺跡毎に適切なセンター杭2点を結ぶ延長線方向に西から東へ数字、これと直交する方向で南から北へアルファベットを与え、各グリッドの南西の杭をグリッドの名称とした。

遺構カード

遺構カードは原則として4 m×4 mのグリッド毎に作成する。略図は遺構検出後、掘り下げまでに記入することとし、遺構の重複関係等はこれに明示しておく。

遺構番号はピットについては各グリッドごとに通し番号を付すこととし、土坑・溝・住居跡等は遺跡ごとの通し番号とする。

写真撮影

遺構等の写真撮影は原則として6×7 cm版（モノクロネガ、カラーリバーサル）及び35mm版（モノクロネガ、カラーリバーサル）による。また、35mmデータカメラ（カラーネガ）でも同一カットの撮影をするほか、作業進捗状況にあわせて日誌としての撮影も行った。

使用したカメラはアサヒペンタックス67（6×7 cm版）・ニコンF-501AF（35mm版）である。

遺構実測

道路工事計画に関する杭が国土座標に基づくため遺構実測は国土座標に基づいて行った。遺構実測は中ノ垣外遺跡、口山田遺跡は平板測量、寺原B遺跡、ハノカ遺跡は遺り方測量で行った。なお、当地域の座標系は第Ⅵ系である。

2. 資料整理の方法

遺構実測図等

遺構実測、断面実測等の図面は、原則として50cm×35cmの方眼紙（2 mm方眼）を使用し、各々に6桁の番号を付す。番号のうち上2桁は、調査対象遺跡

の番号（第1表の一覧表参照）とし、下4桁を各遺跡ごとの図面の通し番号とする。これらの図面はファイルに収納し、図面番号、図面の内容、縮尺等を記入した一覧表を2部作成し、1部を各図面ファイルに貼付、他の1部を綴じ込んで図面台帳とする。なお、各図面ともマイクロ撮影も行い、同様に6桁の通し番号を付した後ファイルへ整理する。

遺物実測図

出土遺物のうち実測可能なものは、すべて実測する。そして各々の遺物に6桁の通し番号を付す。番号のうち上2桁を、調査対象遺跡の番号とし、下4桁を遺物の通し番号とする。これらの図面は、ファイルに収納し、各遺物の番号、種類、名称、法量等のデータを記入した後ファイルする。なお、6桁の通し番号の与えられた遺物については遺物及び遺物ラベルにも、その番号を注記する。

遺構写真

モノクロ写真はベタ焼きとともにネガアルバムに貼付整理し、各コマ毎に地区名、遺構名、撮影方向等のデータを記入する。

カラーライドは、図面及び遺物と同様の方法により、各コマのファイル枠毎に6桁の通し番号を付す。そして、地区名、遺構名、撮影方向等のデータを記入した一覧表を作成し、1部をライドファイルへ貼付し、1部を台帳として保管する。

遺物写真

モノクロ、カラーとも各遺物に付された6桁の通し番号によって整理を行う。整理は遺構写真と同様とする。

拓本

拓本は、報告書図版等に使用する時はコピーを使う。原本は台紙に貼り付け、遺物に付された6桁の通し番号を明記しファイルに保管する。

本報告書に所収の遺跡についての各図面、遺物に付した6桁の通し番号は以下の通りである。

	遺跡名	遺構実測図	遺物実測図
17	中ノ垣外	17-0001~0023	17-0001~0063
18	寺原B	18-0001~0035	18-0001~0109
19	ハノカ	19-0001~0042,0044~0047,0061~0064	19-0002,0005~0015
	口山田	19-0043,0048~0060,0065	19-0001,0003,0004,0016~0019

第2表 実測図整理番号一覧

3. 調査の体制

調査は三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センターが担当した。

以下は平成元年・2年度の調査体制である。

(平成元年度)

主幹兼調査第2課長 山澤義貴
 主査 新田洋
 主事 田村陽一
 主事 河北秀実
 主事 小坂宜広
 主事 山崎恒哉
 主事 江尻健
 主事 伊藤裕偉
 主事 角谷泰弘 (伊勢市教育委員会より派遣)
 主事 稲本賢治 (多気町教育委員会より派遣)
 主事 前川嘉宏 (玉城町教育委員会より派遣)
 室内整理員 反町瑩子
 谷久保美知代
 采野妙子
 吉村道子
 白石みよ子
 山分孝子
 竹内由美
 田中智子
 反町有子
 中山学

(平成2年度)

次長兼調査第2課長 山澤義貴
 主査 新田洋
 主事 河北秀実
 主事 増田安生
 主事 齋藤直樹
 主事 伊藤裕偉
 技師 大川勝宏
 主事 角谷泰弘 (伊勢市教育委員会より派遣)
 主事 稲本賢治 (多気町教育委員会より派遣)
 主事 前川嘉宏 (玉城町教育委員会より派遣)
 臨時調査員 川崎正幸
 室内整理員 反町瑩子

谷久保美知代
 采野妙子
 吉村道子
 白石みよ子
 山分孝子
 乾ひとみ
 上村かおり
 竹内由美
 中山学
 反町有子

調査補助員 森田幸伸 (皇学館大学学生)
 調査補助員 近藤大典 (皇学館大学学生)

〈調査指導 (元年・2年度、順不同、敬称略)〉

水野正好 (奈良大学教授)
 泉拓良 (奈良大学助教授)
 玉田芳英 (奈良国立文化財研究所)
 八賀晋 (三重大学教授)
 広岡公夫 (富山大学教授)
 渡辺寛 (皇学館大学教授)
 西山要一 (奈良大学助教授)
 植野浩三 (奈良大学助手)
 菅原正明 (財和歌山県文化財センター次長)
 中井均 (滋賀県米原町教育委員会技師)
 千葉豊 (京都大学埋蔵文化財研究センター助手)
 橋本久和 (大阪府高槻市埋蔵文化財センター技師)
 磯部克 (三重県立津西高等学校教諭)
 奥義次 (三重県立松阪高等学校教諭)
 小玉道明 (三重県総務部学事文書課主幹)
 広瀬和久 (三重県農業技術センター室長)
 原正之 (三重県農業技術センター研究員)

〈発掘調査土木工部門担当〉

三重県土地開発公社
 堀内信吾
 稲葉庄衛
 平生憲
 浜口安光
 下地茂

(角谷泰弘)

Ⅱ. 伊勢市^{そうち}佐八町 ^{なか}中ノ垣外遺跡 ^{がいと}(17)

1. 周囲の遺跡

宮川河口から約11km上流に遡った宮川右岸に伊勢市佐八町の集落がある。佐八町とその南に続く伊勢市津村町には中世を中心とした時期の遺物を散布する遺跡が多数分布している。遺跡名を北から順にあげると、佐八藤波遺跡^①（縄文～室町）、元新畑遺跡（鎌倉以降）、土畑遺跡（室町）、寺原A遺跡（古墳以降）、中ノ垣外遺跡（縄文～鎌倉）、寺原B遺跡^②（鎌倉）、ハノカ遺跡^③（縄文以降）、元新田遺跡（先土器～鎌倉）、中新田遺跡^④（縄文～室町）、北垣外遺跡（鎌倉以降）などがある。これらの遺跡の多くは広大な面積をもち、宮川右岸に沿ってほぼ連続してなっている。遺跡の詳細については不明なものが多いが、中世においてこのあたりにかなりの規模の集落が形成されていたことが推定できる。

中ノ垣外遺跡は標高12m前後の河岸段丘上に立地する面積約60,000㎡の広大な遺跡で、行政上は伊勢

市佐八町字中之垣外・天白に属している。昭和58（1983）年度、この遺跡の中心部分約8,500㎡を三重県教育委員会が伊勢市教育委員会の協力を得て発掘調査した^⑤。この調査は県営圃場整備事業に伴うものである。この時の調査では、弥生時代・古墳時代・奈良時代の竪穴住居7棟、平安時代後半から鎌倉時代にかけての掘立柱建物30棟、井戸3基などの多数の遺構が検出され、当遺跡が弥生時代から鎌倉時代にかけて断続的に形成された集落跡であることが判明した。

また、宮川を挟んだ対岸にある度会郡玉城町岩出の蚊山遺跡においても、平安時代末葉から鎌倉時代にかけての掘立柱建物や中世墓等が多数検出されており^⑥、中ノ垣外遺跡との関連が注目されている。

このように、中ノ垣外遺跡の周囲には、ほぼ同時期のもと思われる遺跡が濃密に分布している。

2. 調査の経過

近畿自動車道建設予定地は、中ノ垣外遺跡範囲の北東端をかすめるように通る。このあたりは圃場整備が既に済んでいるため、現況での表面観察では地形の微細な起伏は全く不明であり、表面採集できる遺物も極少量であった。しかし、道路建設予定部分は昭和58年の発掘調査で多数の遺構が検出された調査区の北端から50m程度しか離れていないため、地下に遺構が存在することが充分予想された。

平成元年（1989）年9月18日から同年10月3日までの間、第1次調査（試掘調査）として道路敷部分の延長約250mに合計面積約400㎡の試掘坑を設定し調査を実施した。その結果、遺物出土量は少量で、まとまった遺構も確認されなかったが、出土遺物の時期が平安時代から鎌倉時代にかけてのものであり、掘立柱建物の柱穴らしきピットもみられたため、昭

和58年度の調査結果との関連を考え、第2次調査（本調査）を実施することにした。

第2次調査は平成元（1989）年11月13日より始め同年12月23日に終了した。第2次調査での最終調査面積は約2,100㎡である。

《調査日誌（抄）》

第1次調査（寺原B遺跡の試掘も兼ねる）

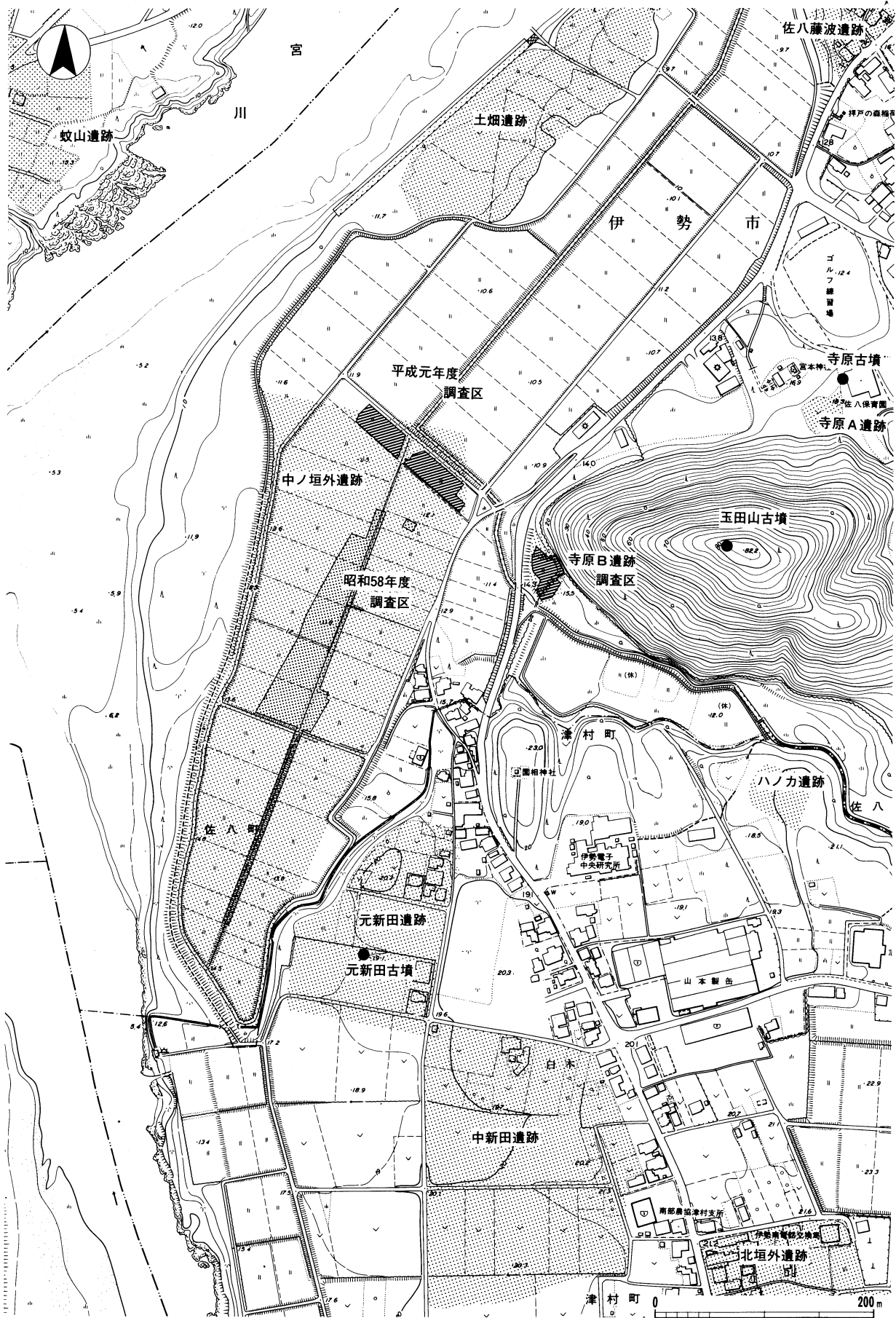
9月18日（月）業者入札。（株）新谷土建が落札。

9月20日（水）～25日（月）調査準備。

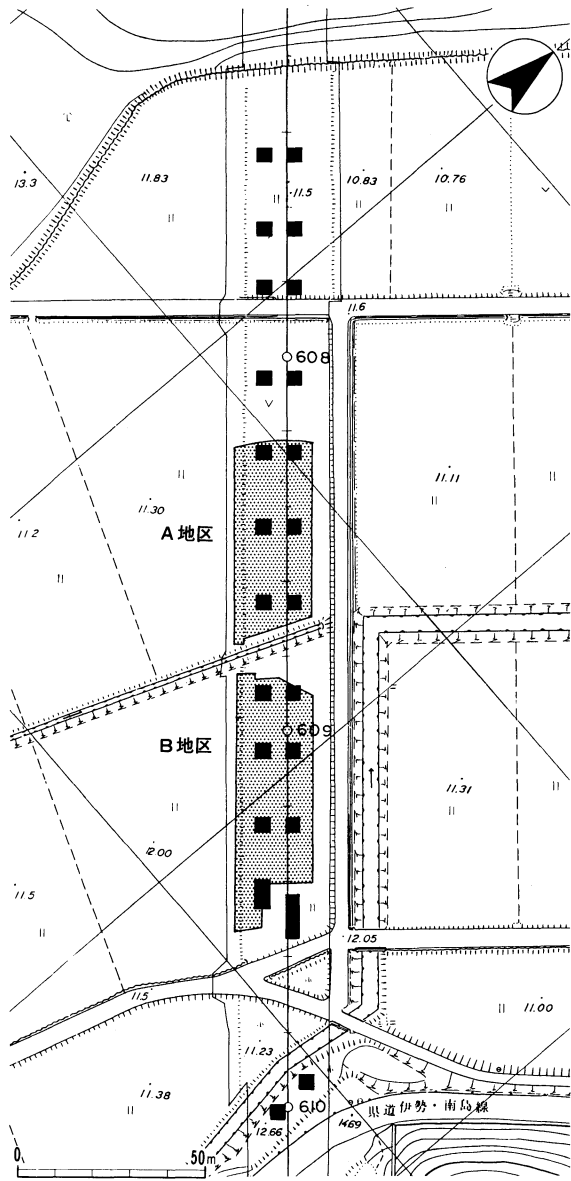
9月27日（水）試掘坑掘削開始。J44・L46で平安時代末葉の土器片出土。

9月28日（木）試掘坑掘削。宮川よりの6箇所の試掘坑は遺構、遺物とも認められず。

9月29日（金）・10月2日（月）寺原B遺跡の試掘。






第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



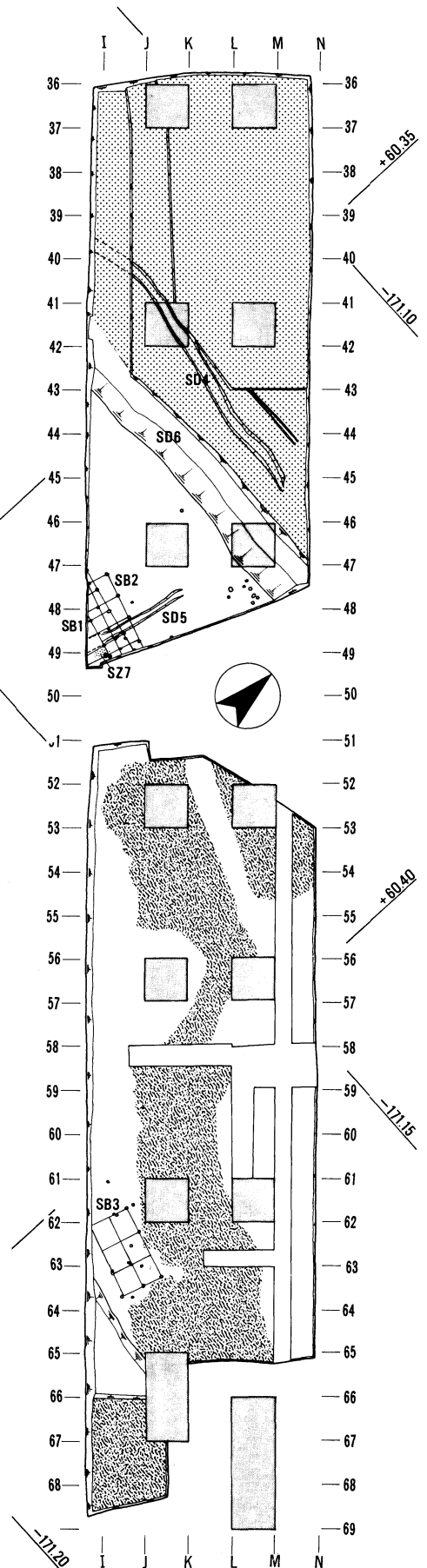
※黒ベタは第1次調査の試掘坑位置

第3図 調査区位置図 (1:2,000)

-  第1次調査の試掘坑
-  深くまで攪乱が及んでいた範囲
-  厚い砂礫層範囲

0 20m

第4図 調査区平面図 (1:600)



中ノ垣外遺跡の試掘坑埋め戻し。

10月3日（火）全ての試掘坑の埋め戻し完了。第1次調査終了。

第2次調査

11月13日（月）業者入札。(株)森組が落札。

11月14日（火）調査準備。

11月15日（水）調査区南西壁際の一部にトレンチを入れ土層を観察。第Ⅰ層～第Ⅲ層に少ないながらも遺物の包含が見られることから、第Ⅳ層上面を遺構検出面とする。重機による表土除去作業をA地区から開始。

11月16日（木）・17日（金）A地区の表土除去作業終了。

11月18日（土）発掘器材とベルコン搬入。

11月20日（月）A地区の南東端から人力による掘削と遺構検出作業を開始。I 48付近で計8個のピットを検出し、掘立柱建物SB1の柱穴となることを確認。また、性格不明の灰層SZ7も検出。

11月21日（火）掘立柱建物SB2を確認。

11月22日（水）SB1・SB2の柱穴と溝SD5を掘削。

11月24日（金）L45・M46付近で厚い砂層を検出。砂層の掘削を開始。

11月27日（月）～30日（木）砂層の掘削。砂層は幅3～4mの旧河道（SD6）となることを確認。

12月1日（金）SD6以西に堆積する礫層及び攪乱層の掘削を重機と人力の並行で実施。溝SD4を検出。A地区の遺構検出作業を終了し、B地区の表土除去作業を開始。

12月2日（土）・4日（月）A地区南西壁土層図作

成及びB地区南西壁土層図作成準備。

12月5日（火）ベルコンをB地区に移動。B地区の表土除去と遺構検出。立命館大学講師の青木哲哉氏に現場にて土層についての助言を得る。

12月6日（水）B地区の重機による表土除去作業完了。人力による遺構検出作業開始。

12月6日（水）B地区では削平・攪乱が予想以上に広範囲に及んでいることが判明。攪乱の程度、遺構の有無を確認するため、調査区内に縦横にトレンチを設定し、重機と人力で掘削開始。

12月7日（木）トレンチ掘削。攪乱は部分によっては地表面から深さ2m近くまで及んでいることを確認。遺構が残存している可能性があるのは調査区南西壁付近のみであると判明。

12月8日（金）調査区南西壁付近の遺構検出作業を徹底して行なう。ピットを数個検出するが、遺物は出土せず。

12月12日（火）作業員休み。調査区の平板測量。

12月13日（水）・15日（金）B地区全体の遺構検出作業。新たな遺構は検出できず。

12月18日（月）調査区清掃。A地区・B地区の南西壁土層図作成。

12月19日（火）調査区の写真撮影(リフト車による)。A地区・B地区の南西壁土層図作成。

12月20日（水）～12月21日（木）下層遺構の確認のためのトレンチを深さ2mを標準として重機で入れる。遺物・遺構とも全く認められず。

12月22日（金）各トレンチの土層図作成。

12月23日（土）現場での全作業を終了。

3. 調査の方法

第2次調査の調査区は、ほぼ中央を農業用水路が横断するため、この水路を挟んで北西側（宮川側）をA地区、南東側（県道伊勢・南島線側）をB地区と呼称した。

調査に際しての4m方眼の小地区割の基本軸は、道路センター測点STA608+80を原点とし、STA607+80を視準して設定した。各小地区には基本軸に直交してアルファベット、基本軸に沿って数

字を与え、各小地区の西隅の杭を小地区の名称とした。この小地区割作業は第1次調査の時点でを行い、第2次調査でもそれを踏襲した。

調査区の表土除去は重機で行い、その後、遺構検出面までの掘削は人力で行なった。

遺構実測は遺構密度が薄かったため平板測量で行い、調査区および各遺構の写真撮影は14mのリフト車を利用した。

4. 層 序

今回の調査区の地盤は宮川が形成した沖積層である。日本道路公団が実施した調査ボーリングでは、道路センター測点S T A 608+60（A地区内）においては、沖積層の全層厚が37.10～40.60mで、その土質構成は層厚0.40～5.65mの軟弱シルトを挟んで上下に砂層や砂礫が介在しているとの結果が出てい^⑧る。今回の発掘調査においても、調査区のほとんどで黄褐色のシルト厚い堆積がみられ、宮川に近いA地区北西側では砂層や砂礫が主体となっていくことが確かめられた。

調査区南西壁の土層断面を詳しく観察すると、基本的な層序は、第Ⅰ層：褐色砂質シルト層（耕作土）、第Ⅱ層：赤土・礫等を含む攪乱土層（圃場整備時の置土・攪乱土）、第Ⅲ層：褐色～黄褐色の砂質シルト～シルト中砂層、第Ⅳ層：にぶい黄褐色～黄褐色のシルト～砂混じりシルト層となる^⑨。第Ⅲ層・第Ⅳ層はさらに細分できるが、各層の変化は漸次的で、不明瞭である。遺物は主に第Ⅲ層中あるいは第

Ⅳ層上面で出土し、遺構が検出できた面は第Ⅳ層上面である。

基本的な層序として第Ⅰ層から第Ⅳ層までを述べてきたが、このように順に土層を追えるのは調査区南西壁に沿った幅数mの部分のみで、他の大部分は第Ⅳ層近くまであるいは第Ⅳ層上面よりさらに深くまで削平が行われており、第Ⅲ層が消滅していた。特にB地区では至るところで重機の爪跡が認められた。この削平は圃場整備事業が実施された際に行われたものと思われる。A地区はB地区ほどはひどく削平を受けていなかったが、A地区をほぼ東西に横切って流れる旧河道（SD6）を境として、北側の部分は遺物を含まない礫の堆積層が広がっていた。

各地点の標高は、A地区では耕作土上面が11.2～11.3m、第Ⅳ層上面が約10.8m、B地区では南西壁部分で耕作土上面が約12.1m、第Ⅳ層上面が約11.3m、B地区の他の部分では耕作土上面が約11.5m、第Ⅳ層上面が約11.2mである。

5. 遺構と遺物

遺構番号をつけたものは、掘立柱建物3棟と溝3条、性格不明の灰層1箇所である。遺物の出土量は整理箱8箱程度と少ない。

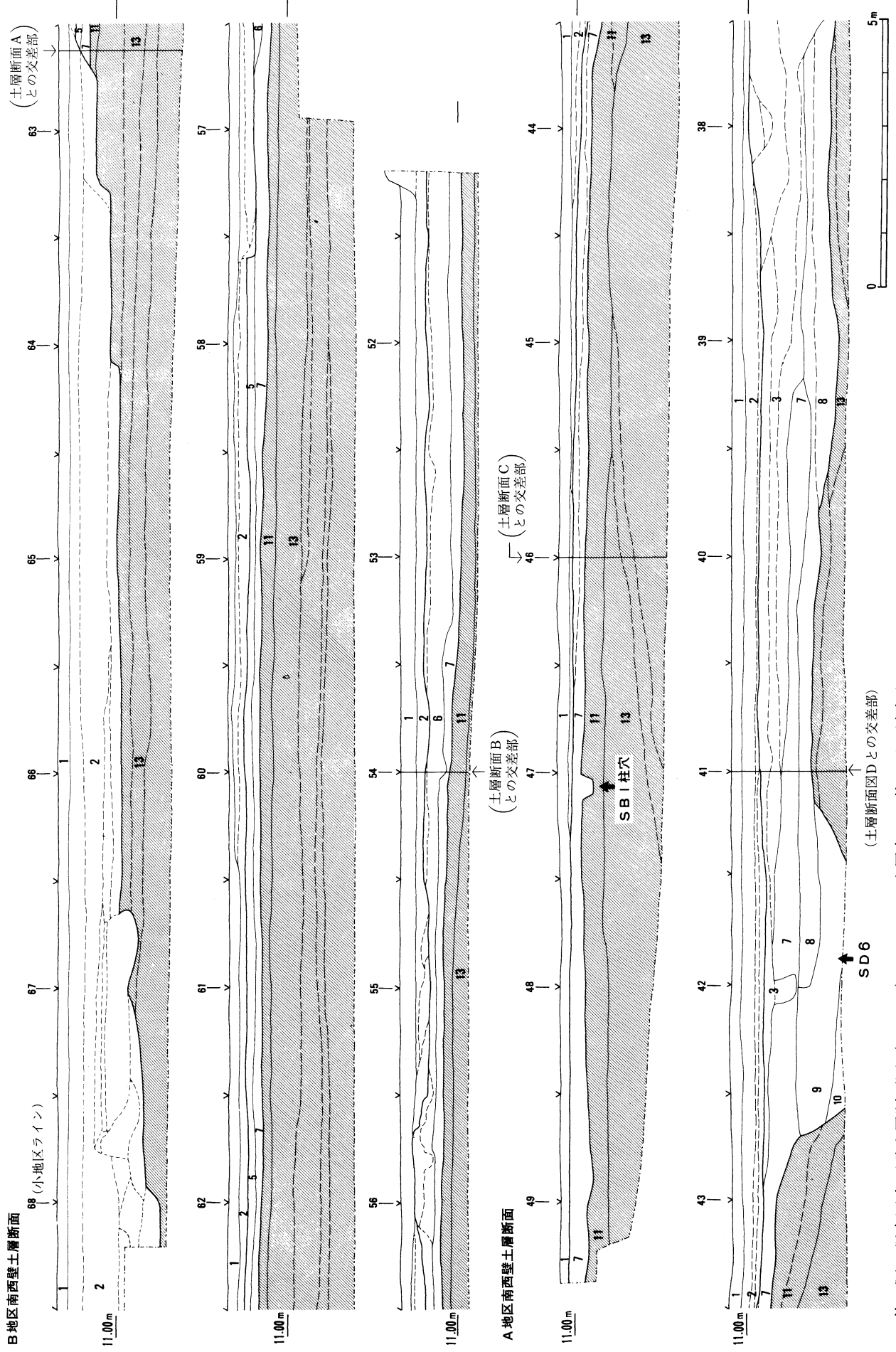
1 掘立柱建物

S B 1 A地区南端で4間分(8.7m)×1間分が検出されたのみで、全体の規模は不明である。東西棟の建物とすれば棟方向はN 80°Wとなる。柱間は桁行で西から2.0+2.3+2.4+2.0m、梁行は2.0mである。柱掘形は径約30cmの円形で、調査区南西壁の土層断面で観察すると、第Ⅳ層上面から掘り込まれていることがわかる。埋土は第Ⅲ層と同じであり、根石をもつものはない。この柱穴より土師器小皿(1)・椀(2・3)・甕(4)・鍋(5)、山茶椀(6)が出土した。出土遺物から、平安時代末葉の建物であろうと思われる。

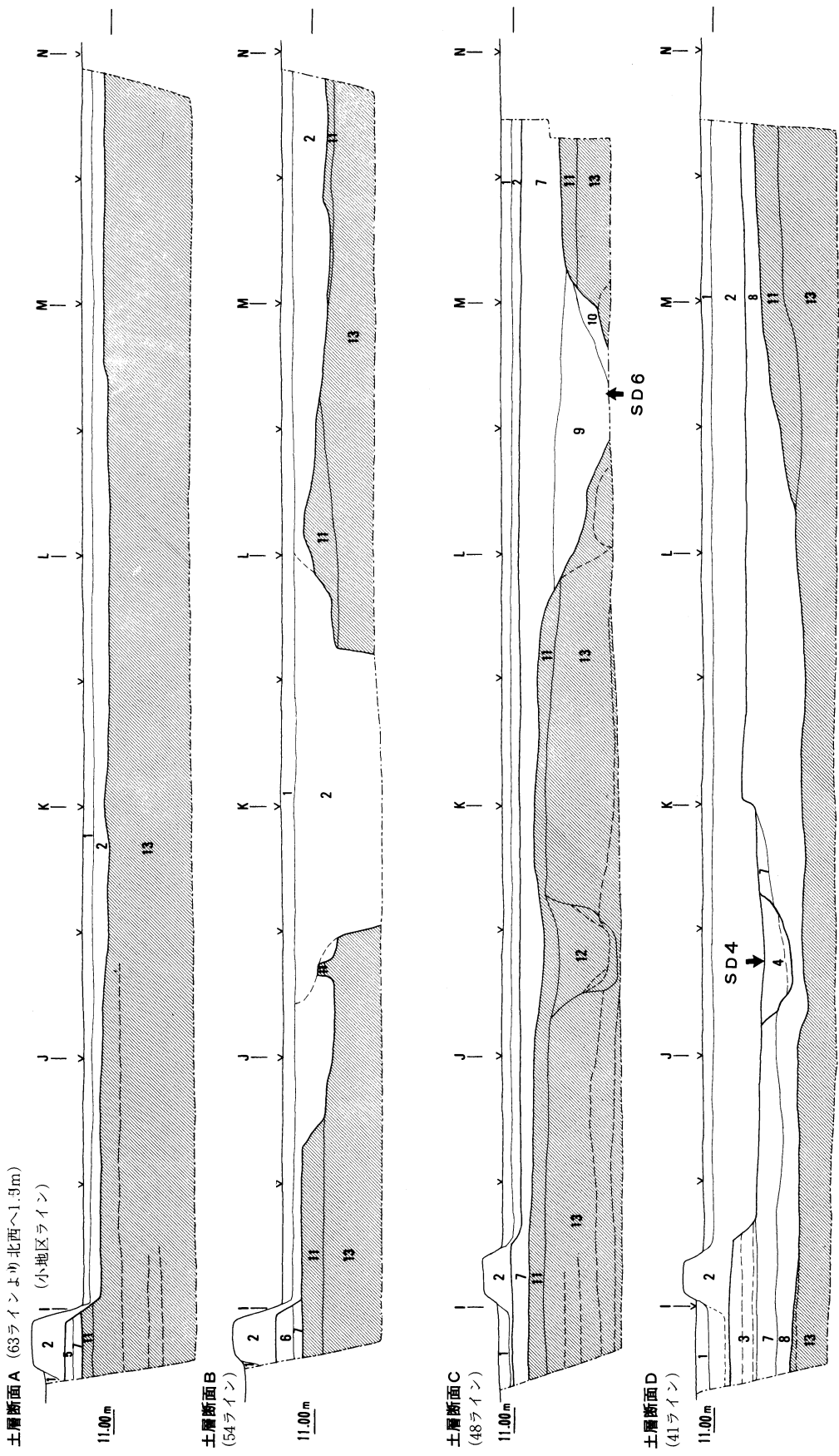
S B 2 S B 1と重複して検出されたが、S B 1

と切り合っている柱穴はない。検出されたのは3間分(6.7m)×1間分のみで、全体の規模は不明である。東西棟の建物とすれば棟方向はN 76°Wとなる。桁行は西方向に柱穴が検出されなかったことから西側にはのびないと思われる。梁行は南側にのびると思われるが、南西壁近くを深く掘削しすぎたため柱穴を検出できなかった。柱間は桁行で西から2.2+2.2+2.3m、梁行は、2.0mである。柱掘形は側柱が径約30cm、東柱が径約20cmの円形で、埋土は第Ⅲ層と同じであり、根石をもつものはない。建物柱穴より土師器小皿(7)・鍋(8)、山茶椀が出土した。出土遺物の時期はS B 1のものと同様であることから、S B 2も平安時代末葉の建物であろうと思われる。

S B 3 B地区の北西壁近くで検出できたピットと、やや不自然な状態で検出された大きめの石とを結んで3間(7.2m)の×2間(3.9m)の建物と想定し

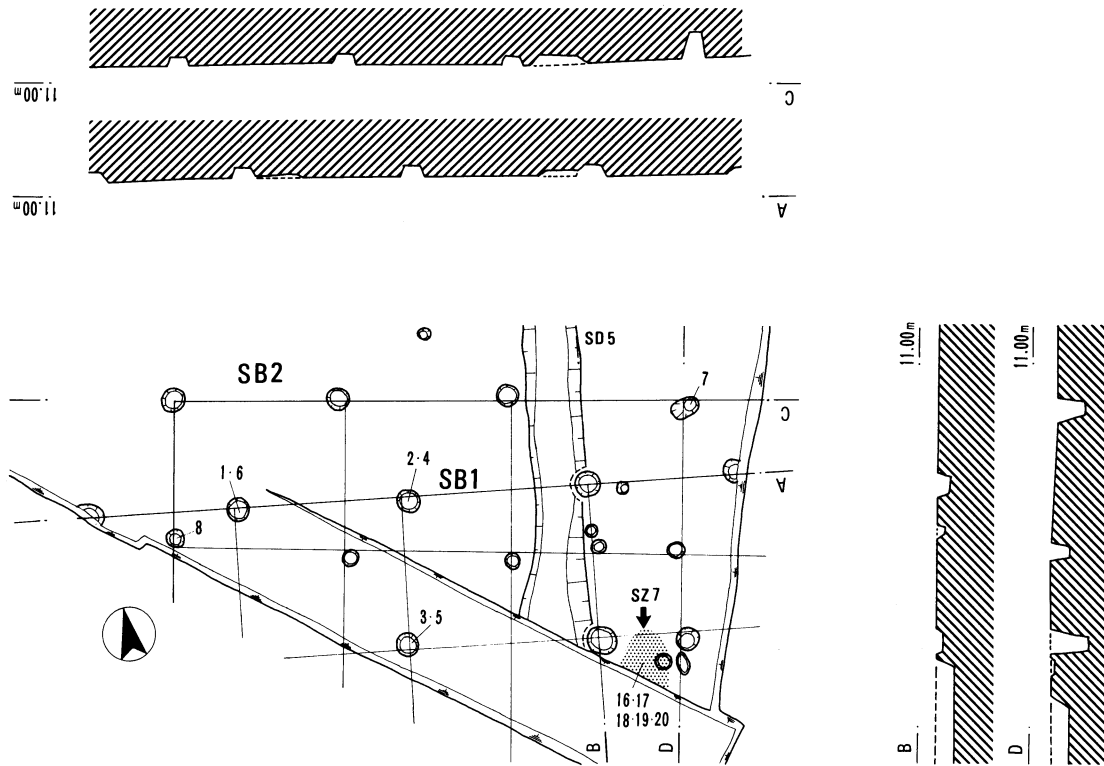


第5図 調査区南西壁土層断面図 (1.: 100) ※土層名は、第6図に対応する

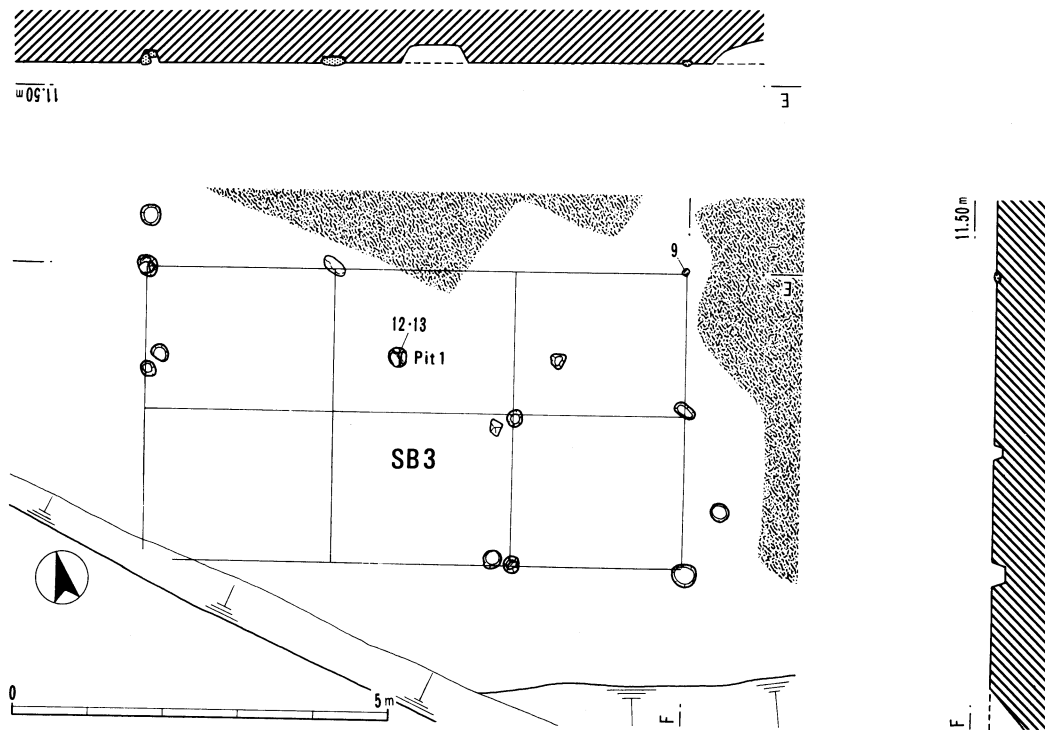


1. 10YR4/6褐色砂質シルト層 (耕作土・第I層)
2. 赤土・礫等を含む攪乱土層 (第II層)
3. 礫層および礫混シルト層
4. 10YR5/6黄褐色シルト中砂に鉄分が綿状に沈殿 (SD4埋土)
5. 10YR4/4褐色砂質シルト層 (第III層)
6. 10YR5/6黄褐色シルト中砂層 (第III層)
7. 10YR5/6黄褐色砂質シルト層 (第III層)
8. 10YR4/6褐色礫混じり砂質シルト層
9. 10YR4/6褐色砂層 (SD6埋土)
10. 10G6/1緑灰色砂層 (SD6埋土)
11. 10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルト層 (第IV層)
12. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト層 (自然小流路埋土)
13. 10YR5/6黄褐色砂混じりシルト層 (第IV層)

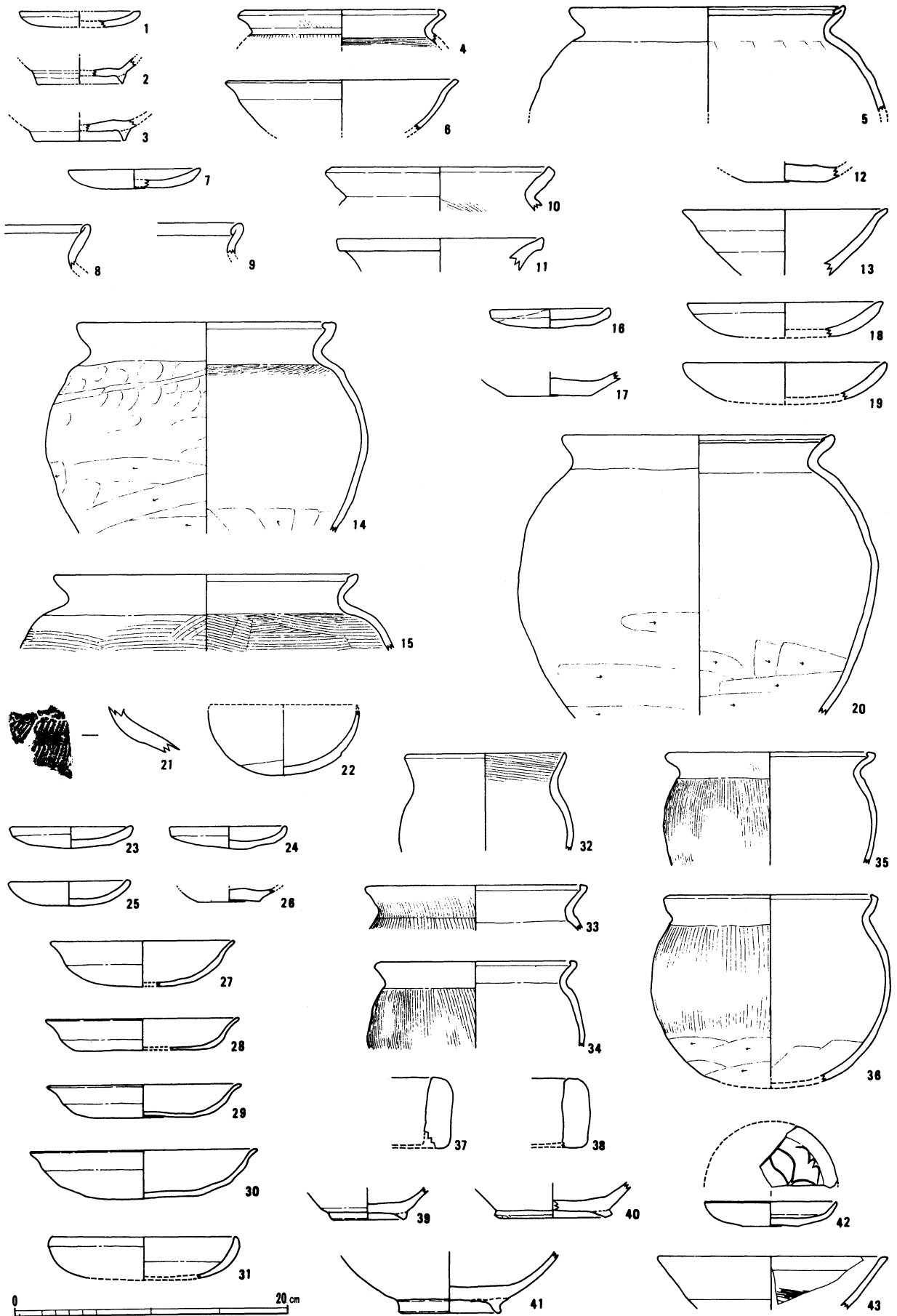
第6図 調査区横断土層断面図 (1:100)



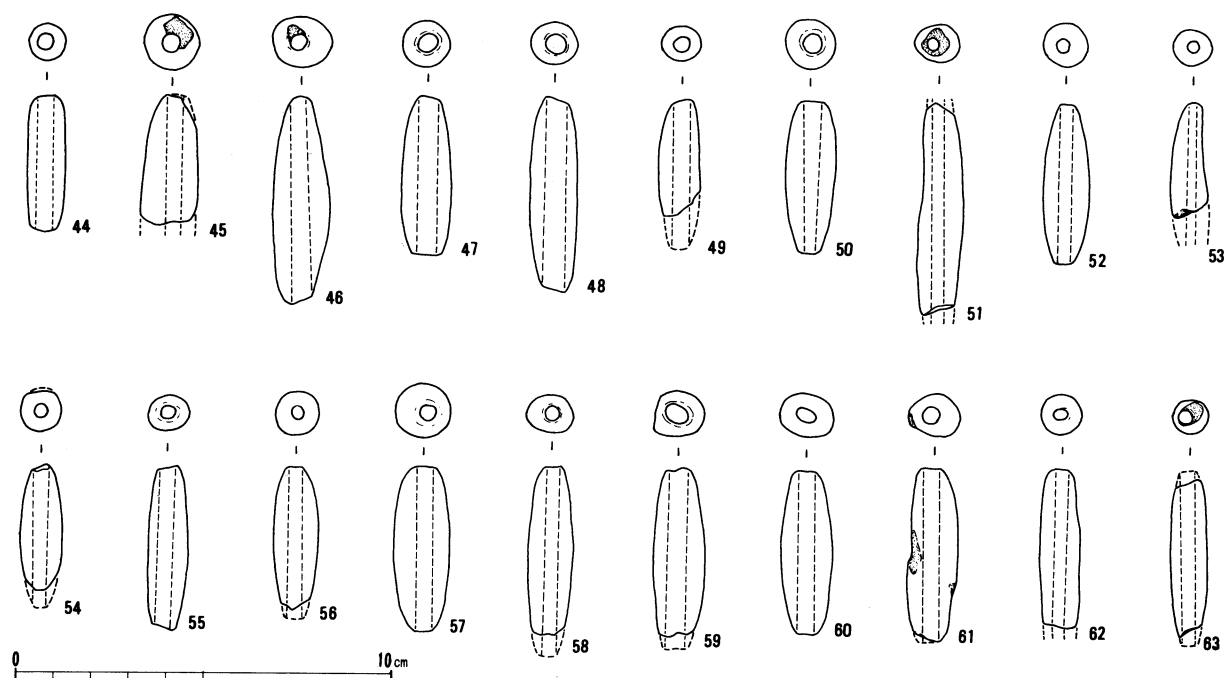
※図中の番号は遺物番号



第7図 SB1・SB2・SB3実測図(1:100)



第8图 出土遺物実測図 (1:4)



第9図 出土遺物実測図（1：2）

たが不確実である。ただし、この周囲は後世の削平をかなり受けているので、柱穴や根石が消滅していることも考えられることから、規模はともかくSB3の存在を全く否定することは出来ない。柱穴としたピットから平安時代末葉の土師器鍋(9)が出土した。

2 溝

SD4 A地区のほぼ中央を東西に横切るように検出された幅約1.0m、深さ0.2m程の浅い溝で、自然の小流路と思われる。溝の埋土は黄褐色のシルト中砂で、鉄分が縞状に沈澱していた。溝埋土中からは平安時代前葉と思われる土師器甕片(10)と灰釉陶器の壺片(11)が出土した。

SD5 A地区の南端で検出された幅約0.8m、深さ0.1m程の浅い溝で、北側へ行くほど浅くなり、消滅する。埋土はSB1・SB2の柱穴のものとはほとんど変わらないが、やや明るい色をしている。SB1の柱穴との切り合い関係から、SB1より古いことがわかる。溝埋土中からは平安時代中葉と思われる土師器杯・甕の小片がビニール袋で2袋程度と土錘(44・45)が出土した。

SD6 A地区をほぼ東西に横切って流れる幅4

～5mの旧河道である。遺構検出面からの深さは1～1.5mで、底近くで湧水する。埋土は全体にほぼ均質な粒子の褐色の砂で、底近くでは還元色となる。南側斜面部分から平安時代末葉の土師器鍋(14・15)が、河道底部分から平安時代末葉～鎌倉時代初頭と思われる山茶椀(40)が出土し、他の時期の遺物が全くみられないことから、SD6は遅くとも鎌倉時代初頭頃には存在していたと思われる。

3 その他の遺構

SZ7 A地区の南端部分で、遺構検出面直上に径0.7m程の範囲に薄い灰層がみられた。その灰層の中からは土師器小皿(16)・杯(17)・皿(18・19)・鍋(20)などの土器が整理箱で1箱程度出土したが、灰層の下には土坑等の遺構は見られず、焼土も確認できなかった。時期はSB1・SB2出土のものとはほぼ同じで、平安時代末葉と思われる。灰層の位置はSB1・SB2と重複していることから、これらの建物に関する可能性が高いと考えられるが、その性格は不明である。

Pit 1 B地区で検出されたピットで、平面形は径約25cmの円形、深さは約25cmである。ピット底には径約15cm程の円礫が2個詰まっており、その円礫

遺物番号	器種	出土位置	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	調整番号
1	土師器小皿	H47 S B 1 柱穴	口径不確定	口縁部ヨコナデ。外面指オサエ、内面ナデ?	10YR7/3にぶい黄橙砂粒含	小片		17-0001
2	土師器碗	I 48 S B 1 柱穴	台径6.2?	内外面ロクロナデ。底部外面糸切り痕。	7.5YR6/8 橙微砂粒含	小片	ロクロ土師器。	17-0004
3	土師器碗	H48 S B 1 柱穴	台径6.5?	内外面ロクロナデ。底部外面糸切り痕。	7.5YR5/2 灰褐微砂粒含	台部: 1/4	ロクロ土師器。	17-0003
4	土師器甕	I 48 S B 1 柱穴	口径14.2?	口縁部ヨコナデ。肩部内外面ヨコハケ。	10YR7/4にぶい黄橙細砂粒含	口縁: 1/4		17-0005
5	土師器鍋	H48 S B 1 柱穴	口径20?	口縁部ヨコナデ。胴部外面指オサエ、内面板ナデ。	10YR8/2 灰白砂粒多含	口縁: 1/4	内面に炭化物付着。	17-0002
6	陶器碗 (山茶碗)	H47 S B 1 柱穴	口径16.5?	内外面ロクロナデ。	7.5GY8/1 明緑灰細砂粒含	口縁: 1/6	輪花有り。	17-0006
7	土師小皿器	I 48 S B 2 柱穴	口径9.5? 器高1.4?	口縁部ヨコナデ。外面指オサエ、内面ナデ。	10YR7/4にぶい黄橙砂粒含	口縁: 1/5		17-0007
8	土師器鍋	H47 S B 2 柱穴	口径不明	口縁部ヨコナデ。	10YR8/2 灰白砂粒多含	小片	外面に媒付着。	17-0008
9	土師器鍋	J 63 S B 3 柱穴	口径不明	口縁部ヨコナデ。	10YR8/2 灰白砂粒多含	小片	外面に二次焼成を受ける。	17-0009
10	土師器甕	K 43 S D 4	口径15.9?	口縁部ヨコナデ。肩部内面ナメハケ。	10YR8/4 浅黄橙砂粒含	口縁: 1/12	外面に媒付着。	17-0030
11	陶器壺 (灰釉壺)	M44 S D 4	口径15?	内外面ロクロナデ。	7.5GY8/1 明緑灰精良	口縁: 1/10		17-0031
12	土師器杯	I 62 Pit 1	底径5.8?	内外面ロクロナデ。底部外面糸切り痕。	10YR7/3にぶい黄橙砂粒多含	底部: 1/2	ロクロ土師器。表面剥離進む。	17-0033
13	陶器碗 (山茶碗)	I 62 Pit 1	口径14.8?	内外面ロクロナデ。	7.5GY7/3 明緑灰微砂粒含	口縁: 1/8		17-0032
14	土師器鍋	L 47 S D 6 斜面	口径18.2? 胴径23.6?	口縁部ヨコナデ。胴部外面指オサエ、内面ナデ、肩部内面ハケ、胴部下半内外面ヘラケズリ。	10YR8/3 浅黄橙砂粒多含	口縁: 1/4 胴部: 1/8	外面に媒付着。	17-0055
15	土師器鍋	L 47 S D 6 斜面	口径22.2?	口縁部ヨコナデ。肩部内外面ヨコハケ。	5YR8/3 淡橙砂粒多含	口縁: 1/6	外面に媒付着。	17-0054
16	土師器小皿	I 48 S Z 7	口径8.5	口縁部ヨコナデ。外面指オサエ、内面ナデ?	7.5GY8/1 灰白砂粒多含	口縁: 1/2	表面剥離進む。	17-0060
17	土師器杯	I 48 S Z 7	底径6.1	内外面ロクロナデ。底部外面糸切り痕。	2.5YR7/8 橙砂粒多含	底部: 完存	ロクロ土師器。	17-0059
18	土師器皿	I 48 S Z 7	口径14.3?	口縁部ヨコナデ。外面指オサエ、内面ナデ。	7.5YR8/2 灰白砂粒多含	口縁: 1/6	表面剥離進む。	17-0062
19	土師器	I 48 S Z 7	口径14.6?	内面ヨコナデ。	7.5YR8/2 灰白砂粒多含	口縁: 1/5	表面剥離進む。	17-0061
20	土師器鍋	I 48 S Z 7	口径19.4 胴部26.3?	口縁部ヨコナデ。胴部外面指オサエのち軽いナデ、内面ナデ。胴部下半内外面ヘラケズリ。	10YR7/3にぶい黄橙砂粒多含	口縁: 5/6 胴部: 1/5	外面に媒付着。	17-0063
21	弥生土器壺 第Ⅱ層	J 59		外面に竹管文列1段。櫛齒刺突列2段。	10YR8/4 浅黄橙微砂粒含	小片		17-0058
22	土師器碗 第Ⅲ層	L 60		内面ナデ。	7.5YR8/3 浅黄橙砂粒多含	底部: 完存	表面剥離進む。	17-0040
23	土師器小皿 第Ⅲ層	H 49	口径8.8 器高1.6	口縁部ヨコナデ。外面指オサエ、内面ナデ。	10YR8/2 灰白砂粒多含	口縁: 1/2		17-0035
24	土師器小皿 第Ⅲ層	I 49	口径8.5 器高1.7	口縁部ヨコナデ。外面指オサエのち軽いナデ、内面ナデ。	10YR8/2 灰白砂粒多含	ほぼ完存		17-0039
25	土師器小皿 第Ⅲ層	I 48	口径8.5? 器高1.8?	内面ナデ。	10YR8/4 浅黄橙砂粒多含	口縁: 1/4	表面剥離進む。	17-0036
26	土師器小皿 第Ⅲ層	I 49	底径4.6	内外面ロクロナデ。底部外面糸切り痕。	10YR8/3 浅黄橙精良	底部: 完存	ロクロ土師器。	17-0034
27	土師器杯 第Ⅲ層	I 43	口径13.3? 器高3.3?	口縁部ヨコナデ。外面指オサエのちナデ、内面ナデ。底部中央付近外面ヘラケズリ。	7.5YR7/6 橙微砂粒含	口縁: 1/6		17-0045
28	土師器杯 第Ⅲ層	J 46	口径14.0? 器高2.3?	口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/8 黄橙微砂粒含	口縁: 1/6	表面剥離進む。	17-0044
29	土師器杯 第Ⅲ層	J 48	口径13.8? 器高2.4?	口縁部ヨコナデ。外面指オサエ、内面ナデ。	7.5YR7/5 橙微砂粒含	口縁: 1/5		17-0043

第3-1表 出土土器観察表

遺物番号	器種	出土位置	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	調整番号
30	土師器杯	J 47 第Ⅲ層	口径16.6? 器高3.5?	口縁部ヨコナデ。外面指オサエ、内面ナデ。	7.5YR7/6 橙 微砂粒含	口縁：1/3		17-0042
31	土師器皿	J 48 第Ⅱ層	口径13.4?	口縁部ヨコナデ。外面指オサエのちナデ、内面ナデ。	10YR7/2 にぶい橙 精良	口縁：1/4		17-0037
32	土師器甕	I 57 第Ⅱ層	口径11.5?	口縁部内部面にハケ痕	10YR8/3 浅黄橙 砂粒多含	口縁：1/8	表面剥離進む。	17-0053
33	土師器甕	I 48 第Ⅲ層	口径15.5?	口縁部ヨコナデ。外面にハケ痕。肩部外面ハケ、内面ナデ。	7.5YR8/4 浅黄橙 砂粒多含	口縁：1/6		17-0050
34	土師器甕	I 48 第Ⅲ層	口径14.2?	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面指オサエのちナデ?	7.5YR7/6 橙 微砂粒含	口縁：1/8	表面剥離進む。	17-0049
35	土師器甕	I 47 第Ⅲ層	口径14.8? 胴径15.6?	口縁部ヨコナデ、外面にハケ痕。胴部外面ハケ、内部ナデ。	5YR8/4 淡橙 微砂粒含	口縁：1/8 胴部：1/6	表面剥離進む。	17-0051
36	土師器甕	J 47 第Ⅲ層	口径14.8 胴径17.5?	口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケのちナデ、内面ナデ。底部内外面ヘラケズリ。	10YR7/3 にぶい橙 砂粒多含	口縁：1/8 胴部：1/4	口縁部～肩部の外面に煤多く付着。	17-0048
37	製塩土器	J 45 第Ⅲ層	器高5.1?	外面指オサエのちナデ。内面オサエ。	2.5 YR6/8 橙 砂粒多含	小片	同一個体の可能性有り。	17-0046
38	製塩土器	J 46 第Ⅲ層	器高5.1?			小片		17-0047
39	陶器小椀	H 49 第Ⅲ層	台径5.1	内外面ロクロナデ。底部外面糸切り痕。	7.5GY8/1 明緑灰 微砂粒含	台部：完存		17-0052
40	陶器椀	M 49 SD6底	台径7.6	内外面ロクロナデ。底部外面糸切り痕。	7.5 GY8/1 明緑灰 砂粒含	台部：1/2	高台端部に粗穀痕。	17-0057
41	陶器椀 (山茶椀)	L 44 包含層 第Ⅱ層	台径7.0	内外面ロクロナデ。底部外面糸切り痕。	10GY7/1 明緑灰 砂粒含	台部：1/2		17-0056
42	磁器小皿器 (白磁小椀)	A 地区 第Ⅱ層	口径9.6? 器高1.8? 底径4.1?	底部外面無釉、糸切り痕残る。内面にヘラ状工具による文様。	釉：2.5GY7/1 明オリブ灰 胎：10Y8/1 灰 白	口縁：1/6 底部：1/6		17-0041
43	磁器椀 (白磁椀)	L 58 第Ⅱ層	口径16.6?	内面に櫛状工具による文様。	釉：2.5GY7/1 明オリブ灰 胎：10Y8/1 灰 白	口縁：1/7		17-0038

第3-2表 出土土器観察表

遺物番号	出土位置	計測値			色調	胎土	残存土	備考	整理番号
		長さ (cm)	直径 (cm)	重さ (g)					
44	I 48 S D 5	3.6	1.0	3.3	7.5YR6/8 橙	砂粒含	完存		17-0010
45	I 48 S D 5	—	1.5	—	10YR 7/3 にぶい黄橙	微砂粒含	一部欠		17-0011
46	H 43 第Ⅲ層	5.5	1.5	8.1	10YR 8/3 浅黄橙	精良	完存	黒変部分有。	17-0012
47	H 43 第Ⅲ層	4.2	1.3	5.1	10YR 7/3 にぶい黄橙	精良	完存		17-0013
48	I 43 第Ⅲ層	5.2	1.3	5.4	10YR 8/2 灰 白	精良	完存		17-0014
49	I 46 第Ⅲ層	—	1.1	—	10YR 8/2 灰 白	精良	一部欠		17-0015
50	I 46 第Ⅲ層	4.0	1.4	6.1	10YR 8/3 浅黄橙	精良	完存	黒変部分有。	17-0016
51	I 46 第Ⅲ層	—	1.2	—	10YR 8/2 灰 白	精良	一部欠		17-0017
52	J 46 第Ⅲ層	4.2	1.2	5.0	10YR 8/3 浅黄橙	精良	完存	黒変部分有。	17-0018
53	K 46 第Ⅲ層	—	1.0	—	10YR 6/8 明黄橙	精良	一部欠		17-0019
54	J 46 第Ⅲ層	—	1.2	—	10YR 6/8 明黄橙	細砂粒含	一部欠		17-0020
55	J 47 第Ⅲ層	4.3	1.1	3.9	10YR 8/2 灰 白	細砂粒含	完存		17-0021
56	I 47 第Ⅲ層	—	1.2	—	10YR 7/4 にぶい黄橙	精良	一部欠		17-0022
57	I 48 第Ⅲ層	4.3	1.5	8.2	10YR 8/4 浅黄橙	精良	完存		17-0023
58	I 47 第Ⅲ層	—	1.2	—	10YR 8/3 浅黄橙	微砂粒少含	一部欠	黒変部分有。	17-0024
59	I 47 第Ⅲ層	—	1.4	—	10YR 8/1 灰 白	微砂粒含	一部欠	黒変部分有。	17-0025
60	I 48 第Ⅲ層	4.3	1.4	6.7	10YR 8/2 灰 白	精良	完存	黒変部分有。	17-0026
61	I 48 第Ⅲ層	4.6	1.3	6.1	10YR 8/2 灰 白	微砂粒含	一部欠	黒変部分有。	17-0027
62	I 57 第Ⅱ層	—	1.1	—	10YR 8/2 灰 白	精良	一部欠		17-0028
63	I 57 第Ⅱ層	—	1.0	—	10YR 8/2 灰 白	精良	一部欠		17-0029

第4表 出土土錘観察表

上から平安時代末葉のものと思われるロクロ土師器杯(12)と山茶碗(13)とが出土した。掘立柱建物あるいは柵列の柱穴の可能性も考えられるが、このピットに伴うと思われるピットは確認できなかった。

4 遺構出土以外の遺物

ほとんどが第Ⅲ層から出土したもので、第Ⅰ層・第Ⅱ層出土のものはわずかである。

弥生時代のもは平底の壺底部片、後期の壺肩部片(21)などがみられるが、点数は極めて少ない。

古墳時代のもも少なく、土師器は碗(22)・甕(32)のほか高杯の柱状部が1点、須恵器は蓋杯の破片と思われるものが数点と提瓶あるいは平瓶の体部と思われる破片が1点あるのみである。

この時代の遺物は全てB地区から出土している。

奈良時代のもとは断定できる遺物は全くなく、次

の平安時代の遺物が多くみられる。平安時代のものは大きく平安時代中葉頃と末葉頃のものに分けることができる。

平安時代中葉頃とした遺物の量は整理箱に1箱程度で、土師器杯(27~30)・甕(33~36)、製塩土器(37・38)などがある。これらの遺物は主にA地区から出土した。

出土遺物量は平安時代末葉頃としたものが最も多く、土師器小皿(31)・皿(23~25)・鍋、ロクロ土師器杯・小皿(26)、陶器小碗(39)、山茶碗(41)、白磁小皿(42)・碗(43)などがある。

その他、土器類では近世以降の陶磁器類が少量出土している。

土器以外の遺物では、土錘(46~63)が目立つ。平安時代のもと思われるが、時期の限定はできない。

4. 結 語

今回の調査区は、地形的には、昭和58年(1983)度の発掘調査で検出された中世の掘立柱建物群が築かれていたシルト層が分布する北辺部分に位置している。このことから、濃い遺構密度は期待できないながらも、遺跡の範囲や性格をある程度明確にできる資料が得られるものと思われたが、削平による地形の改変が予想以上に広範囲にわたって及んでいたため、得られた成果は極めて限られたものであった。ここでは、発掘調査や整理作業を進めて行く中で気付いた事項のいくつかを列記するのみで結語とした。

A地区で検出された掘立柱建物2棟(SB1・SB2)は、昭和58年(1983)度の遺構検出面とほぼ同じシルト層で検出された。このシルト層までの深さはSD6(旧河道)を境として急激に増し、宮川の方へと落ち込んでいく。このことから、SB1・

SB2の周辺は中ノ垣外遺跡における中世集落の北限近くにあると思われる。また、A地区では平安時代中葉頃の土器が比較的多く出土した。昭和58年度の発掘調査ではこの時代の遺構や遺物はあまり検出されていないが、今後、A地区の南側付近で遺構が発見される可能性が考えられる。

B地区にはしっかりとシルト層が全面に広がっており、中世集落に関係する何らかの遺構が存在していたとしても不思議はないが、残念ながら遺構検出面より深く削平や攪乱が及んでいたため、それを確認することはできなかった。しかし、井戸や溝などの痕跡すら認められなかったということは、本来遺構があまり存在していなかったと考えた方がよさそうに思われる。

このように、今回の調査では中ノ垣外遺跡の北端をほぼ確認できたといえる。(前川嘉宏)

〔註〕

- ①主に『三重県伊勢市遺跡分布地図』伊勢市教育委員会 1981を参考にした。
- ②岩中淳之『佐八藤波遺跡発掘調査報告』伊勢市教育委員会 1990
- ③本書で報告。
- ④本書で報告。
- ⑤新田洋『Ⅷ 伊勢市津村町 中新田遺跡』『昭和56年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982

- ⑥高見宜雄、岩中淳之「X 伊勢市佐八町 中ノ垣外遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1984
- ⑦小坂宜広 他「蚊山遺跡」『近畿自動車道(勢和~伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報VI』1990
- ⑧『近畿自動車道伊勢線 宮川橋他1橋第一次基礎地盤調査報告書』日本道路公団名古屋建設局松阪工事事務所 1987
- ⑨土層名については立命館大学講師の青木哲哉氏の助言を得た。

PL 1



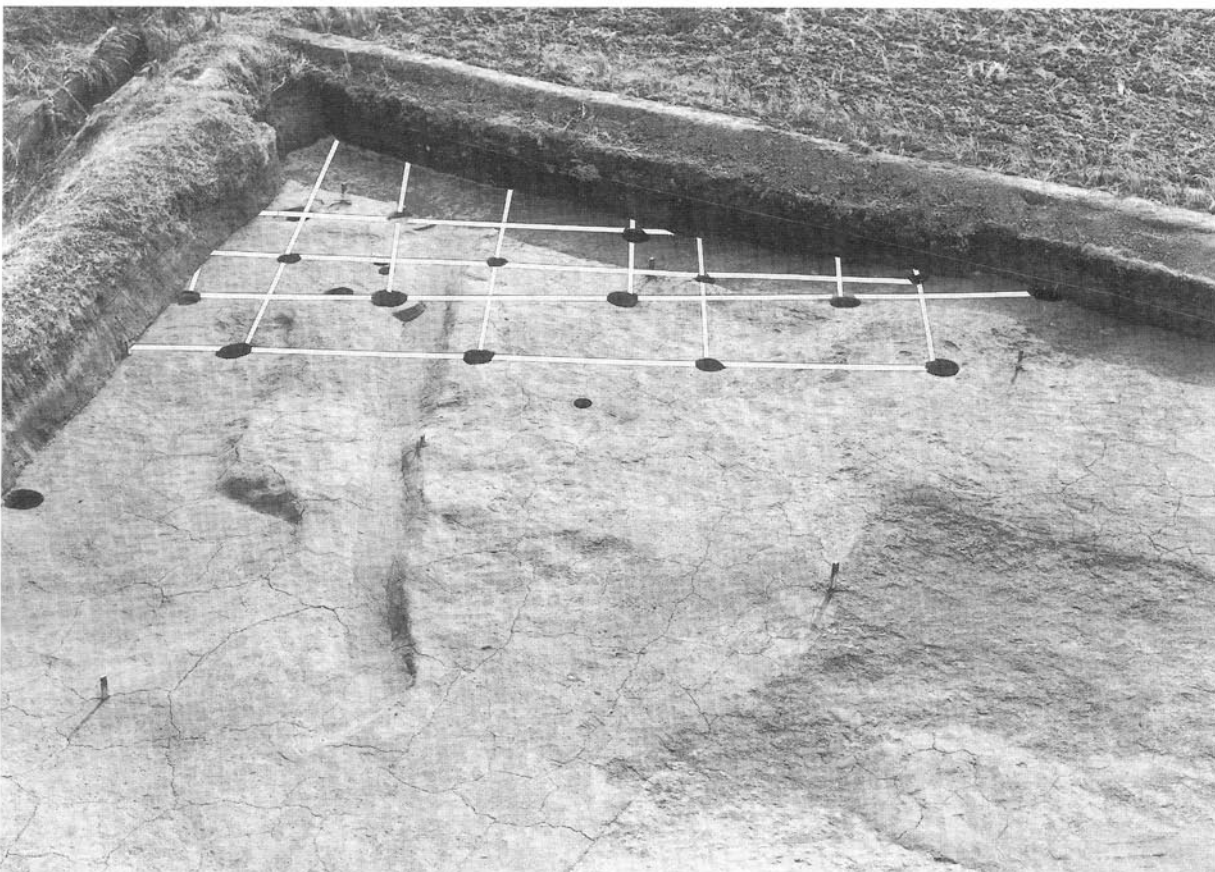
調査前遠景（北西上空から）



調査区全景（南東から）

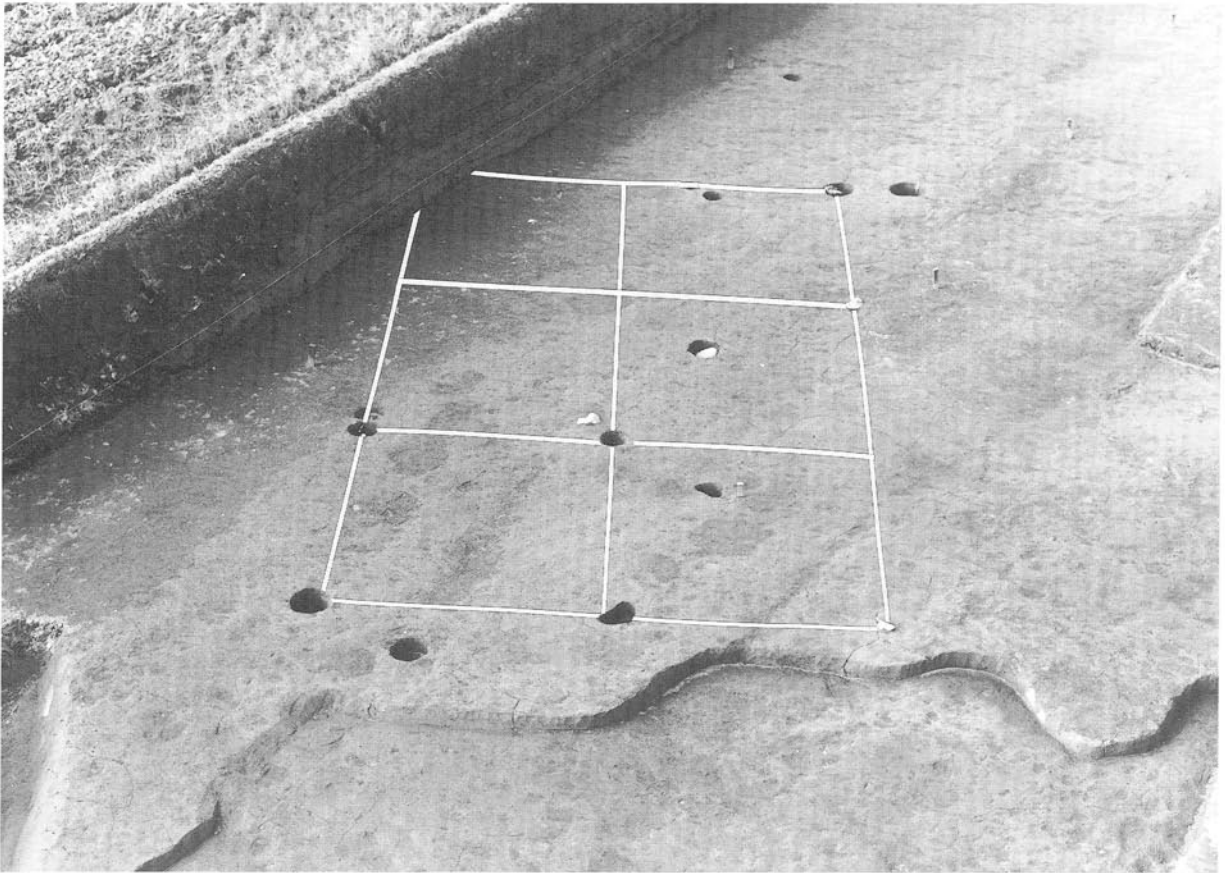


調査区全景（北西から）



SB1・SB2・SD5（北から）

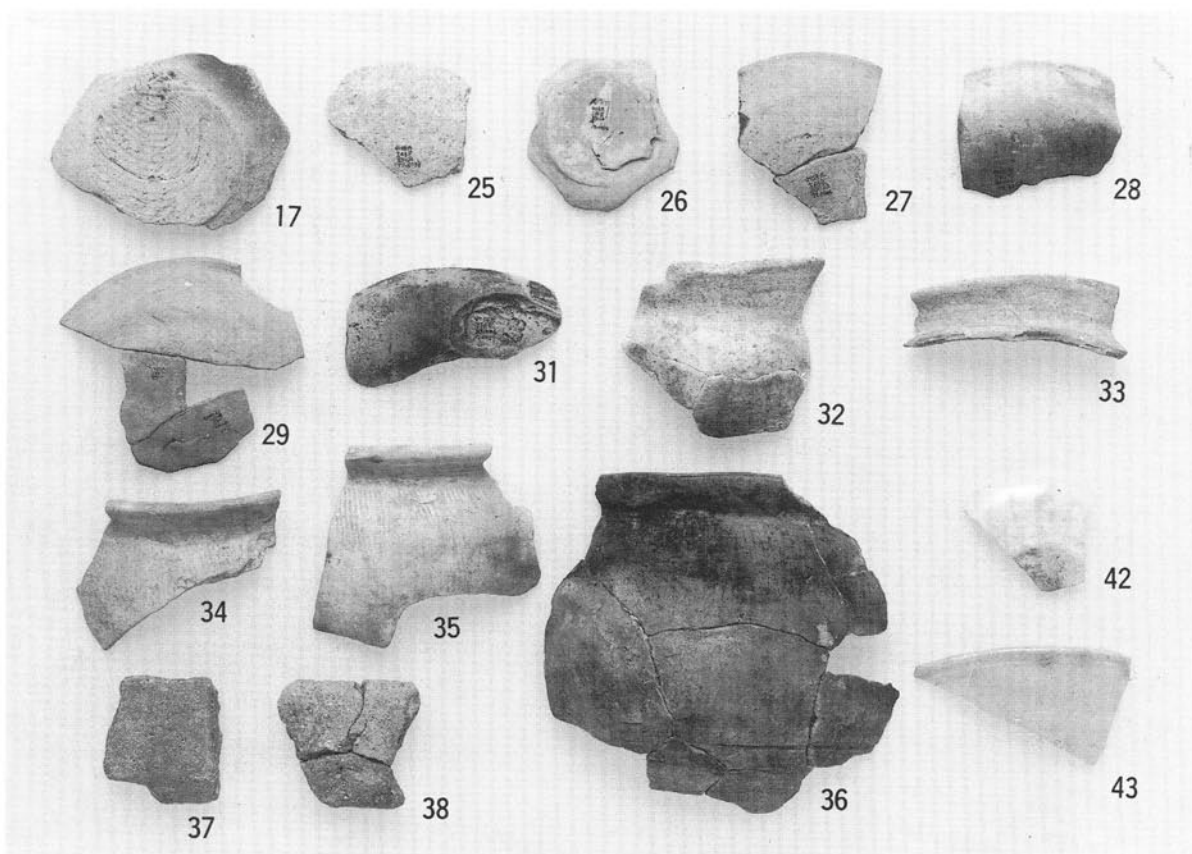
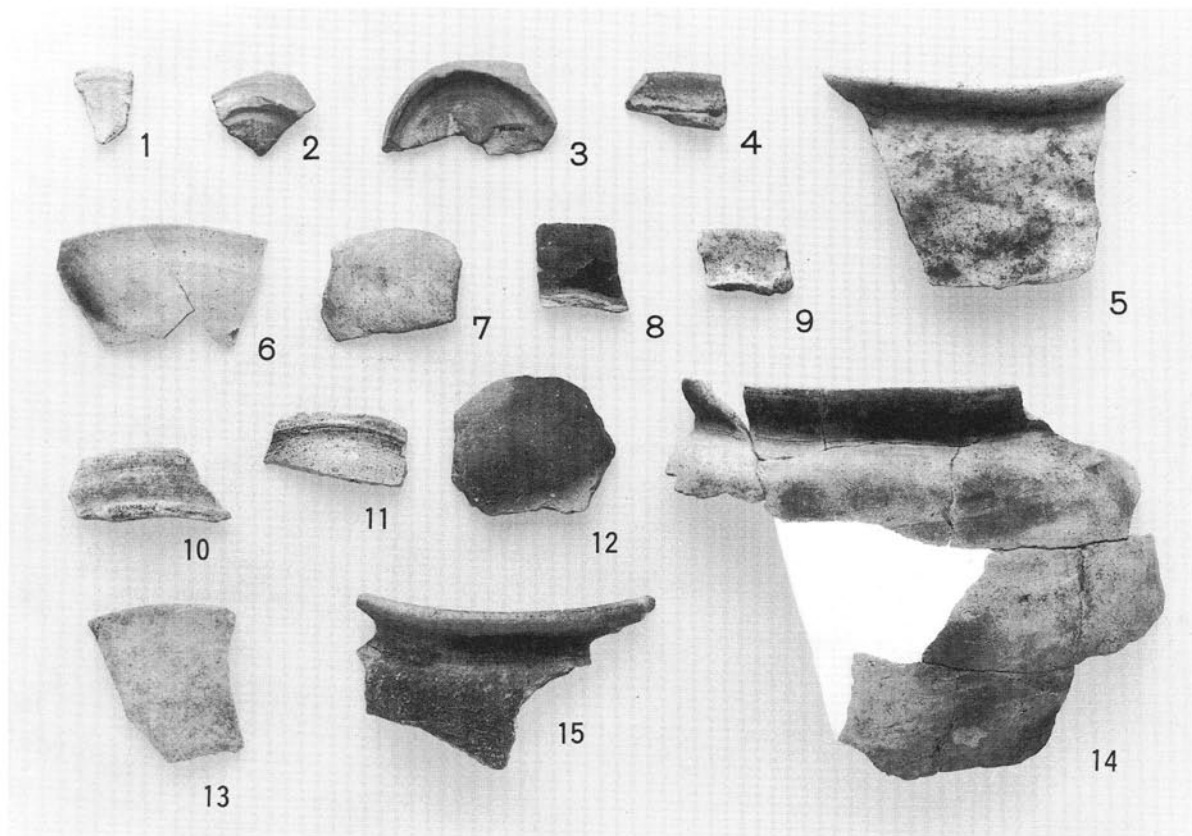
PL 3



SB 3 (東から)

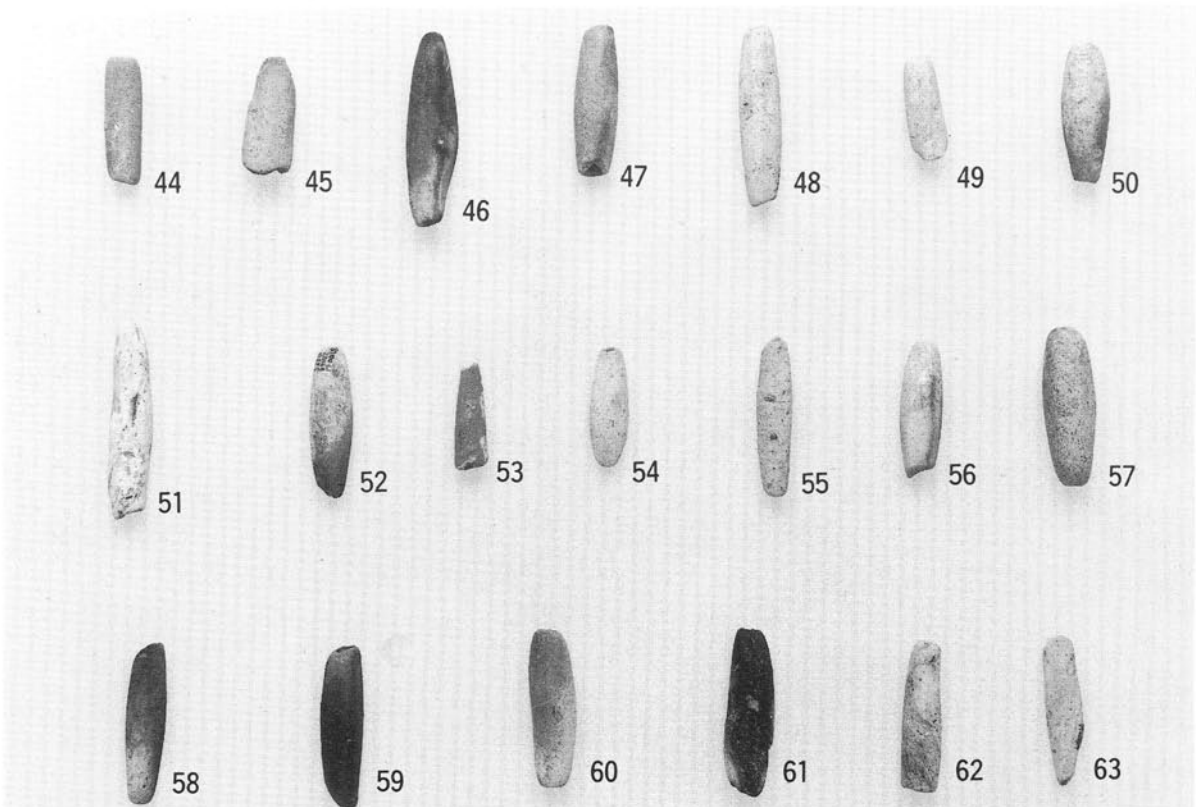
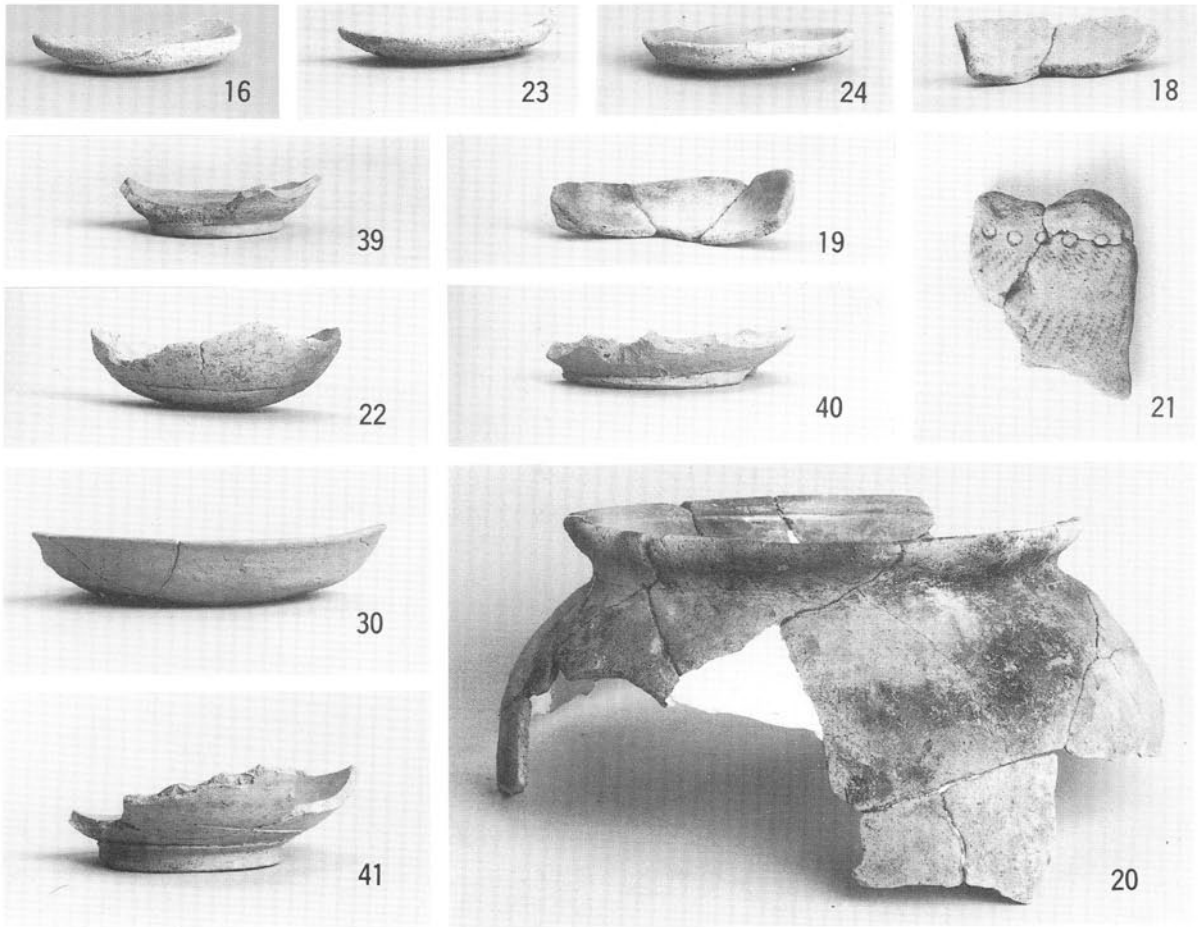


作業風景



出土遺物 (1 : 3)

PL 5



出土遺物 (21・44~63=1:2, 他は1:3)

Ⅲ. 伊勢市^{そうち}佐八町 ^{てらはら}寺原B遺跡 (18)

1. はじめに

寺原B遺跡は、行政的には伊勢市佐八町字寺原に属する。中ノ垣外遺跡^①の南東約100mにあって、県道伊勢・南島線を西に押し出すように舌状に張り出す玉田山の南西緩斜面に位置する。遺跡の標高は約16.5m、そこからは中ノ垣外遺跡が一望でき、宮川の流れを遠望できる。標高約80mの玉田山には、頂上付近に径約10mの玉田山古墳があり、北側麓に

はすでに消滅した寺原古墳や、須恵器、土師器、山茶碗が散布する寺原遺跡が確認^②されている。

地質的には三波川変成岩類が広く分布する三波川帯に属し、内部における基本的構造は結晶片岩類の泥質片岩を中心に、緑色片岩、珪質片岩(原岩はチャート)^③が挟在する。

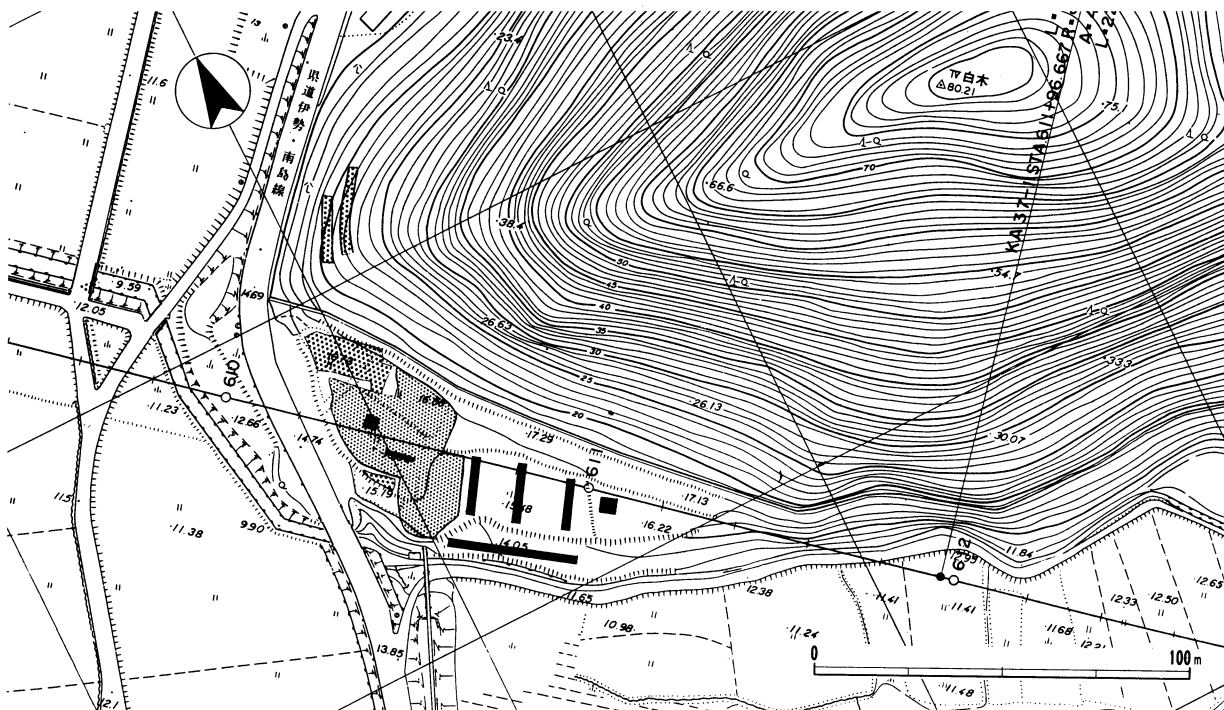
2. 調査方法

第1次調査は、平成元(1989)年10月から行った。4mのグリッド3箇所とトレンチ4箇所を設定し調査したところ、調査区西から遺構が検出された。そこで、同年11月22日から翌平成2(1990)年1月20日の期間、調査区西側県道寄りの約500㎡を対象に第2次調査を実施することにした。

調査に際しての地区割は、中ノ垣外遺跡(STA608+80とSTA607+80)から基準線を取り、その延長

として当遺跡へ設定した。地区設定は、原則に従って行った。

掘削は、表土をバック・フォーで20cm掘り下げ、その後は人力で少しずつ面的に掘り下げた。掘削途中、トレンチを5本入れ、遺構の確認を試みた。下層遺構を確認するために、調査区中央部約6m四方で面的掘削を試みた。さらに、中世遺構検出面から下、約1.2mまで下層調査を試みた。



第10図 調査区位置図(1:2,000) 〰は県道伊勢南島線道路改良事業に伴う調査区

3. 層 序

土層断面観察は、北断面で実施することにした。

基本的な層序は下記の4層から成る。

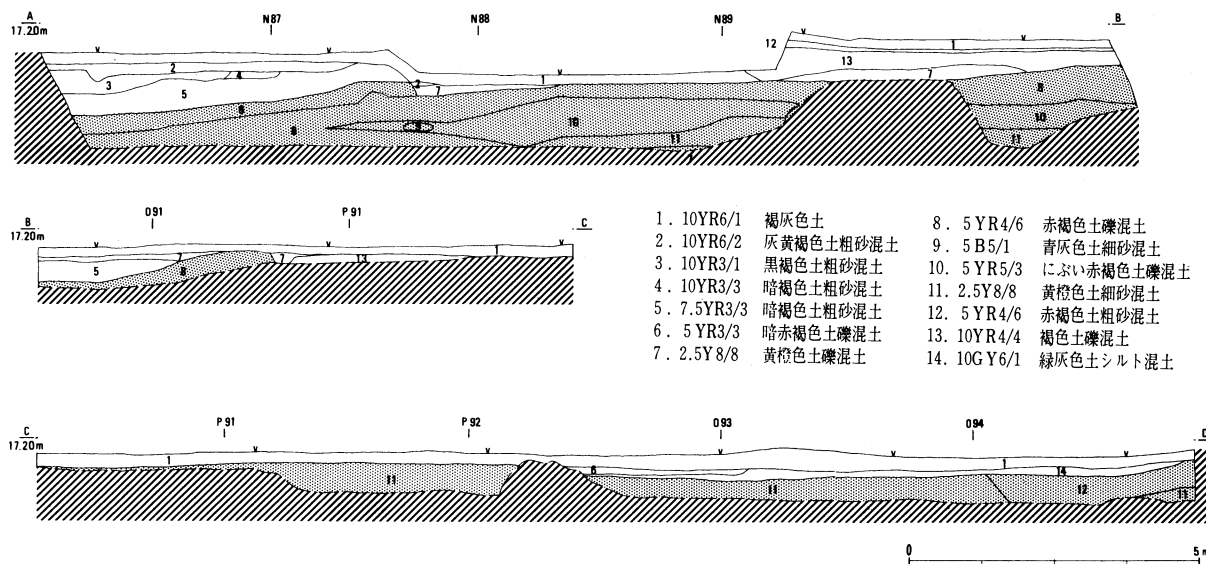
第Ⅰ層………褐灰色土（耕作土）

第Ⅱ層………黄橙色礫混土（床土）

第Ⅲ層………暗褐色粗砂混土（遺物包含層）

第Ⅳ層………赤褐色粗砂混土

第Ⅲ層（遺物包含層）は、西側県道寄から調査区中央部でほぼ消え、以東は第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅳ層の3層から成る。中世の遺構検出面は第Ⅳ層上面であった。



第11図 調査区土層断面図（1：100）

4. 遺 構

主な遺構は、掘立柱建物1棟、土坑7基、溝2条である。以下、種類別に述べる。

（1）掘立柱建物

SB9 当遺構は調査区北端に位置する。第1次調査や県道橋脚工事で、柱穴が一部削平されたため桁行の全貌は明らかでない。復元すると、3間×3間の総柱建物と推定される。柱間は、桁行が2.25+2.08+2.14m、梁行が1.88+1.92+1.94mである。棟方位はN14°Wを示す。柱掘形は、直径20~30cm、深さ18~32cmである。根石と思われる扁平な河原石が7ヶ所から出土した。柱穴埋土は第Ⅲ層の暗褐色

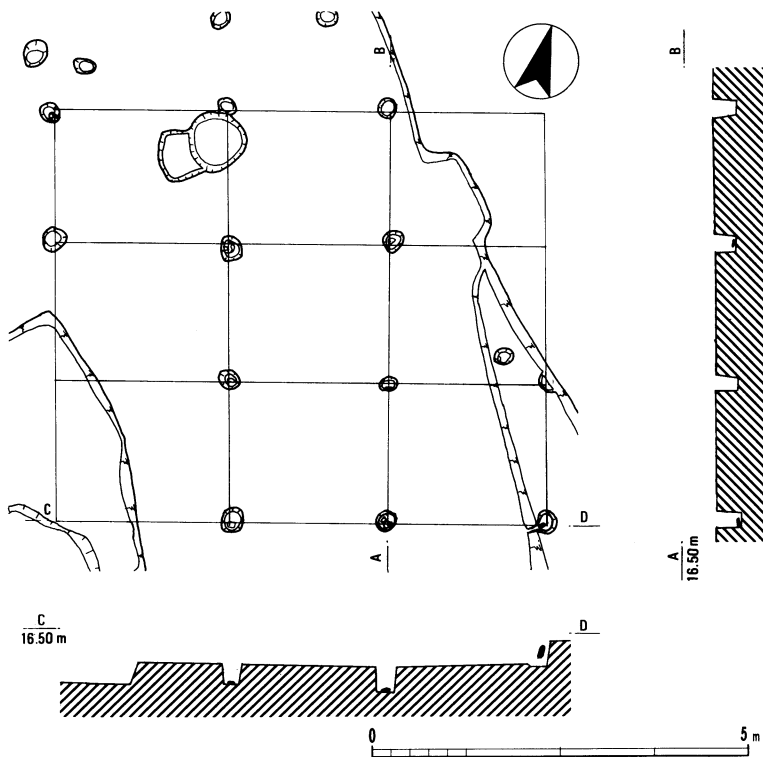
粗砂混土で、出土遺物は12ヶ所の柱穴のうち10ヶ所から土師器（皿・小皿・鍋）片を中心に約50点が出土した。SK1との新旧関係は、SB9のほうが古い。

（2）土坑

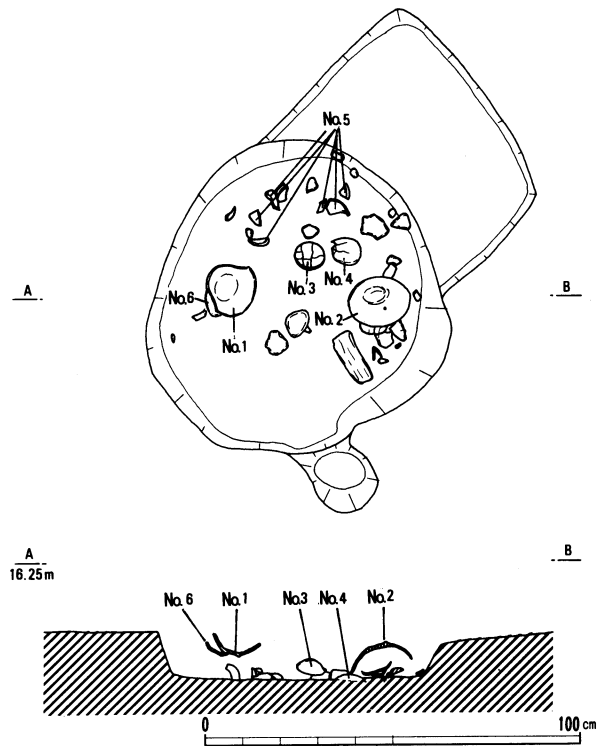
SK1 SB9の北西隅に重複して位置し、拳大の礫が混在する。平面形は、径約80cmのほぼ円形を呈する。底は平坦で、遺構検出面から深さ14cmである。埋土は暗褐色土で、焼土と少量の炭化物を含む。出土遺物は遺構中央上から完形の山皿（5）、ほぼ同レベルで、口縁部を欠いた山茶椀（7）・完形の



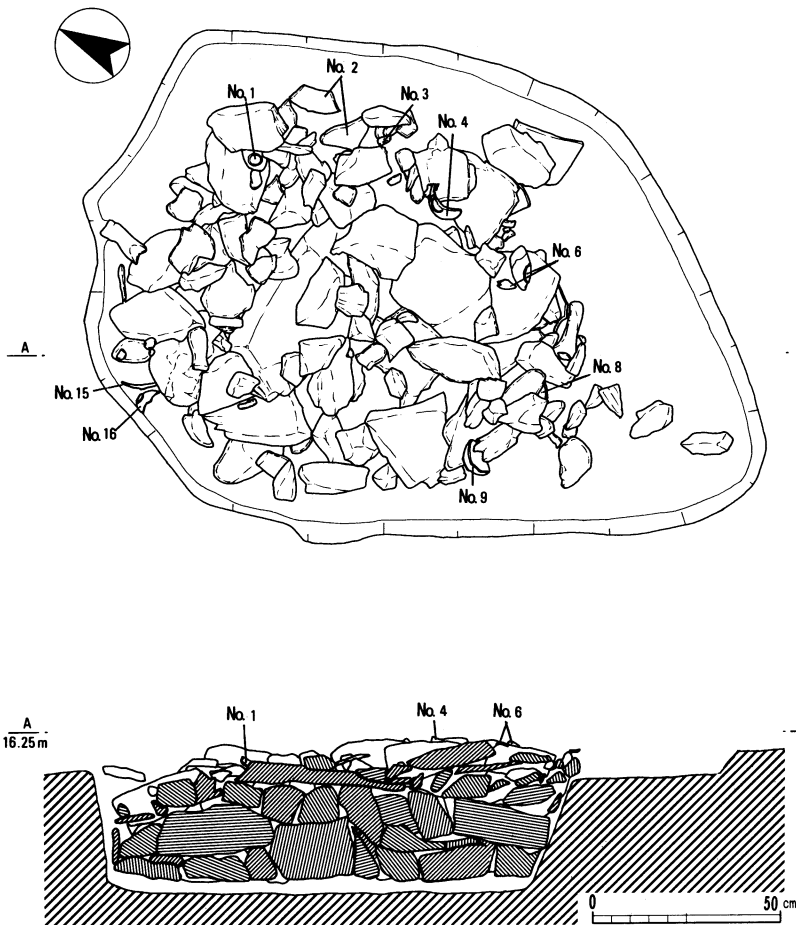
第12图 调查区遺構平面图 (1:200)



第13図 SB 9 遺構実測図 (1 : 100)



第14図 SK 1 遺構実測図 (1 : 20)



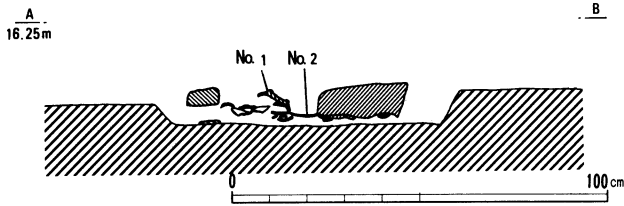
第15図 SK 5 遺構実測図 (1 : 20)

山茶碗 (8) と完形の土師器小皿 (2・4)、
その下に土師器鍋片が出土した。

SK 3 SK 1 の北西 4 m に位置し、拳大
の礫が混在する。平面形は、径約 50 cm のほぼ
円形を呈し、そのほぼ中央に径約 15 cm の円形
小穴がある。底はほぼ平坦で検出面からの深
さは 14 cm、小穴の深さは検出面から 26 cm である。
埋土はいずれも暗褐色粗砂混土で、少量
の炭化物を含む。出土遺物は、ほぼ完形の土
師器小皿 3 点 (10~12)、陶器甕 (17)、山茶
碗、青磁、土師器皿の細片や先端部を欠損し
た長さの異なる 2 本の角釘 (15・16) が出土
した。その下の小穴からは土師器鍋 (18) を
中心に、土師器皿・小皿片、山茶碗片が出土
した。

SK 4 SK 1 に重複して位置する。その
ため、平面形や規模は不明である。底はほぼ
平坦で SK 1 へ漸次下降する。埋土は SK 1
と同じである。出土遺物はごく少量の土師器
小皿片である。

SK 5 SK 3 の南西 5 m に位置する。土
坑内は、拳大から 50 cm 大の石まで大小多くの



第16図 SK 6 遺構実測図 (1 : 20)

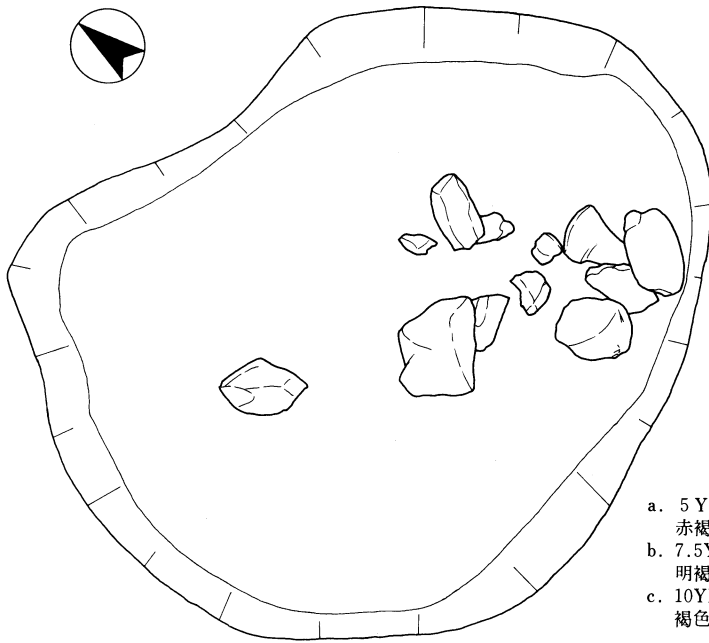
石が混在する。平面形は、長軸1.3m、短軸1.1mのはほぼ円形を呈する。長軸の方向はほぼ北を示す。底は平坦で、検出面からの深さは40cmである。埋土は灰褐色土を中心にしながら、赤褐色土が混じる。出土遺物は遺構の中で最も多く、山茶碗 (24~35) を中心に、土師器皿・小皿 (19~21)・鍋 (38)、山皿 (22)・捏鉢 (36・37)・蓋 (23) などが石の間隙から出土した。しかし完形品はない。石の集積状態に規則性は見られない。

SK 6 SK 1の南約12mに位置し、拳大の礫から20cm大の石が混在する。平面形は、長軸約1.2m、短軸約0.8mの不正方形を呈し、長軸の方向はN90°Eを示す。底は平坦で、検出面からの深さは9cmである。埋土は明褐色土で、炭化物を少量含む。出土遺物は、土師器 (小皿・鍋)、山茶碗 (39~41) で、倒立した山茶碗の下に土師器鍋 (42・43) の細片が

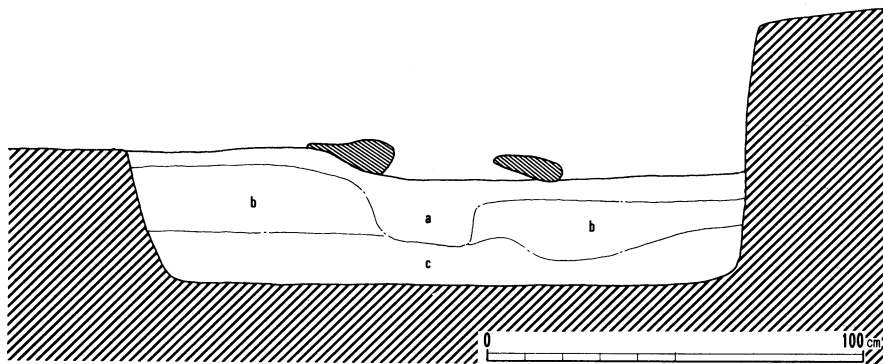
広がる。完形品はない。

SK 7 SK 1の南約6mに位置する。第1次調査で確認された遺構である。平面形は、長軸1.9m、短軸1.4mの長円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さ約0.7mである。埋土は褐色土が中心で礫や少量の炭化物が含まれる。出土遺物は、ほぼ完形の土師器小皿 (44) が1点、20cm大の石が数個出土した。

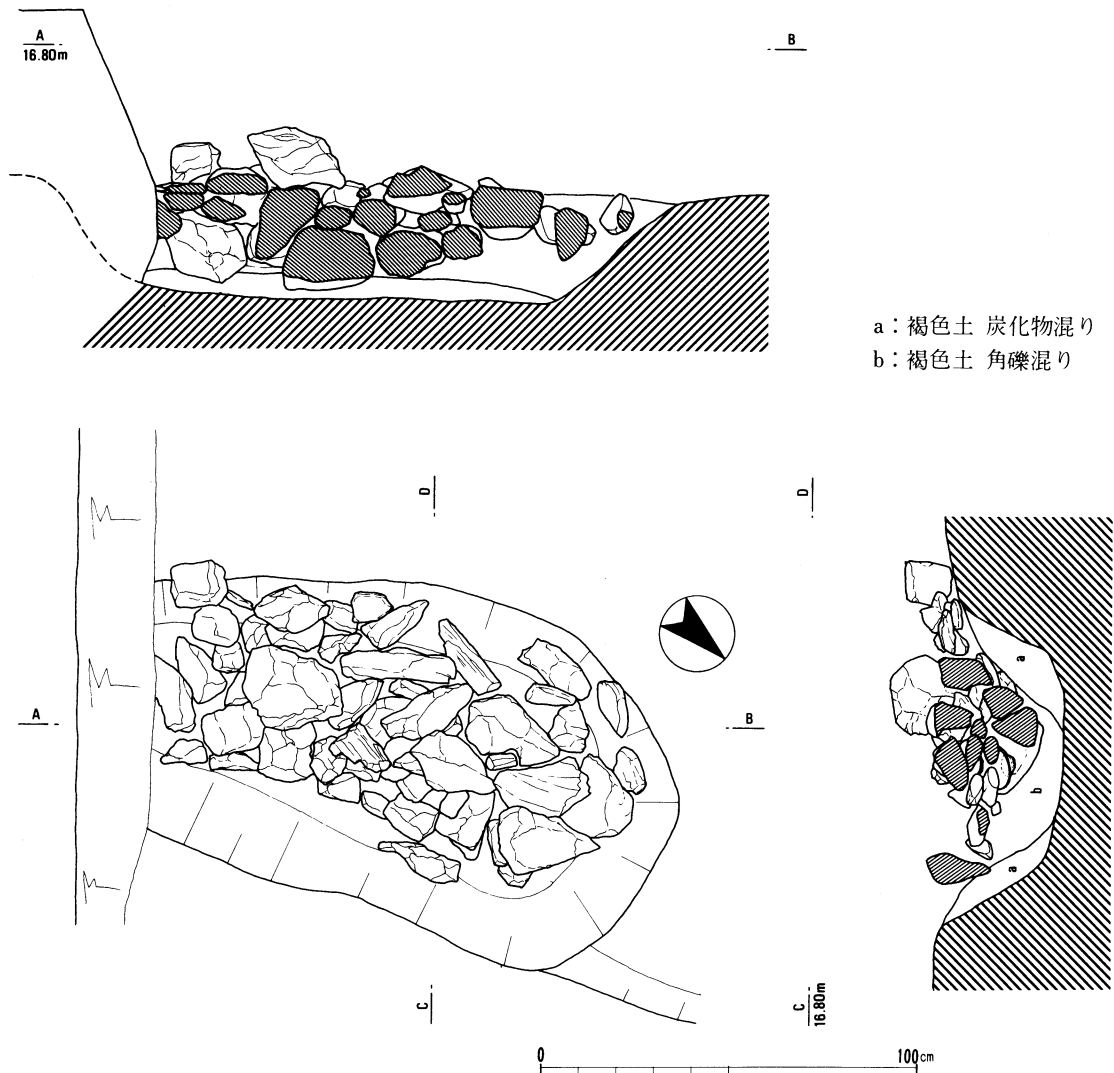
SK 10 県道付け替え地区から検出された遺構で、SK 1からおよそ7m北東に位置する。南端の一部が発掘区外に広がるが、南北1.5m、東西0.9mで、断面はほぼカマボコ形を呈し、検出面からの深さは約0.3mであった。土坑内には拳大から40cm程度までの石が詰まっており、石の間隙や炭化物混じりの埋土中から土師器皿 (47)・小皿 (45・46)・鍋、山茶碗 (49



- a. 5 YR4/6 赤褐色礫混土
- b. 7.5YR5/6 明褐色礫混土
- c. 10YR4/4 褐色礫混土



第17図 SK 7 遺構実測図 (1 : 20)



第18図 SK10実測図 (1 : 20)

~58)、山皿 (48) の破片が出土した。なお、これらの石の集積状態には特に規則性などは認められなかった。

(3) 溝

SD2 SK5の西約1mに位置し、南から北へ流れる。長さ約3m、幅約40cm、深さ約20cmの小溝

である。埋土は、暗褐色土で細砂質土。遺物は細片で、土師器、陶器、青磁がそれぞれ少量出土した。

SD8 調査区南東端に位置し、ほぼ北から南へ流れる。長さ約5m、幅約30cm、深さ約10cmの小溝である。埋土は赤褐色土で礫を含む。出土遺物はない。

5. 遺物

出土遺物は整理箱で8箱になる。主として調査区西から出土した。主な出土遺物は、土師器 (皿・小皿・鍋)、山茶碗、山皿である。実測点数は100個体になる。遺構別に個々の観察結果を「第1表遺物観察表」に以下の要領でまとめた。

(1) No.

遺物番号を意味する。遺物実測図と同一番号である。

(2) 器種

種類、器種の順に示した。

(3) 出土位置

グリッド名で示し、遺構出土のものについては遺

構名と遺構番号で示した。その他、包含層、表土、排土、下層出土遺物についてはそのままの名称を付した。

(4) 法量

単位はcmで、小数点第1位まで表した。不明の場合は?とした。法量の測定は実測図をもとにして行い、反転復元で図化した部位の数値もそのまま表記した。

(5) 胎土

胎土に含まれる砂粒の大きさは「砂粒・細砂粒」、

砂粒の量については「多含・含」とそれぞれ2区分とした。また、胎土の精製度がよいものを「良」、かなり高いものについては「精良」とした。

(6) 備考

特に、椀高台の初殻痕の有無、煤や釉や鉄分付着の有無、掘立柱建物出土の明記や遺構平面図での出土遺物番号(No.)を中心に示した。

(7) 実測No.

遺物実測図の整理番号を表す。

No.	器種	出土位置	法量 (cm)	調整・技法・形態の特徴	色調・胎土	残存度	備考	実測No.
1	土師器 小皿	M89 S K 1	口径 7.4 器高 0.9	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	浅黄橙 良	1/3		026
2	土師器 小皿	〃	口径 8.0 器高 1.1	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	浅黄橙 良	1/3	No. 3	025
3	土師器 小皿	〃	口径 7.8 器高 1.3	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	橙 細砂粒含	2/3		024
4	土師器 小皿	〃	口径 8.2 器高 1.8	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	浅黄橙 良	完形	口縁部煤付着 No. 4	023
5	陶器 山皿	M88 〃	口径 8.4 底径 4.4 器高 1.8	口縁部外反。口縁端部に面。体部直線的。ロク クロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	完形	口縁部自然釉付着 No. 6	020
6	陶器 山茶椀	〃	口径 ? 台径 8.4 器高 ?	体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 細砂粒含	底部 1/2		076
7	陶器 山茶椀	〃	口径15.0 台径 7.0 器高 5.3	口縁部外反。口縁端部丸み。腰部丸み。ロク ロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	2/3	口縁部内面に煤付着 No. 1	022
8	陶器 山茶椀	M89 〃	口径15.9 台径 6.3 器高 5.4	口縁部外反。口縁端部丸み。体部丸み。ロク ロナデ。糸切り痕ナデケン。	灰白 砂粒含	完形		021
9	土師器 鍋	〃	口径26.0 胴径 ? 器高 ?	口縁部ヨコナデ。内外面ナデ。頸部指オサエ。 口縁端部を内側に折り返し、返し部をヨコナ デ。	灰白 砂粒含	口縁部 1/12	外面煤付着 No. 5	082
10	土師器 小皿	M87 S K 3	口径 8.0 器高 1.5	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。外面ナデ。	浅黄橙 良	完形	No. 3	027
11	土師器 小皿	〃	口径 8.0 器高 1.1	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	橙 砂粒含	3/4		029
12	土師器 小皿	〃	口径 8.0 器高 1.5	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	黄橙 砂粒含	ほぼ完形	No. 4	028
13	土師器 皿	〃	口径14.6 器高 2.7	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。外面ナデ。	灰白 細砂粒含	1/4	内外面に煤付着	079
14	土師器 皿	〃	口径15.4 器高 3.0	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	灰白 良	1/8		030
15	鉄釘 角釘	M88 〃	長 4.7 断面 0.3	鍛造	黒褐	先端部 欠損	重2.52 g	084
16	鉄釘 角釘	〃	長 6.5 断面 0.5	鍛造	黒褐	先端部 欠損	重6.88 g	085
17	陶器 甕	M87 〃	口径27.0 胴径 ? 器高 ?	ロクロナデ。口縁端部強いヨコナデ。	褐灰 砂粒含	口縁部 1/6	頸部外面に自然釉付着 口縁部いびつ	078
18	土師器 鍋	〃	口径30.4 胴径 ? 器高 ?	口縁部ヨコナデ。内外面ナデ。頸部指オサエ。 口縁端部を内側に折り返し、返し部をヨコナ デ。	黄橙 砂粒多含	口縁部 1/3	口縁部煤付着	031
19	土師器 小皿	L88 S K 5	口径 8.0 器高 1.1	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	浅黄橙	1/2		015

第5-1表 出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	法量 (cm)	調整・技法・形態の特徴	色調・胎土	残存度	備考	実測No.
20	土師器 小皿	L 85 S K 5	口径 8.0 器口 ?	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	明黄褐 細砂粒含	口縁部 1/4	No. 3	046
21	土師器 小皿	〃	口径 8.2 器高 1.4	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	黄橙 砂粒多含	2/3		014
22	陶器 山皿	〃	口径 8.6 底径 4.4 器高 1.9	口縁端部に丸み。体部直線的。ロクロナデ。 糸切り痕あり。見込みに調整あり。	灰白 砂粒含	2/3	口縁端部に自然釉 No. 1	013
23	陶器 蓋	〃	口径 12.8 器高 ?	口縁端部丸。表面中央に円形つまみ台があり、放射状に刻目が走る。ロクロナデ。	暗褐 精良	つまみ 欠損	外面に自然釉付着 No. 15	012
24	陶器	〃	口径 ? 台径 9.0 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白	底部 1/2		074
25	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 7.6 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部完 形	高台3/4剥離 No. 9	009
26	陶器碗 山茶碗	〃	口径 8.5 台径 8.5 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	口縁部 欠損		004
27	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 6.6 器高 ?	腰部丸み。糸切り痕ナデケシ。	灰白 砂粒含	口縁部 欠損	内面に煤付着 粗殻痕あり No. 8	010
28	陶器 山茶碗	〃	口径 16.2 台径 8.0 器高 4.7	口縁部外反。口縁端部に面。体部直線的。 ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	青灰白 砂粒含	1/2	粗殻痕あり No. 4	008
29	陶器 山茶碗	〃	口径 16.4 台径 7.1 器高 5.5	口縁部外反。口縁端部に丸み。体部丸み。 ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白 砂粒含	1/2		006
30	陶器 山茶碗	〃	口径 15.8 台径 5.9 器高 5.0	口縁端部が肥厚して面。体部丸み。ロクロナ デ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	2/3	高台雑 No. 16	002
31	陶器 山茶碗	〃	口径 16.0 台径 7.2 器高 4.8	口縁部外反。口縁端部丸み。体部直線的。糸 切り痕ナデケシ。ロクロナデ。	青灰白 砂粒含	1/3	No. 6	017
32	陶器 山茶碗	〃	口径 15.8 台径 8.5 器高 5.0	口縁部外反。口縁端部に丸み。体部直線的。 ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	1/2	高台一部剥離 粗殻痕あり	005
33	陶器 山茶碗	〃	口径 15.8 台径 8.1 器高 5.1	口縁部外反。口縁端部に丸み。体部直線的。 ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	2/3	粗殻痕あり	003
34	陶器 山茶碗	〃	口径 15.7 台径 7.1 器高 5.4	口縁部外反。口縁端部に丸み。体部丸み。 ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	2/3	内面に煤付着	001
35	陶器 山茶碗	〃	口径 16.3 台径 7.0 器高 5.7	口縁部外反。口縁端部に丸み。体部直線的。 ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白 砂粒含	1/2		007
36	陶器 鉢	〃	口径 28.2 台径 ? 器高 ?	口縁端部薄く丸い。体部丸み。ロクロナデ。	青灰白 砂粒含	口縁部 1/6		045
37	陶器 鉢	〃	口径 31.0 台径 15.4 器高 12.2	口縁部外反。口縁端部薄く丸い。ロクロナデ。 糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	2/3	No. 2	011
38	土師器 鍋	〃	口径 22.6 胴径 ? 器高 ?	口縁部ヨコナデ。内外面ナデ(ハラケズリ痕)。 頸部指オサエ。口縁端部を内側に折り返す。	黄橙 砂粒含	口縁部 1/5	外面 2 次焼成	016
39	陶器 山茶碗	I 90 S K 6	口径 ? 台径 7.8 器高 ?	ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白 細砂粒含	底部 1/4	内面鉄分付着	075
40	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 8.0 器高 ?	体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部 1/2	外面鉄分付着 粗殻痕あり	034
41	陶器 山茶碗	J 90 〃	口径 ? 台径 7.0 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	口縁部 欠損	高台雑 内面鉄分付着 No. 1	033

第 5 - 2 表 出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	法量 (cm)	調整・技法・形態の特徴	色調・胎土	残存度	備考	実測No.
42	土師器 鍋	J90 S K 6	口径26.2 胴径 ? 器高 ?	口縁部ヨコナデ。内外面ナデ。頸部指オサエ。 口縁端部を内側に折り返し、返し部をヨコナ デ。	浅黄橙 砂粒含	口縁部 1/8	口縁部内外面に煤付着 No. 3	043
43	土師器 鍋	〃	口径30.0 胴径 ? 器高 ?	口縁部ヨコナデ。内外面ナデ。頸部指オサエ。 口縁端部を内側に折り返し、返し部をヨコナ デ。	浅黄橙 砂粒含	口縁部 1/3	口縁内外面に煤付着 No. 2	044
44	土師器 小皿	L90 S K 7	口径 7.9 器高 1.1	内面ナデ。口縁部ヨコナデ 外面未調整。	浅黄橙 良	ほぼ完 形		032
45	土師器 小皿	S K 10	口径 8.0 器高 1.2	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	浅黄橙 細砂粒含	1/4		102
46	土師器 小皿	〃	口径 8.2 器高 1.5	内面ナデ。口縁部ヨコナデ 外面未調整。	浅黄橙 細砂粒含	1/8		104
47	土師器 皿	〃	口径14.8 器高 ?	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。外面未調整。	浅黄橙 細砂粒含	口縁部 1/10		103
48	陶器 山皿	〃	口径 9.4 底径 4.8 器高 1.8	口縁端部丸み。体部直線的。ロクロナデ。糸 切り痕あり。	灰白 細砂粒含	1/2		099
49	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 6.9 器高 ?	体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白 細砂粒含	底部 1/2	粉殻痕あり	089
50	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 6.6 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 細砂粒含	底部完 形	粉殻痕あり	095
51	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 6.6 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	明青灰 細砂粒含	底部 1/3	粉殻痕あり	091
52	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 8.6 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部完 形	粉殻痕あり	092
53	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 6.6 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 細砂粒含	底部 1/2	粉殻痕あり	093
54	陶器 山茶碗	〃	口径16.4 台径 6.4 器高 5.1	口縁部外反。口縁端部丸み。体部丸み。 ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	2/3	口縁端部に釉付着 粉殻痕あり	109
55	陶器 山茶碗	〃	口径16.1 台径 8.6 器高 4.8	口縁端部丸み。体部直線的。ロクロナデ。糸 切り痕ナデケシ。	灰白 砂粒含	1/3	粉殻痕あり	088
56	陶器 山茶碗	〃	口径15.0 台径 7.8 器高 5.2	口縁端部丸み。体部直線的。ロクロナデ。糸 切り痕あり。	灰白 砂粒含	1/3	高台雑 粉殻痕あり	090
57	陶器 茶碗	〃	口径16.0 台径 ? 器高 ?	口縁部外反。口縁端部丸み。ロクロナデ。	灰白 細砂粒含	口縁部 1/4		096
58	陶器 山茶碗	〃	口径15.6 台径 ? 器高 ?	口縁部外反。ロクロナデ。	青灰白 細砂粒含	口縁部 1/4		097
59	土師器 小皿	M89 Pit 1	口径 8.0 器高 1.0	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面ナデ。	浅黄橙 細砂粒含	1/8	建物 9 柱穴	080
60	土師器 皿	M90 Pit 2	口径13.8 器高 2.5	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	灰白 良	口縁部 1/3	建物 9 柱穴	039
61	陶器 山茶碗	M88 Pit 2	口径16.0 台径 ? 器高 ?	口縁部外反。口縁端部に丸み。ロクロナデ。	灰白 細砂粒含	口縁部 1/20	建物 9 柱穴	083
62	土師器 鍋	M90 Pit 1	口径 ? 胴径 ? 器高 ?	口縁部ヨコナデ。口縁端部を内側に折り返し 返し部をヨコナデ。	浅黄橙 細砂粒含	口縁部 1/24	外面煤付着 建物 9 柱穴	081
63	土師器 小皿	J91 Pit 4	口径 7.0 器高 1.0	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	橙 砂粒含	1/4		041
64	土師器 小皿	〃	口径 8.0 器高 1.1	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	橙 良	1/2		040
65	土師器 小皿	M88 Pit 4	口径 8.0 器高 1.1	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。 外面未調整。	浅黄橙 良	1/5		042

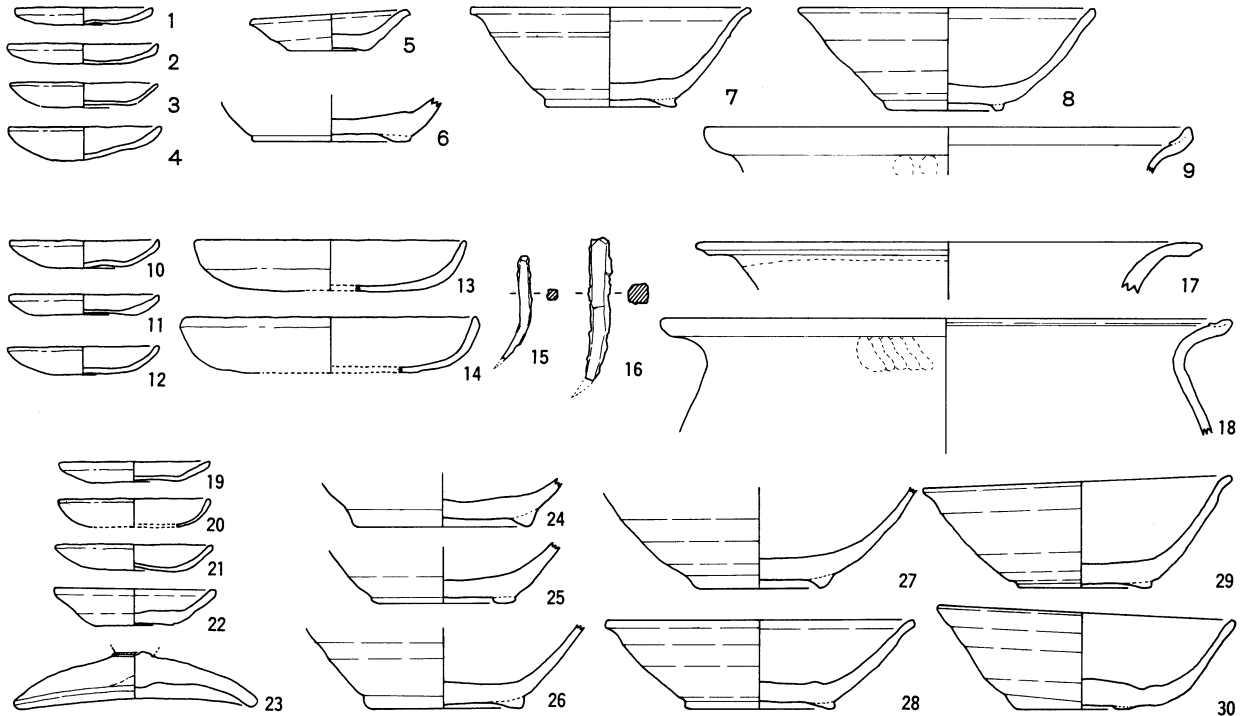
第5-3表 出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	法量 (cm)	調整・技法・形態の特徴	色調・胎土	残存度	備考	実測No.
66	陶器 山皿	K89 Pit 1	口径 8.4 底径 4.0 器高 2.5	口縁端部に丸み。体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 精良	ほぼ完形		019
67	陶器 山茶碗	J91 Pit 2	口径 ? 台径 7.4 器高 ?	体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部 1/2		036
68	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 6.4 器高 ?	体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部 1/2	高台雑	037
69	陶器 山茶碗	L88 Pit 1	口径 ? 台径 8.0 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部 1/2	初穀痕あり	035
70	陶器 山茶碗	K88 Pit 1	口径 16.0 台径 7.3 器高 5.6	口縁部外反。口縁端部丸み。体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白 砂粒含	2/3	内面に煤附着 初穀痕あり	018
71	陶器 山茶碗	J91 Pit 4	口径 ? 台径 8.8 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部 1/4	内面に自然釉	038
72	陶器 青磁碗	J91 Pit 3	口径 18.0 台径 ? 器高 ?	内面に飛雲紋。内面口縁に 2 本沈線。外面に貫入あり。	釉・明緑灰 胎土・灰白 精良	口縁部 1/16		077
73	土師器 小皿	J91 包含層	口径 7.2 器高 1.3	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。外面未調整。	浅黄橙 砂粒含	口縁部 2/3		058
74	土師器 小皿	〃	口径 8.2 器高 1.2	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。外面未調整。	浅黄橙 砂粒含	1/2		059
75	土師器 皿	L88 〃	口径 13.6 器高 2.5	内面ナデ。口縁部ヨコナデ。外面未調整。	にぶい黄橙 砂粒含	1/8		060
76	陶器 山皿	M87 〃	口径 9.2 底径 4.4 器高 1.9	口縁端部丸み。体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 精良	2/3	内外面に鉄分附着	052
77	陶器 小皿	L87 〃	口径 9.0 底径 4.8 器高 1.9	口縁端部に面。体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	2/5	口縁部から内面に自然釉附着	053
78	陶器 山茶碗	K92 〃	口径 ? 台径 6.6 器高 ?	体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒多含	底部 1/3	初穀痕あり	070
79	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 8.2 器高 ?	ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部 1/4	初穀痕あり	071
80	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 7.4 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 精良	底部完形	初穀痕あり	064
81	陶器 山茶碗	I89 〃	口径 ? 台径 6.0 器高 ?	ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白 砂粒含	底部 1/4	初穀痕あり	072
82	陶器 山茶碗	L87 〃	口径 ? 台径 7.6 器高 ?	ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白 砂粒含	底部 1/3	高台雑	069
83	陶器 山茶碗	〃	口径 ? 台径 6.8 器高 ?	ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部 1/2		068
84	陶器 山茶碗	L87 〃	口径 ? 台径 7.8 器高 ?	体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部完形	初穀痕あり	049
85	陶器 山茶碗	? 〃	口径 ? 台径 8.1 器高 ?	体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。見込みに調整あり。	灰白 精良	底部完形	高台一部剥離	065
86	陶器 山茶碗	? 排土	口径 ? 台径 7.7 器高 ?	体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白 細砂粒含	底部 1/2	高台雑 初穀痕あり	067
87	陶器 山茶碗	L87 包含層	口径 ? 台径 8.0 器高 ?	体部直線的。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 細砂粒含	底部 1/2	初穀痕あり	066
88	陶器 山茶碗	L86 〃	口径 ? 台径 7.1 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白 細砂粒含	底部完形	初穀痕あり	063

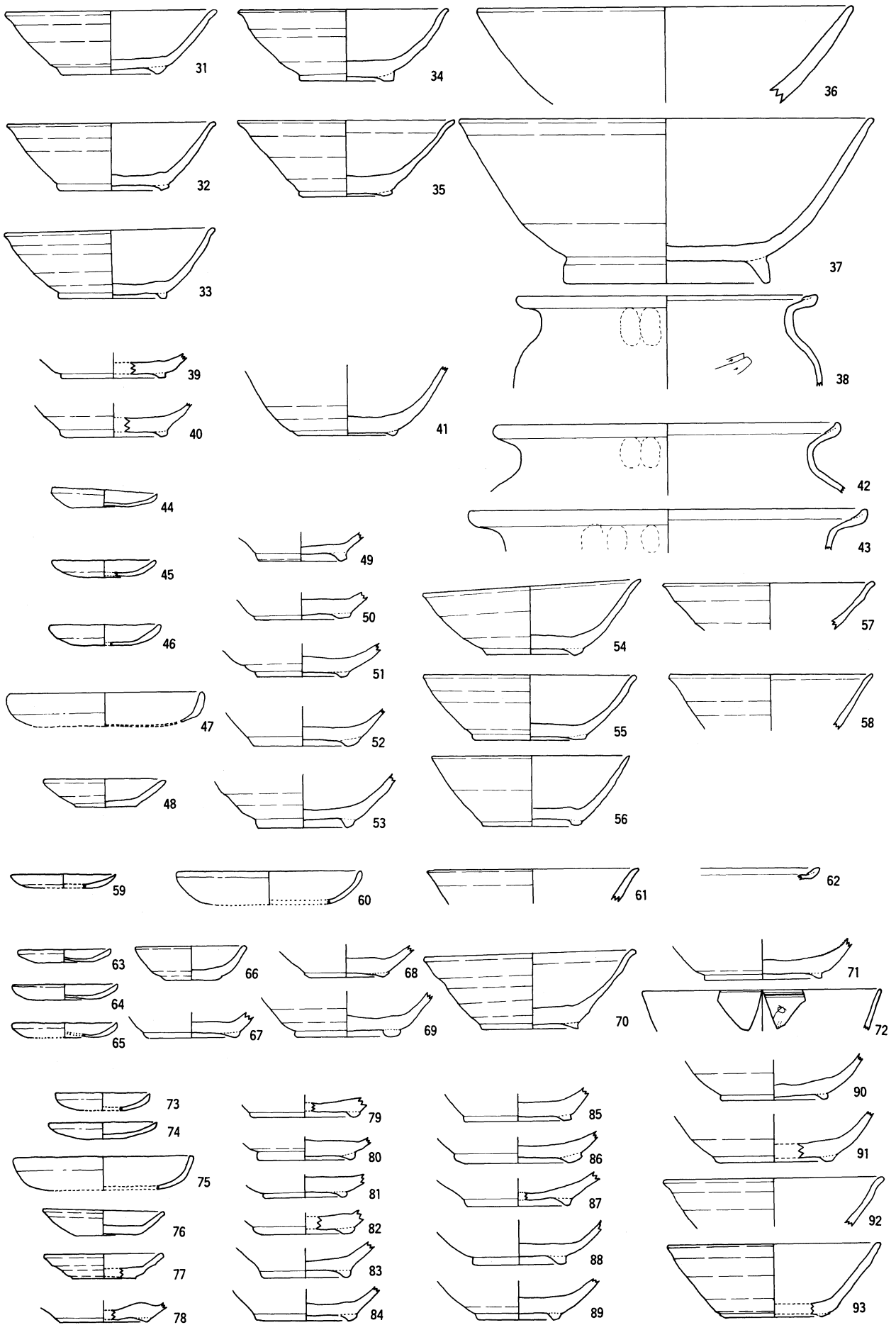
第5-4表 出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	法量 (cm)	調整・技法・形態の特徴	色調・胎土	残存度	備考	実測No.
89	陶器 山茶椀	表土	口径 ? 台径 6.2 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 精良	底部ほぼ 完形	初殻痕あり	048
90	陶器 山茶椀	〃	口径 ? 台径 8.2 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕あり。	灰白 砂粒含	底部完 形	高台雑	047
91	陶器 山茶椀	L88 包含層	口径 ? 台径 7.0 器高 ?	体部丸み。ロクロナデ。糸切り痕ナデケシ。	灰白 砂粒含	1/3	高台雑	051
92	陶器 山茶椀	L87 〃	口径 16.6 台径 ? 器高 ?	口縁部外反。口縁端部に面。ロクロナデ。	灰白 砂粒含	口縁部 1/2		073
93	陶器 山茶椀	J91 〃	口径 16.0 台径 8.2 器高 5.4	口縁端部に丸み。体部直線的。ロクロナデ。	灰白 砂粒含	1/6	高台雑 初殻痕あり	050
94	土師器 鍋	L86 〃	口径 22.0 胴径 ? 器高 ?	口縁部ヨコナデ。内外面ナデ。頸部指オサエ。口縁端部を内側に折り返し、返し部をヨコナデ。	灰白 砂粒含	口縁部 1/8		062
95	土師器 鍋	J91 〃	口径 27.0 胴径 ? 器高 ?	口縁部ヨコナデ。内外面ナデ。口縁端部を内側に折り返し、返し部をヨコナデ。	灰白 砂粒含	口縁部 1/6	外面煤附着	061
96	磁器 青磁椀	J88 〃	口径 16.0 台径 ? 器高 ?	外面に縞蓮弁紋、蓮弁を削り出し、上から櫛目を入れる。内面に草花紋(?)と、1本の沈線あり。	釉・オリ ブ灰 胎土・灰 白 精良	口縁部 1/8		055
97	磁器 青磁椀	J90 〃	口径 16.0 台径 ? 器高 ?	内面に草花紋(?)あり。	釉・オリ ブ灰 胎土 灰白 精良	口縁部 1/10		056
98	磁器 青磁椀	表土	口径 ? 台径 6.0 器高 ?	底部内面に草花模様。削り出し高台。底部厚い。高台部畳付まで釉。高台断面が四角形。	釉・緑灰 胎土・灰 白 精良	底部 2/3		054
99	チャート 縦長剥片	〃	長 6.00 幅 3.32 厚 2.17 重 42.50 g	不定型。縦割ぎ剥片で、厚い。打面が一部残存。打瘤リングは不明瞭。縦長剥片の一縁辺には、若干の使用痕と思われるものが存在。刃こぼれ状のものが見られる。特に形を整えるための2次調整は認められない。				086
100	チャート 槍先形 尖頭器	下層東西ト レンチ南壁	長 2.00 幅 2.25 厚 0.70 重 3.09 g	欠損するが、ラフな調整が施され鈍く尖る。裏面には一次剥離面が残り、調整は縁辺にとどまる。槍先形尖頭器片か?尖頭状を意識しての調整が見られる。				087

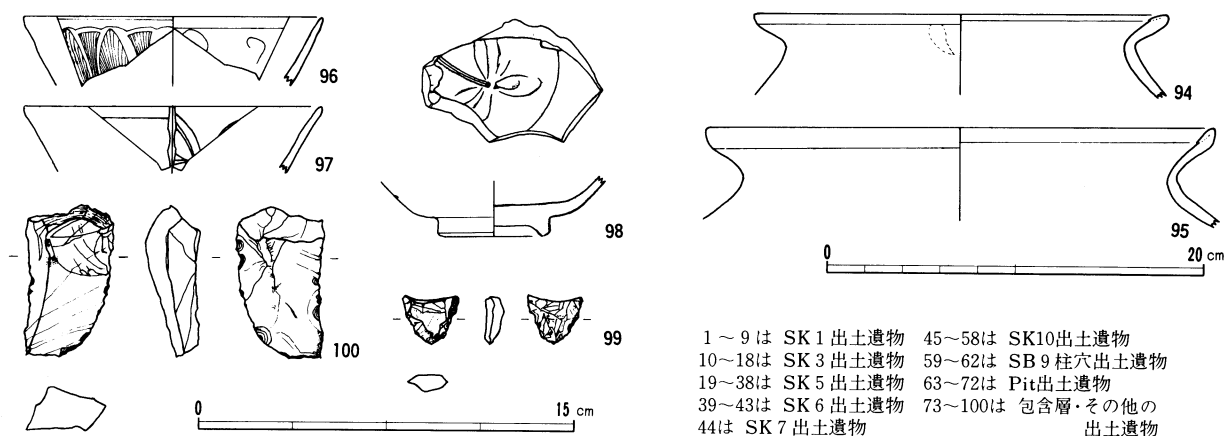
第5-5表 出土遺物観察表



第19図 出土遺物実測図 (1~14と17~30は1:4, 15・16は1:3)



第20图 出土遺物実測図 (1:4)



第21図 出土遺物実測図 (94～98は 1 : 4, 99・100は 1 : 3)

6. 結 語

ここでは、出土遺物、遺構の順で考察を行い、当遺跡の性格について考えてみたいと思う。

(1) 出土遺物について

A. 土師器 (皿・小皿・鍋)

皿 (13・14・47・60・75) については、新田編年の第 I 期 A₂～A₃、小皿 (1～4・10～12・19～21・44～46・59・63～65・73・74) については、新田編年の第 I 期 B₂～B₃ に比定できそうである。いずれも 12 世紀末～13 世紀前半に位置づけられる。鍋 (9・18・38・42・43・62・94・95) については新田編年「伊勢型」鍋の 5 類に、伊藤編年の第 1 段階 b 型式^⑩に相当すると思われる。いずれも 12 世紀末～13 世紀前半に位置づけられる。

B. 山茶碗・山皿

山茶碗・山皿については、遺構別に、簡単にまとめておきたい。

SK 1 出土の土器 (7・8) は口縁端部に丸みを持ち、強いヨコナデがある。器壁は底部で厚く、0.8 cm・1.0 cm である。高台は押圧のため端部がつぶれ逆台形に近い形状となる。山皿 (5) は台部を意識したもので、底部がわずかに突出する。山茶碗は藤澤編年の第 II 段階第 4 型式に、山皿は藤澤編年の第 III 段階第 5 型式^⑩に比定できそうである。山茶碗は 12 世紀中頃から 12 世紀後半に、山皿は 12 世紀末から 13 世紀初めに位置づけられる。

SK 5 出土の土器 (28～35) は口縁端部に丸みを持つ形態のもの (29・31～35)、面状になるもの

(28・30) がある。(30) を除きすべて口縁部が緩く外反する。体部の形状はすべて直線的である。器壁は底部で厚く平均 1.0 cm である。高台はつぶれているもの (30・33・34)、逆台形の形状を示す (28・29・31・32・35)。高台端部に粗殻痕が見られるもの (27・28・32・33) がある。山皿 (22) は SK 1 出土の山皿と同様に底部がわずかに突出する。山茶碗・山皿ともに、藤澤編年の第 III 段階第 5 型式^⑩に比定できそうである。

SK 6 出土の土器 (39～41) はいずれも口縁部が欠損しているため全体像は不明である。器壁の底部は厚く平均 1.0 cm である。高台はつぶれているもの (41) か、逆台形のもの (39・40) である。

SK 10 出土の土器 (54～56) はすべて口縁部に丸みを持ち、高台端部に粗殻痕が残る。器壁の底部は厚く平均 1.0 cm である。高台は逆台形の形状を示す。(54) は口縁端部が強くヨコナデされて外反し、腰部が丸みを帯びる。山皿 (48) は底部がわずかに突出する。(54) は藤澤編年の第 II 段階第 4 型式に、(55・56・48) は藤澤編年の第 III 段階第 5 型式^⑩に比定できそうである。

ピット出土の山茶碗 (71) は器壁の底部が特に厚く 1.2 cm である。高台は逆台形の形状を示す。藤澤編年の第 III 段階第 5 型式に比定できそうである。

(2) 遺構について

遺構は、掘立柱建物 1 棟、土坑 7 基、溝 2 条、ピットが検出された。ここでは、掘立柱建物と土坑につ

いて考察したい。

A. 掘立柱建物

S B 9 の時期は、出土遺物 (59~62) の時期が12世紀末~13世紀前半に位置づけられることから、平安時代末~鎌倉時代前半と推定できる^⑦。このことは、S K 1 との切り合い関係や、一般に南勢地域では柱穴に根石を伴う掘立柱建物は、鎌倉時代前半から顕著になるとされる^⑧ことを考え合わせても年代観に矛盾はないものと思われる。

B. 土坑

土坑については共通点が多い。形態的な特徴から、S K 1・3・6 と S K 5・10 に分けて考えたい。

S K 1・3・6 に共通する点は、掘り込みが10cm程度と非常に浅く、S K 3 では中央にさらに掘り込みがあり、炭化物を少量含む。さらに、拳大から20cm大の礫が少数混在し、遺物の出土状況が山茶碗や土師器皿・小皿を上にして、土師器鍋がその下から出土している点である。山茶碗 (7・27・34) や土師器皿 (4・13) の中には、内外面に煤が付着する

遺物が出土している。また、S K 1 では山茶碗と土師器小皿の配置に意図的なものがみえ、焼土が検出されている。S K 3 からは2本の角釘が出土している。S K 1・3 は墓塚の可能性が強いと思われる。

S K 5・10 は共通して、土坑中に大小の河原石が無規則に入れられ、規模も S K 1・3・6 より大きい。遺物は完形品はないが、その間隙から山茶碗を中心に土師器皿・鍋など比較的多く出土した。S K 5 では、煤が付着した山茶碗 (27・34) や、陶器鉢 (37) や性格不明の陶器蓋 (23) が出土している。いずれの土坑も、墓塚の可能性が強いと思われる。

寺原 B 遺跡は時期的には平安時代末から鎌倉時代前半を中心とした遺跡であることは間違いないところである。ただし、その性格については遺構、遺物ともに決定付けるものに乏しく不明な点が多い。

幸い、当遺跡付近には同時代の遺跡^⑨が多くあり、伊勢神宮との関係も強い^⑩ことから、今後の更なる研究の進展に期待したい。

(角谷泰弘)

(註)

- ① 本書で報告している。
- ② 伊勢市教育委員会編『三重県伊勢市遺跡分布地図』伊勢市教育委員会 1981
- ③ 日本道路公団『昭和63年度伊勢自動車道伊勢橋他3橋第2次基礎地盤調査報告書』1988によると、当地域を、地質構造、層相、地形等の特徴から便宜的に三波川帯A、B、Cに分け、玉田山付近を三波川帯Aの西端として括っている。三波川帯Aは、北東から南西に延びる山地状の地形で、その南を同方向に川口断層が走る。
- ④ 県道伊勢南島線道路改良事業に伴う寺原B遺跡発掘調査は、平成2(1990)年7月22日から同年同月29日にかけて約200㎡を調査したが、その面積は含まれていない。
- ⑤ 田村陽一『県道伊勢南島線道路改良事業に伴う寺原B遺跡発掘調査概要』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991の「3.遺構」からそのまま引用
- ⑥ ④の面積も加えた。
- ⑦ 新田洋「三重県における古代末~中世にかけての土器様相中・南伊勢における中世土師器一特に「在地系」皿一の変遷と地域色解明への一視点」『マージナルNo.9』愛知考古学談話会 1988
- ⑧ 新田洋「平安時代~中世における煮炊用具一「伊勢型」鍋一に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1 三重考古学談話会 1985
- ⑨ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history I』三重歴史文化研究会 1989
- ⑩ 平成3年度から、三重県埋蔵文化財センターでは、三重県下出土山茶碗の胎土分析調査を通じて生産地を比定し、その流通経路を明らかにしようという試みを実施しているところである。当遺跡からもその分析資料を提出している。
- ⑪ 藤澤良祐「瀬戸古窯跡群I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I』瀬戸市歴史民俗資料館 1982
- ⑫ ⑪に同じ
- ⑬ ⑪に同じ
- ⑭ ⑪に同じ
- ⑮ ⑦⑧に同じ
- ⑯ 前川嘉宏『中世の掘立柱建物について』三重大学原始古代史部会研究総会資料 1990
- ⑰ 同時期を含む遺跡には、宮川左岸の蚊山遺跡、右岸の下沖、佐八藤波、元新畑、中ノ垣外、中新田、塚の上遺跡など比較的多くある。
- ⑱ 文献によると、当遺跡周辺には、11世紀~15世紀にかけて、神宮祇宮の荒木田氏や祭主大中臣氏の居館があったとされる。また、式内社や神宮の摂社・末社が多く存在する地域でもある。

(その他の参考文献)

- ・角川書店『角川日本地名大辞典24 三重県』昭和58年
- ・高見宜雄「三重県内中世墓一覽」『第13回埋蔵文化財研究会 古代中世の墳墓について』1983

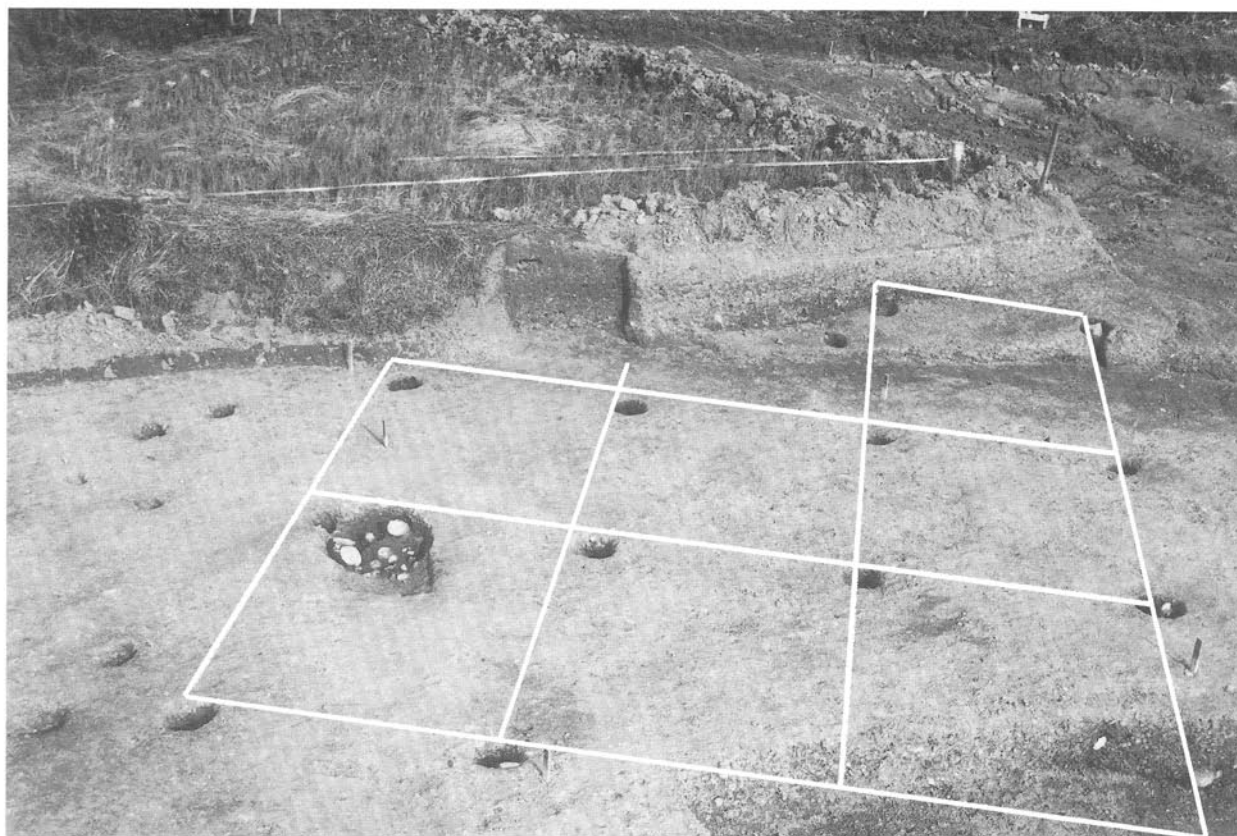
PL 1



調査前全景（南東から）



調査区全景（南東から）

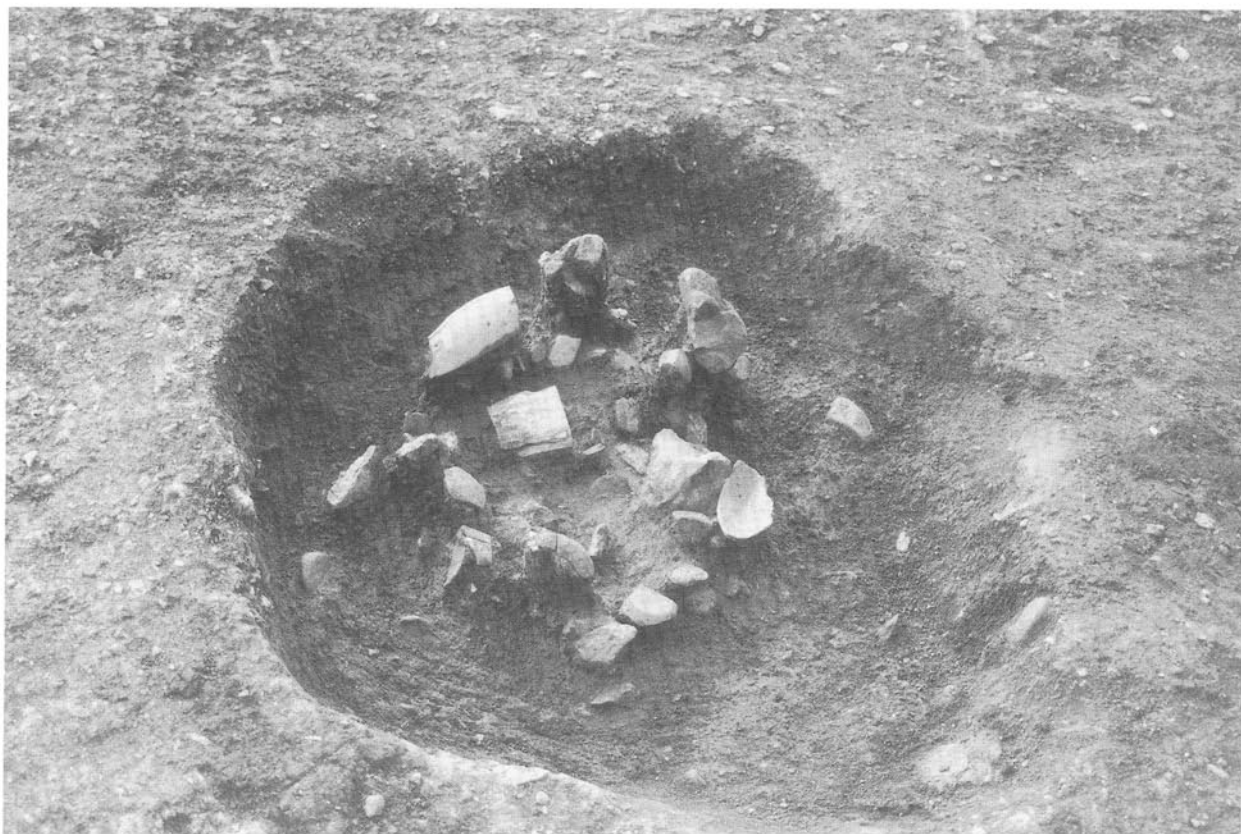


S B 9 (南西から)

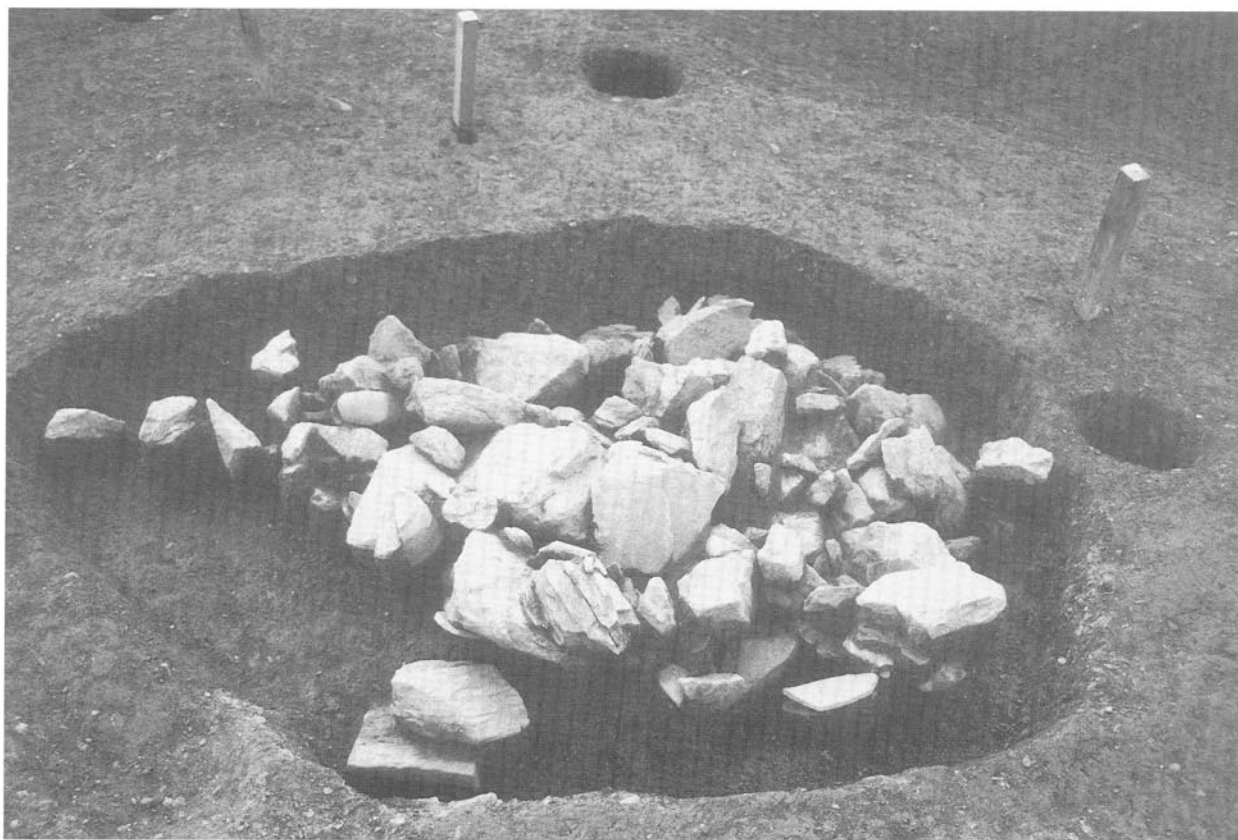


S K 1 (南西から)

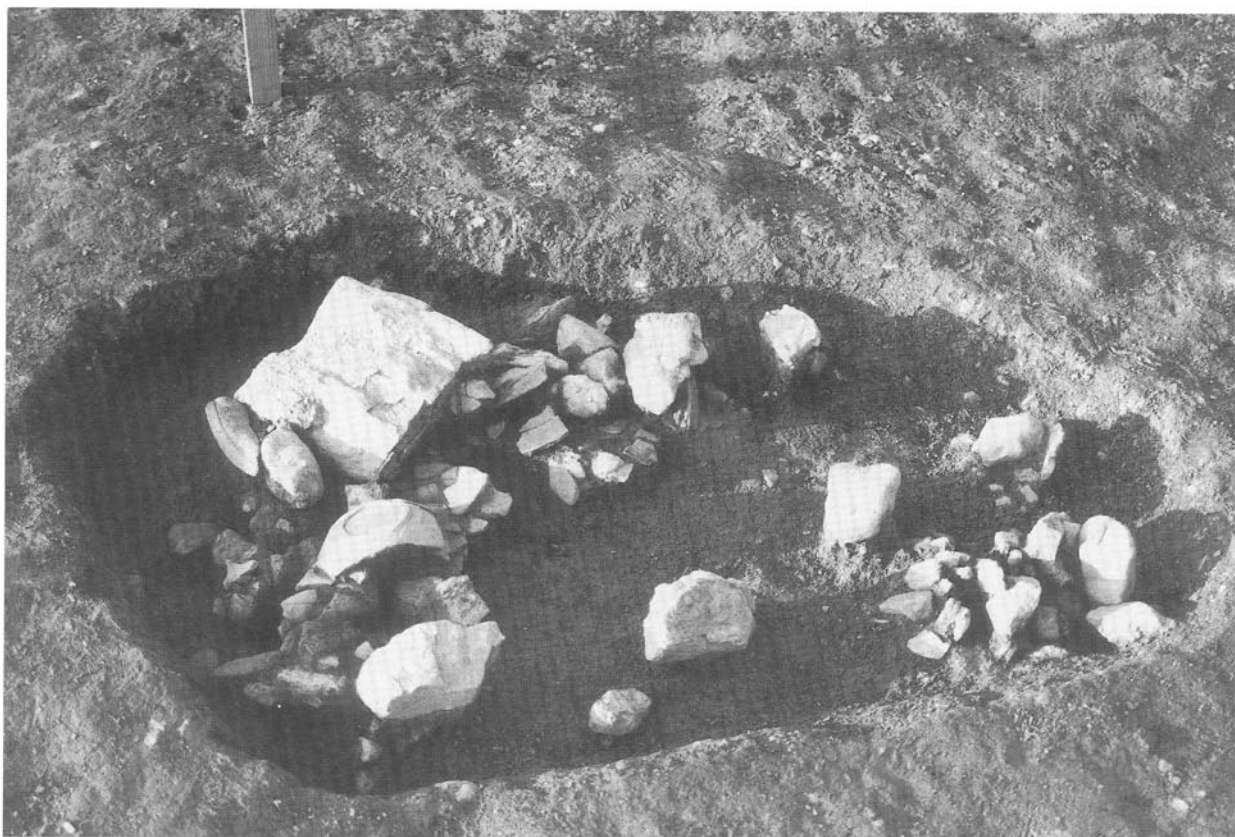
PL 3



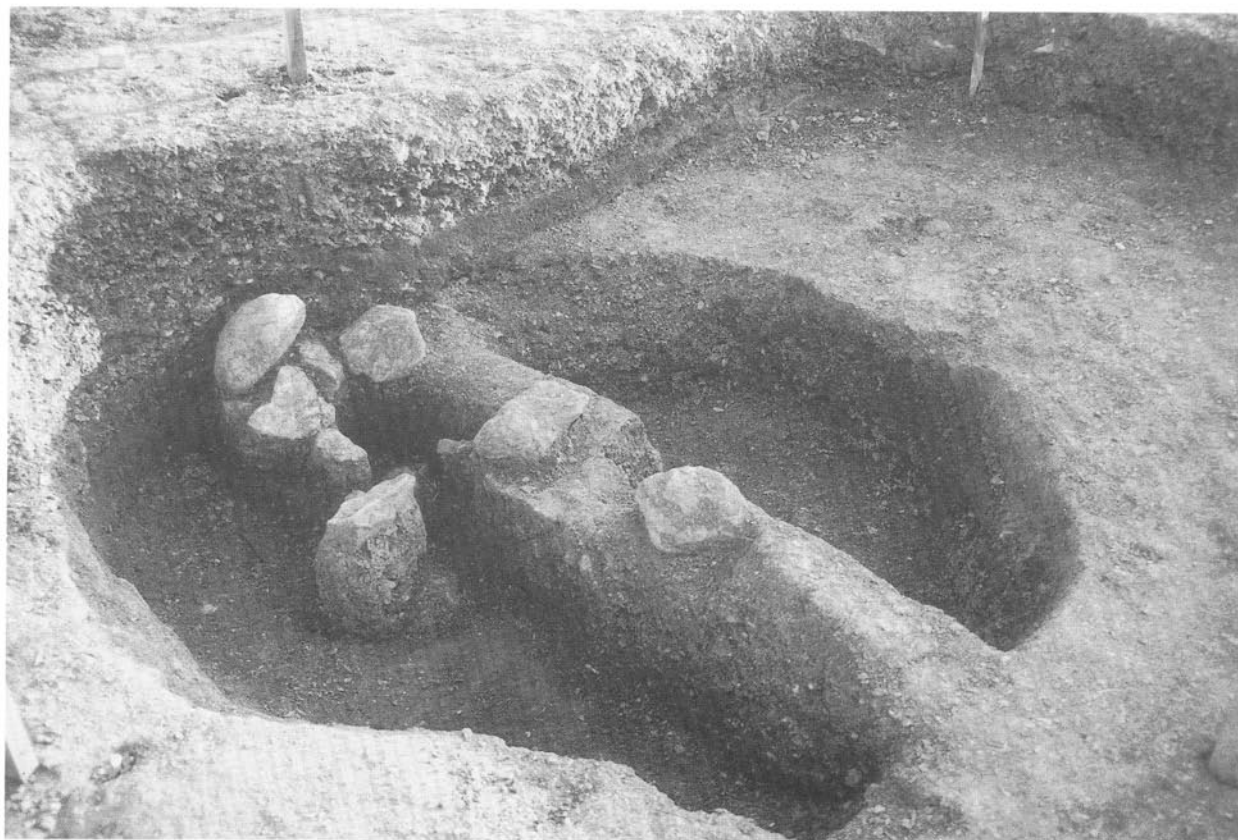
SK 3 (北から)



SK 5 (北から)

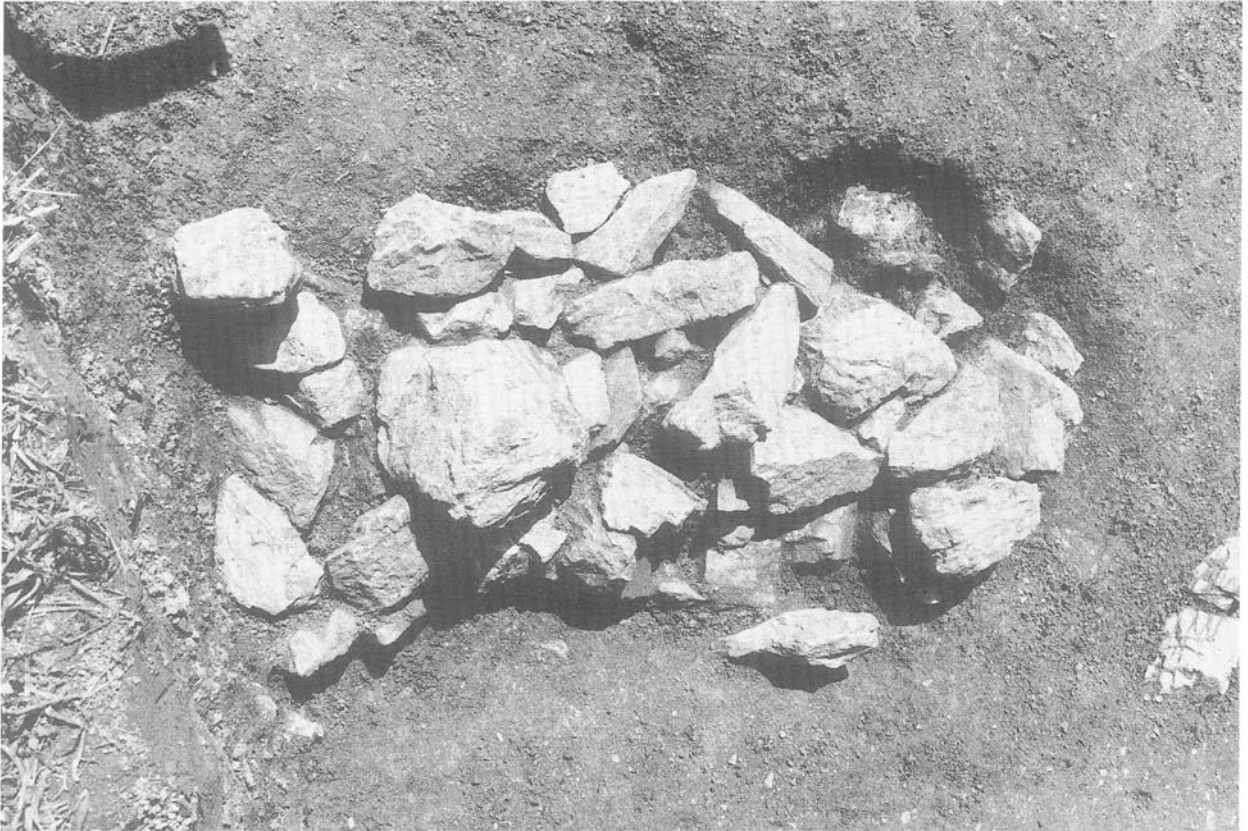


SK 6 (南東から)



SK 7 (北から)

PL 5



SK10 (北東から)



下層調査トレンチ (西から)



3



4



10



11



12



21



44



5



22



66



23



7



8



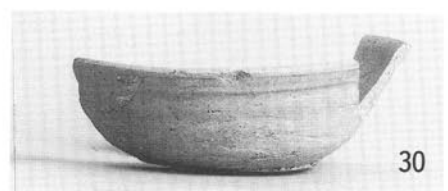
27



28



29



30



31



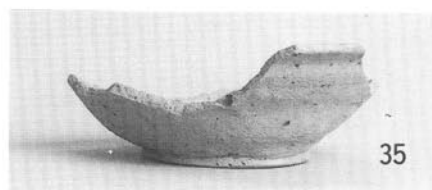
32



33



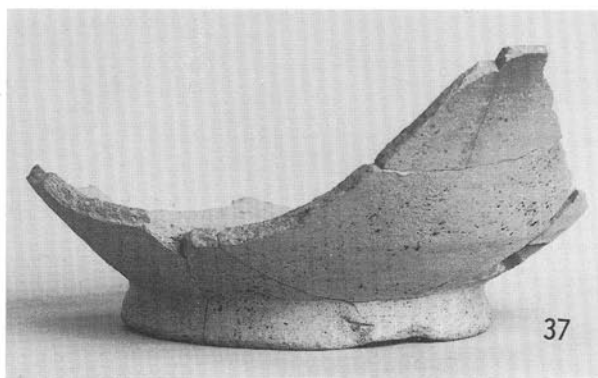
34



35

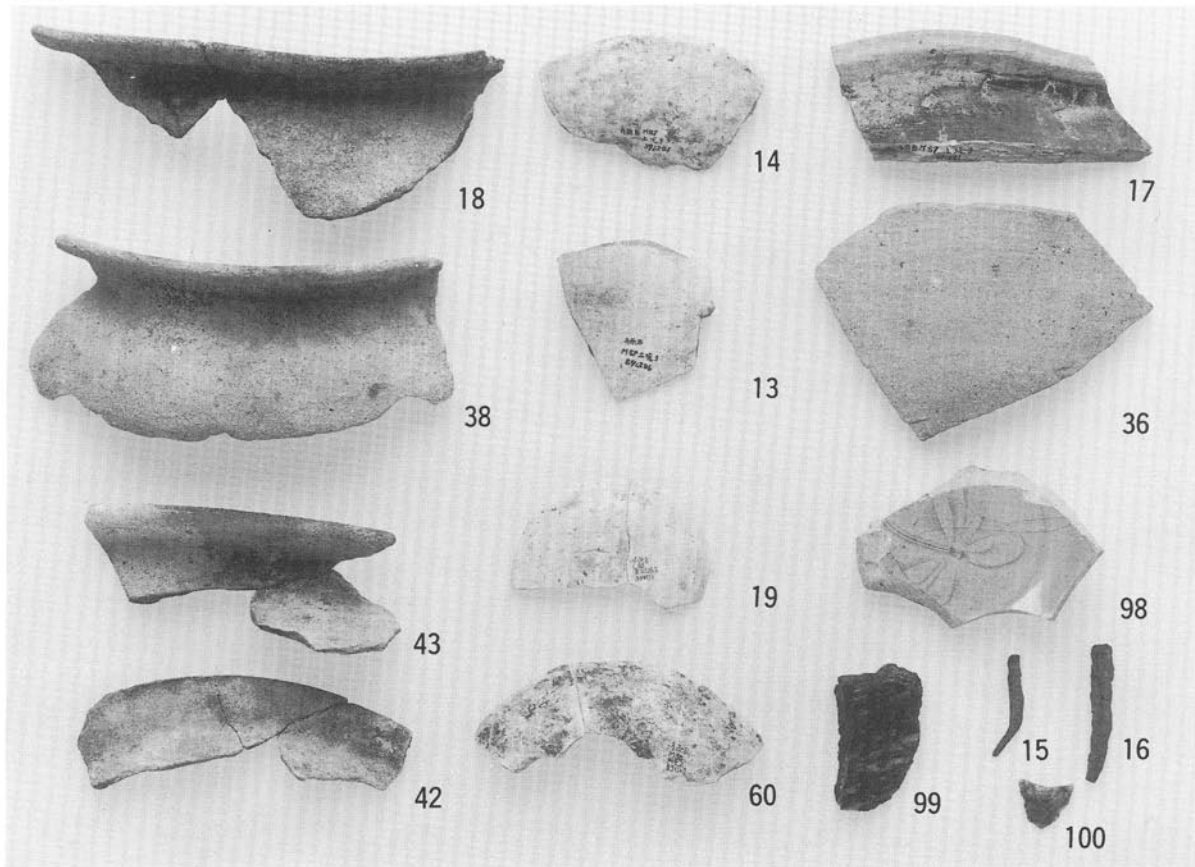


71

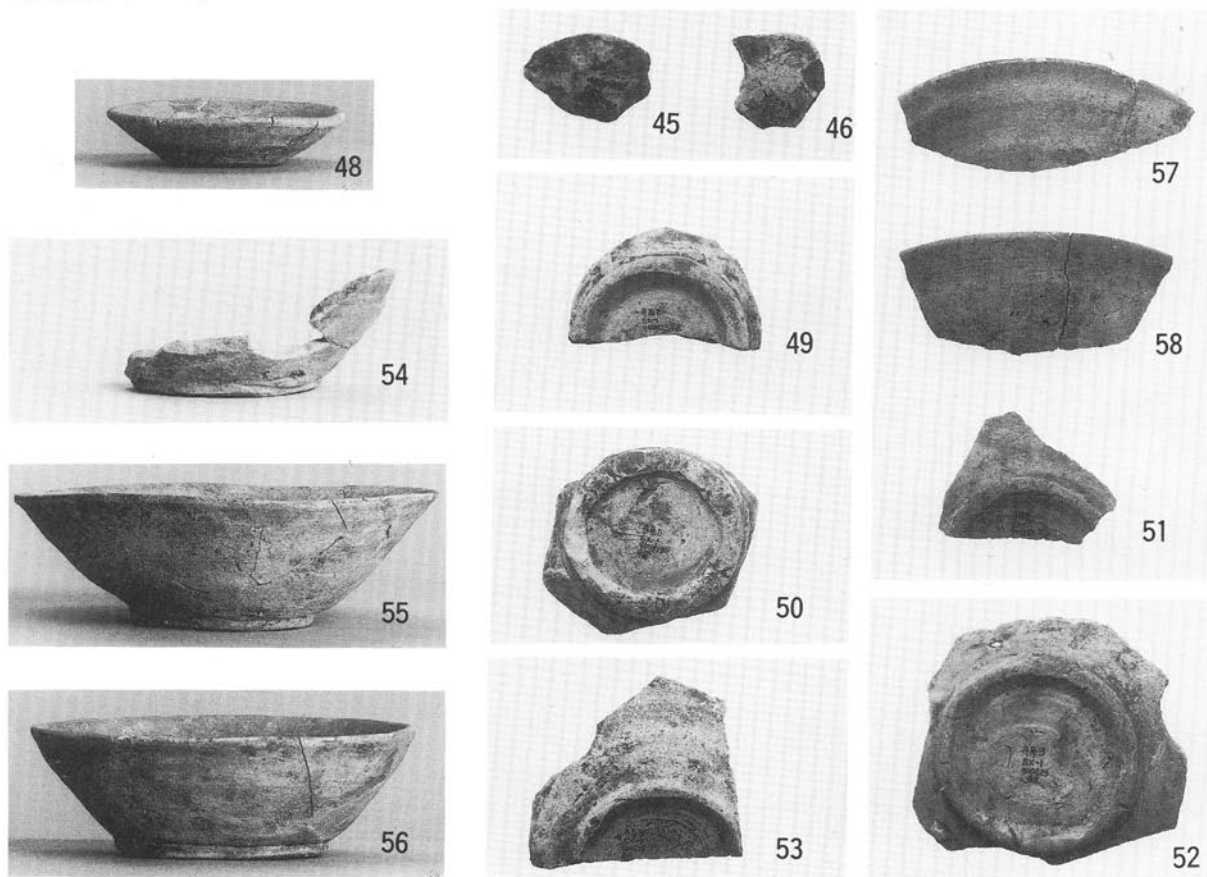


37

出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)



S K 10出土出土遺物 (1 : 3)

IV. 伊勢市^{そうち}佐八町 ハノカ遺跡 (19)

1. はじめに

ハノカ遺跡は行政的には伊勢市津村町字ハノカに属する。当遺跡は、笹原池から西方へ流れる小谷川の左岸に広がる標高20mの浸食段丘にあり、遠く宮川を望む所に位置する。現況は山林である。調査区は東端を最も高くし南西端へ下る。比高差は約1mになる。

地質は寺原B遺跡と同じく三波川帯Aの西端を担い、泥質片岩を主体としながら珪質片岩（原岩はチャート）が挟在する。

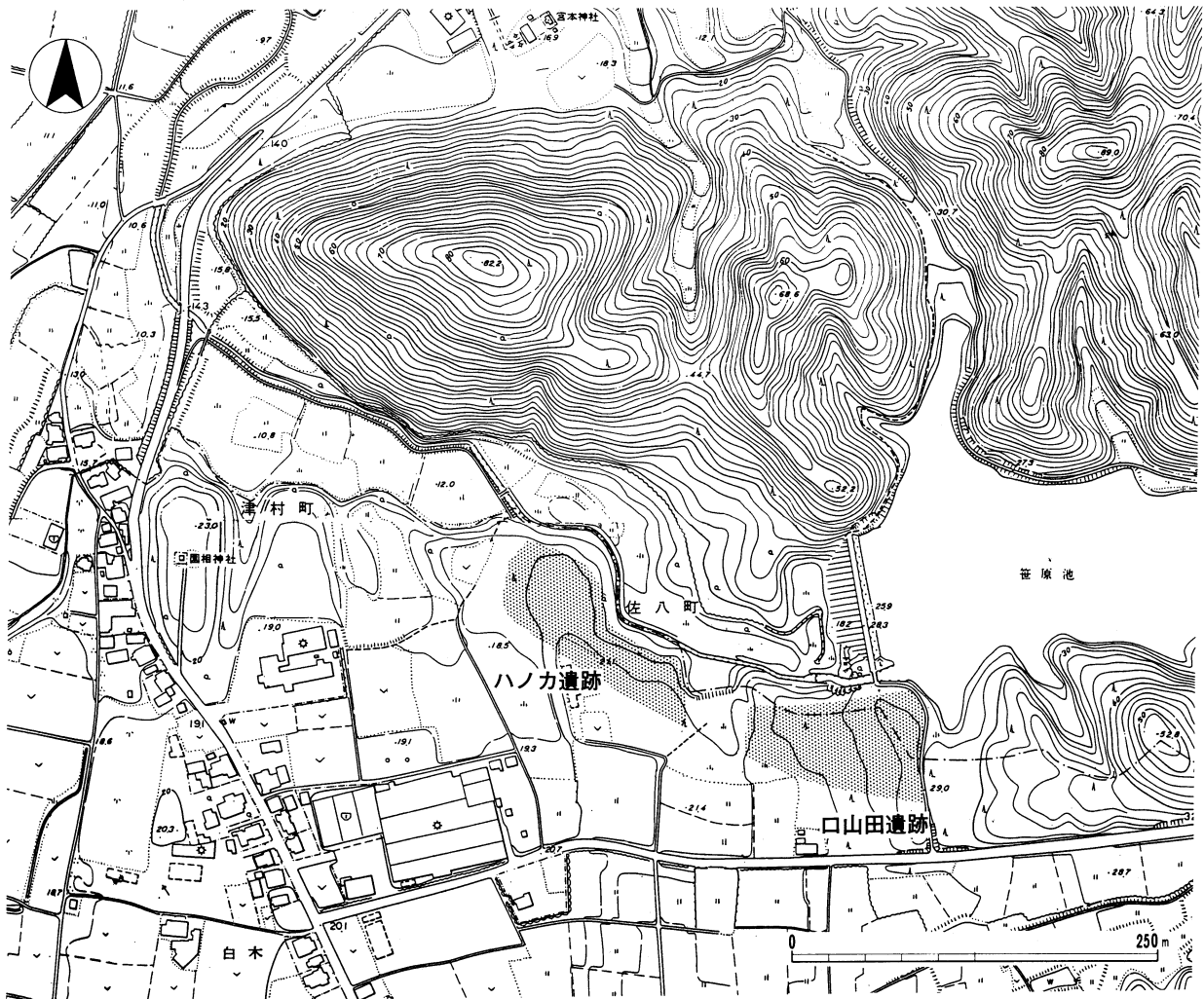
調査に際しての地区割は原則に従って計画道路センター抗（S T A614+40とS T A615+20）を基準

線として地区設定をした。

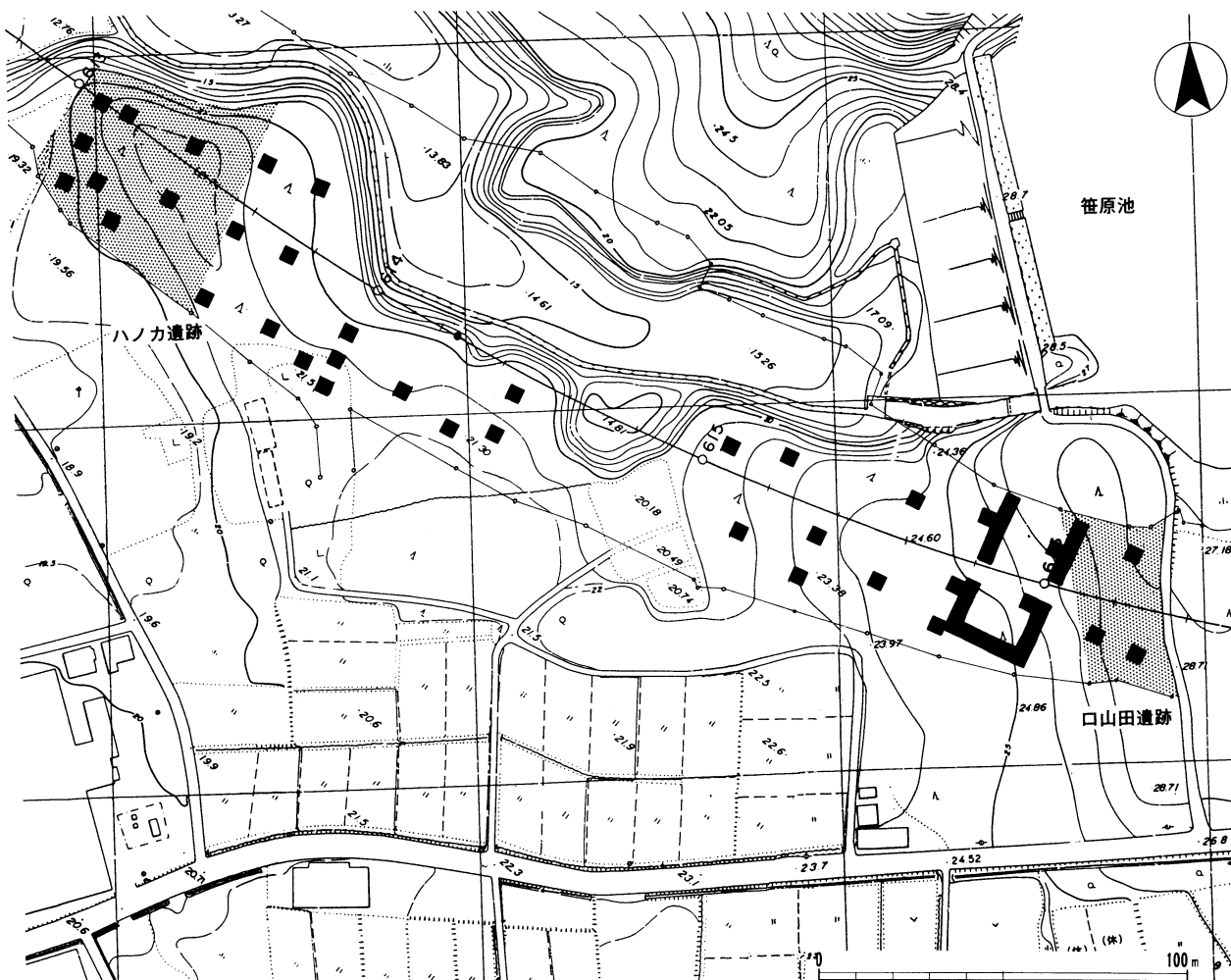
第1次調査は、平成2（1990）年2月14日から同年6月11日にかけて、4mグリッドを37箇所、トレンチ5本を設定（口山田遺跡も含む）して行った。

その結果、西端部のグリッドで縄文土器片が出土し、ピットが検出された。第2次調査は西端の約2,100㎡がその対象となった。調査は平成2（1990）年5月31日から同年8月1日にかけて実施した。

掘削はバック・フォーで30cm掘り下げ、その後は人力で少しずつ面的に掘り下げた。土層断面の確認は調査区東端と南端の壁面で行った。



第22図 遺跡地形図（1：5000）



第23図 ハノカ遺跡・口山田遺跡調査区位置図 (1:2000)

2. 遺構と遺物

ハノカ遺跡の基本層序は4層から成る。

- 第Ⅰ層………黒褐色土 (表土)
- 第Ⅱ層………暗褐色粗砂混土 (遺物包含層)
- 第Ⅲ層………黒色細砂混土 (遺物包含層)
- 第Ⅳ層………黄褐色粗砂混土

調査区東南部では第Ⅱ層暗褐色粗砂混土に拳大の礫が多く混じる。また、第Ⅲ層黒色細砂混土 (黒ボク) は、中央やや西から南西部にかけてだけ堆積し、その厚さは最も深い西南端部では約60cmになった。遺構検出面は第Ⅳ層上面である。

遺構は縄文時代のピットが南東部を除いて広く検出された以外にない。遺物は、風化が著しい縄文土器細片やチャート製の石核を中心とし、他に中世の土師器、山茶椀、鉄鏃等が出土した。その量はコンテナで4箱になる。

(1) ピットおよびピット出土遺物

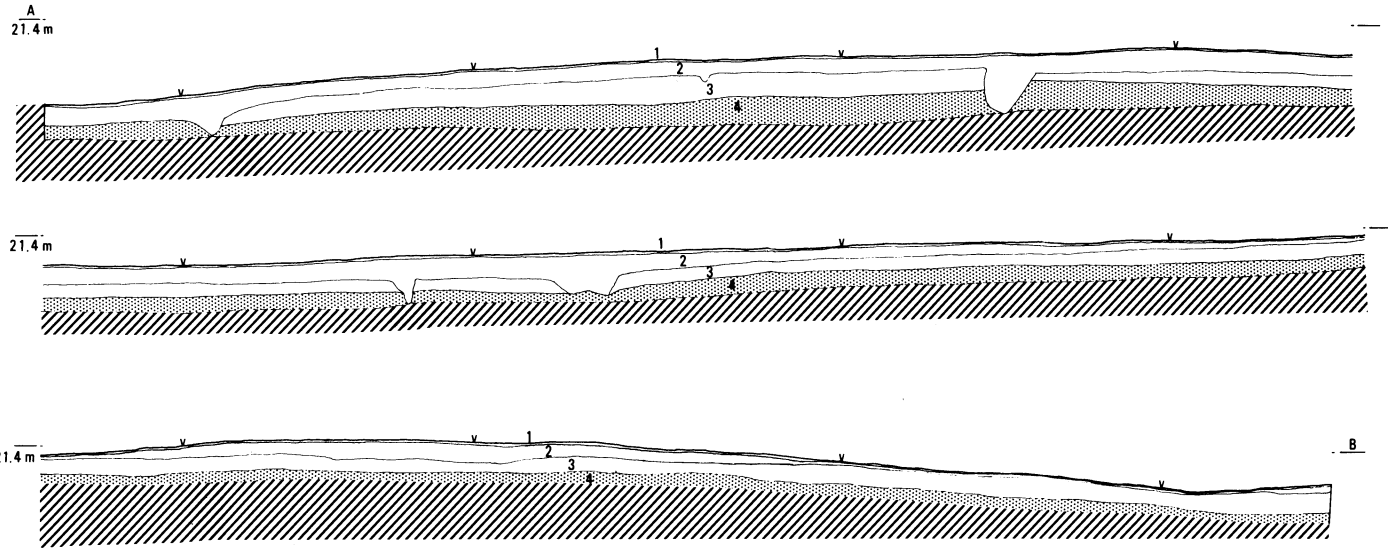
P 1 平面形は直径約60cmのほぼ円形を呈する。深さは約10cm、その埋土は第Ⅱ層と同じ暗褐色粗砂混土である。当ピットからは縄文土器片 (5) が出土した。半截竹管による2条の沈線文が見られる。

P 2 平面形は直径約40cmの円形を呈する。深さは約35cm、その埋土は第Ⅱ層と同じである。当ピットからは縄文土器片 (6) が出土した。口縁部の一部である。口縁端部下に沈線文が1条、その下に刺突文が見られる。

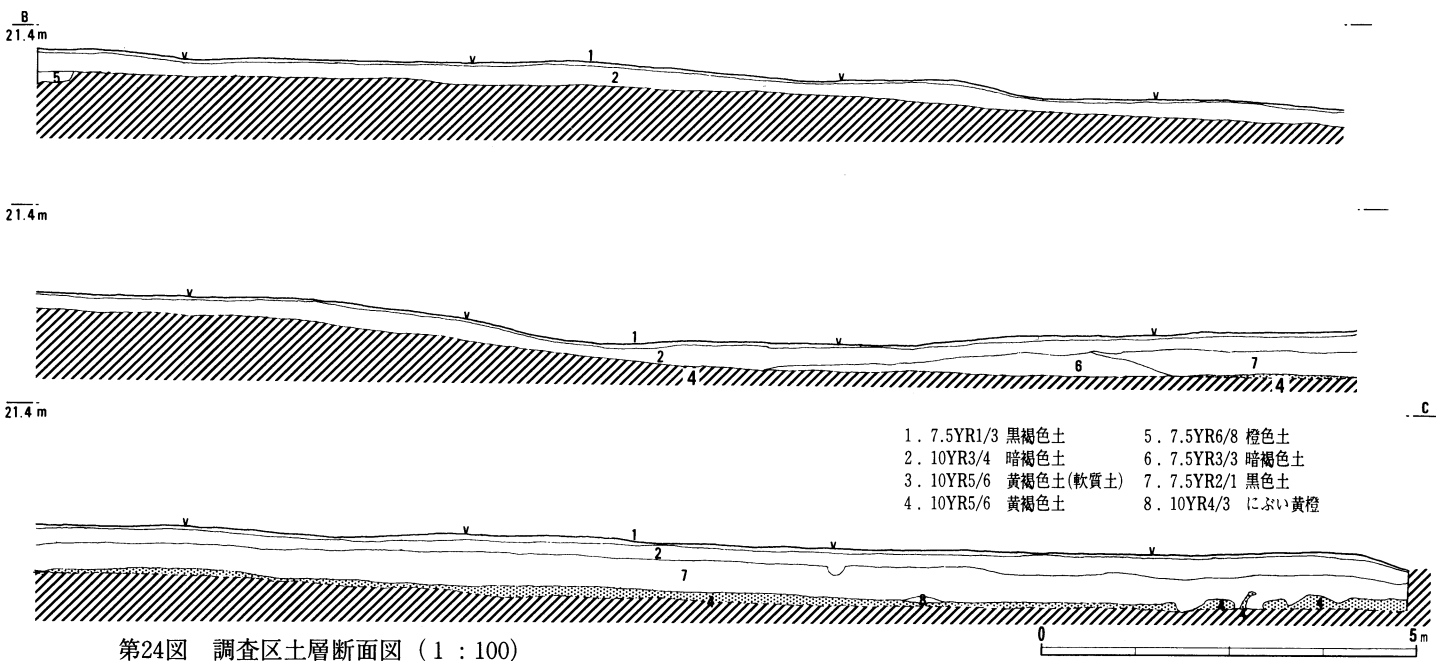
P 3 平面形は直径約20cmの円形を呈する。深さは約20cm、その埋土は第Ⅱ層と同じである。当ピットからは縄文土器片 (8) が出土した。刺突文と1条の沈線文が見られる。

P 4 平面形は直径約50cmの円形を呈する。深さ

南北土層断面



東西土層断面



第24図 調査区土層断面図 (1 : 100)

は約25cm その埋土は第Ⅱ層と同じである。当ピットからは縄文時代の深鉢（9）の底部が出土した。底部径約6cm、厚さ約0.7cmである。

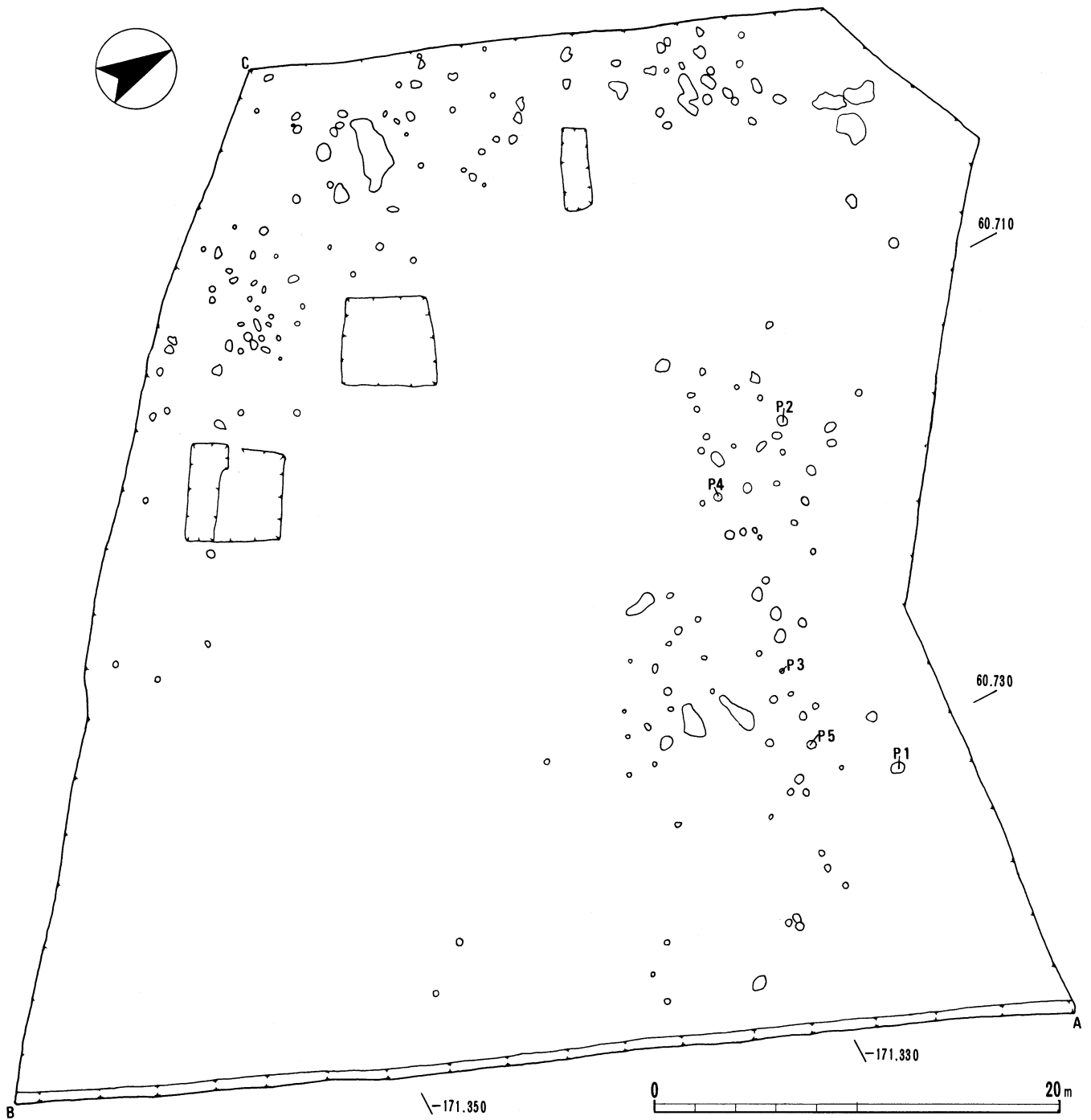
P5 平面形は直径約48cmの円形を呈する。深さは約20cm、その埋土は第Ⅱ層と同じである。当ピットからは石鏃（1）や横長剥片（2）が出土した。（1）は長さ2.83cm、幅1.27cm、厚さ1.05cm、重さ3.40gの尖基石鏃である。チャートは良質でリングも顕著である。全体にずんぐりした尖頭状を呈する。調整はラフで段階状剥離が著しい。厚みを減じようとしているが完全でない。（2）は長さ2.80cm、幅4.

35cm、厚さ0.57cm、重さ6.54gの横長剥片である。打面、打瘤は明確に残存する。一部に礫皮面も残存し、節理も多い。円礫を分割した後、打面を設定して剥片を得たものと思われる。

(2) 包含層出土遺物

A. 縄文時代の遺物

縄文土器片（3）は南西部の第Ⅲ層黒色細砂混土から出土。燃糸文を地文とし、半截竹管による2条の波状沈線文が見られる。表面には煤が付着する。縄文土器片（4）は東部中央第Ⅱ層礫の間隙から出土した。半截竹管による4条の沈線文が見られる。



第25図 調査区遺構平面図 (1 : 300)

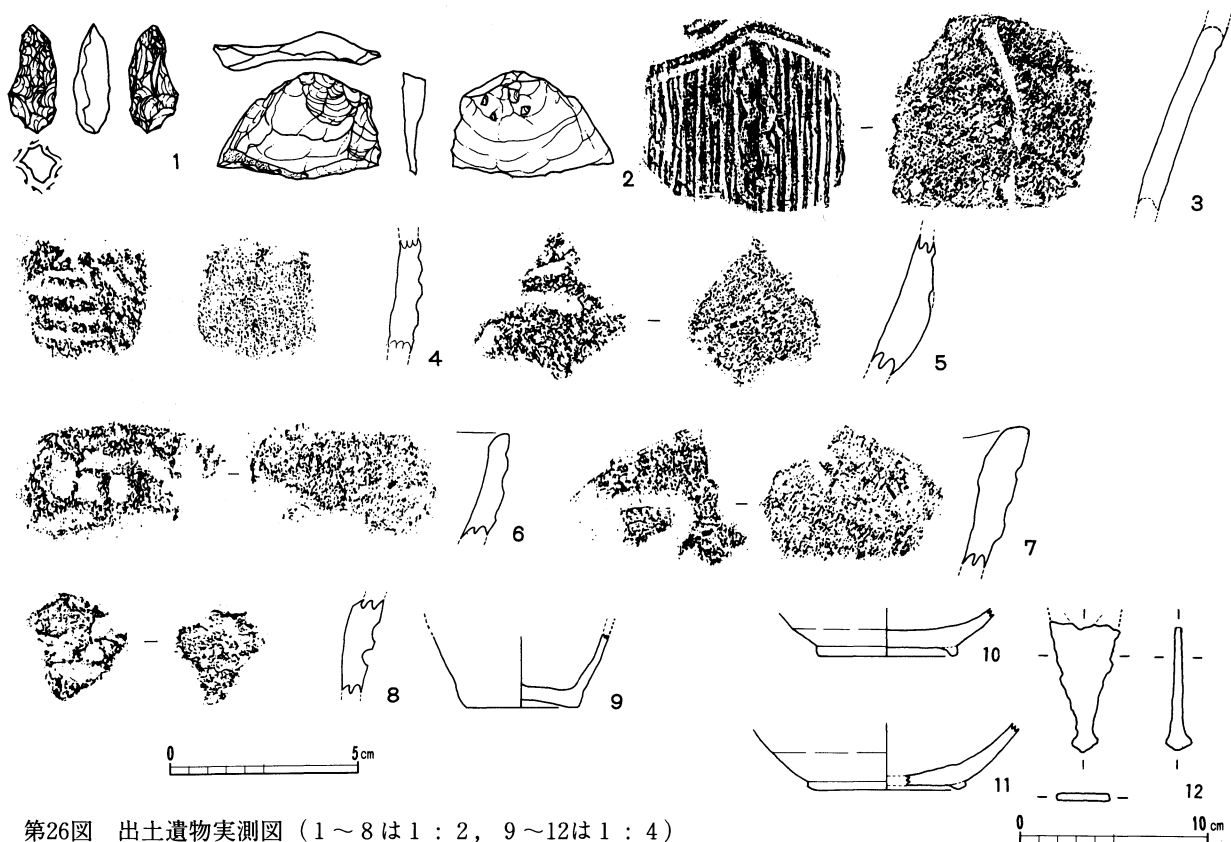
縄文土器片(7)は中央南の第Ⅲ層から出土。口縁部の一部。口縁端部下に沈線文が1条見られる。

B. 中世の遺物

山茶椀(10・11)が表土から2点採集された。(10)は底径7.4cm、底部厚み0.9cmである。腰部が丸みを持ち、底部外面の糸切り痕をナデ消す。高台はつぶれ、低い逆台形状になる。ロクロナデ成形である。色調は褐灰色(10YR6/1)を呈し、胎土は精緻である。高台端部に粗穀痕が残る。底部が2分の1残存する。(11)は底径8.4cm、底部厚み0.5cmである。

腰部が丸みを持ち、底部外面の糸切り痕をナデ消す。高台はつぶれ逆台形状になる。ロクロナデ成形である。色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈し、胎土は良である。底部が2分の1残存する。

鉄鏃(12)は中央北第Ⅱ層暗褐色粗砂混土から出土した。股状に開く刃部や茎部を欠損しているが、^{かりまた}雁股鏃と思われる。^{まち}闕部から股までの長さ約6cm、先端に向かって徐々に薄くなる。最近では亀山市の大藪遺跡B地区^③にその類例を見ることができる。



第26図 出土遺物実測図（1～8は1：2，9～12は1：4）

3. 結 語

ハノカ遺跡は縄文時代と鎌倉時代の生活痕跡を残す遺跡であるが、ここでは、検出された遺構、遺物の大半を占める縄文時代についてふれ、結語としたい。

縄文時代の遺構としては、ピットが検出されたのみで堅穴住居などその他の遺構は検出されなかった。遺物は、ピットや第Ⅱ・Ⅲ層上面から土器や石器が出土した。土器のなかに、宮川中下流域^④では出土例

の少ない縄文時代中期の土器片（3～8）が含まれている。特に（3）は、里木Ⅱ式^⑤に分類されるものである。チャート製の石製品については比較的多く出土しているが、ほとんどが石核である。

以上から当遺跡の性格を推測すると、縄文時代中期のキャンプ地的な役割を果たした所ではないかと思われる。

（角谷泰弘）

〈註〉

- ① 日本道路公団『昭和63年度伊勢自動車道伊勢橋他3橋第2次礎地盤調査報告書』1988
- ② 鉄鎌各部の名称は杉山秀宏「古墳時代の鉄鎌について」『橿原考古学研究所論集 第8』吉川弘文館 1988による。
- ③ 「Ⅲ大森遺跡」『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅵ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990
- ④ 宮川中下流域にある縄文時代の遺跡には、伊勢市佐八町の中

ノ垣外遺跡（後・晩期）、佐八藤波遺跡（後・晩期）、度会郡度会町の万野遺跡（早期～晩期）、森添遺跡（中・後期）、大宮町の樋ノ谷遺跡（早・中期）などが上げられるが、中期の土器は、当遺跡に最も近い中ノ垣外遺跡や佐八藤波遺跡からは出土しておらず、宮川中流域の森添遺跡や樋ノ谷遺跡まで遡なければならない。

- ⑤ 『倉敷考古館研究集報第7号 里木貝塚』倉敷考古館 1971

1. はじめに

口山田遺跡は、行政的には伊勢市津村町字口山田と市佐八町字向口にまたがって属する。ハノカ遺跡^①から東へ約300m、落合古墳群^②と笹原池に近接して位置する。標高約28mの山林にあって、東端部は市道前山・津村線から笹原池に至る間道に接する。

地質はハノカ遺跡と同じく三波川帯Aに属し、泥質片岩を主体としながら珪質片岩（原岩はチャート）が挟在する^③地である。

調査に際しての地区割はハノカ遺跡の延長を利用し、原則に従って地区設定をした。

第1次調査は、平成2（1990）2月14日から同年

6月11日にかけて、4mグリッド37箇所、トレンチ5本を設定（ハノカ遺跡も含む）して行った。

その結果、東端部で数個のピットと集石（第1次調査以前から一部露出していたために確認されていた）を確認した。第2次調査は東端部の約700㎡がその対象となった。調査は平成2（1990）年5月7日から同年7月5日にかけて実施した。

掘削は、北から南へ、バック・フォーで20cm掘り下げ、その後は人力で少しずつ面的に掘り下げた。その後、北端と南端にそってトレンチを入れ遺構確認に努めた。

2. 遺 構

口山田遺跡の基本的な層序は3層から成る。

第I層………黒褐色土（表土）

第II層………黄褐色粗砂混土（遺物包含層）

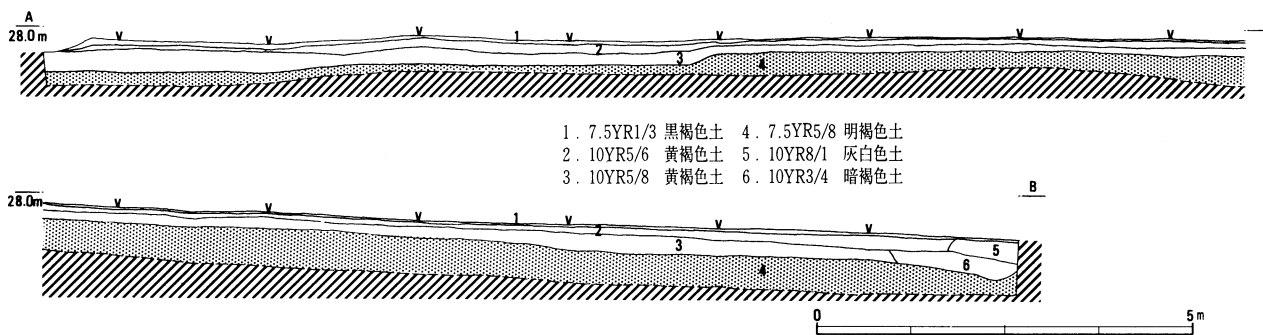
第III層………明褐色礫混土

遺構検出面は第III層上面である。

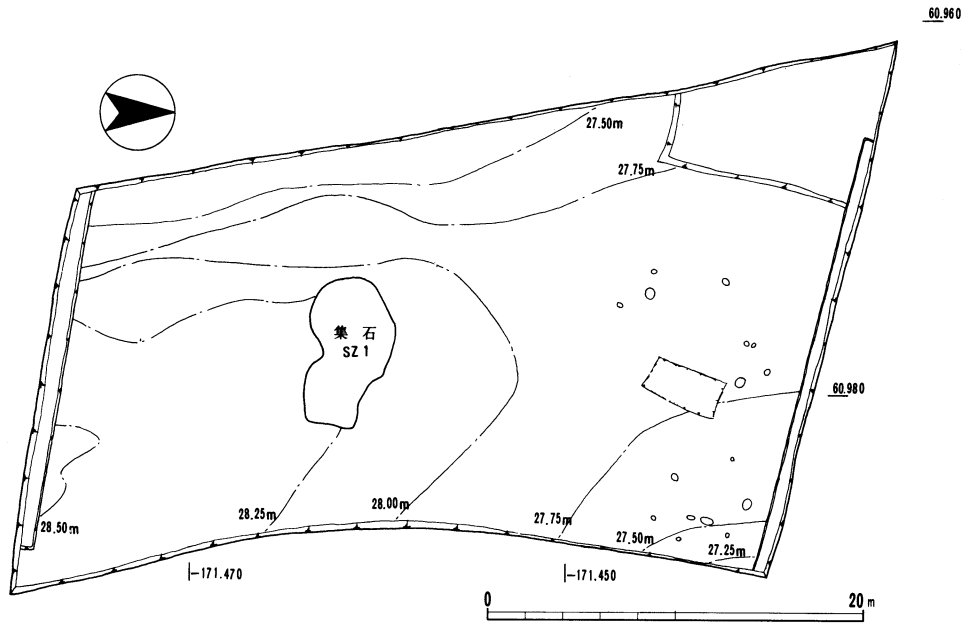
遺構は、調査区ほぼ中央に集石が一基、北側でピットが十数個検出された。ピットからの出土遺物は無く、建物跡も確認できなかった。ここでは、集石についてだけ記す。

〈集石遺構 SZ1〉

SZ1は、調査区中央やや南に位置し、20cm大の多数の河原石から成る。その直下は岩盤で、第III層上面からおよそ10cm～20cmでそれに達する。集石の中には植林された杉の木があり、株や根があちこちにあることから、石のなかには動いているものもあると思われる。また、バック・フォーでの表土掘削の際、遺構東端を一部掘り下げてしまった。そのような中でのおよその規模は、約4m×8m、平面



第27図 調査区東西土層断面図（1：100）



第28図 調査区遺構平面図（1：200）

形は瓢箪形を呈する。

調査結果から、東西に石の集中度が高いところがあり、そこがまわりに比べて高くなっていることから、ここでは東側部分と西側部分に分けて説明する。

東側部分のおおよその規模は、直径約3mでほぼ円形を呈し、最も高いところで遺構検出面から約60cmの高さがある。内部から長辺約0.8m、短辺約0.4mの方形状に並べられた板状の石（結晶片岩）やこれとほぼ直立する結晶片岩が出土した。主軸は南北

を示している。内部からの出土遺物はない。また、そこから約1.5m離れた北東隅に、約40cm大の石が「L」字形に五個並ぶ。集石西端では土師器の細片が出土し、北端からは寛永通寶が2点表面採集された。

西側部分のおおよその規模は、直径約2mでほぼ円形を呈し、最も高いところで遺構検出面から約30cmの高さがある。内部からは結晶片岩も遺物も出土しなかった。

3. 遺物

出土遺物は8点と少ない。以下個々に、紹介する。

A. 縄文時代の遺物

石匙（1）は中央北より第Ⅲ層上面から出土した。石質はサヌカイトである。長さ3.16cm、幅3.08cm、厚さ0.40cm、重さ3.58gになる。正三角形にちかい。両面に調整があり、表面は全周にわたって縁から、裏面は左斜めより細長の調整が施されたあと、右斜め上方よりさらに小さい調整がある。前期のものと考えられる。

B. 平安時代の遺物

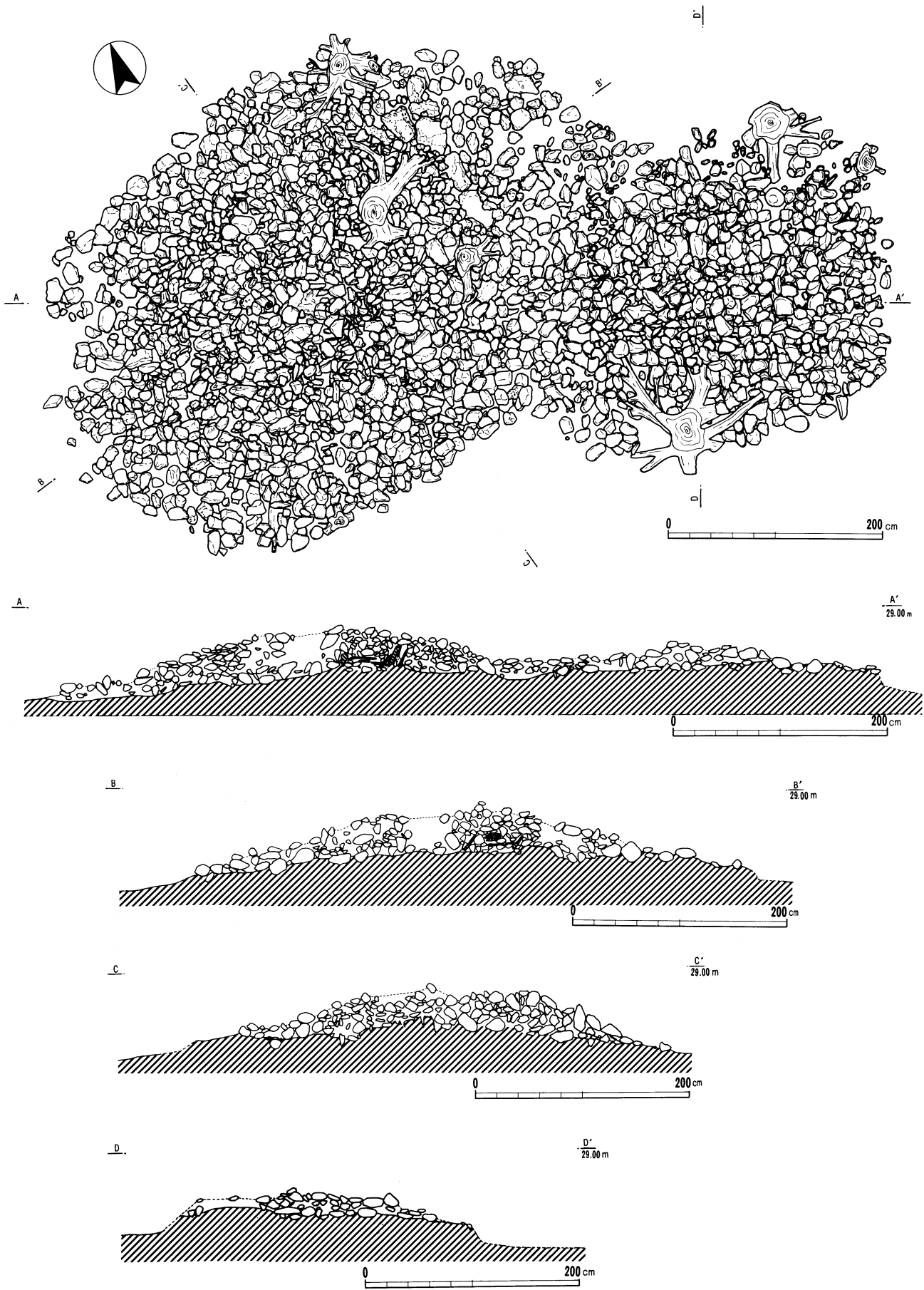
陶器（2）は中央北第Ⅱ層から出土した。外面は平行叩き目痕が走り、内面には同心円状と思われる

叩き痕が残る。胎土は精緻、焼成も良い。色調は灰色（10Y 6/8）を呈する。

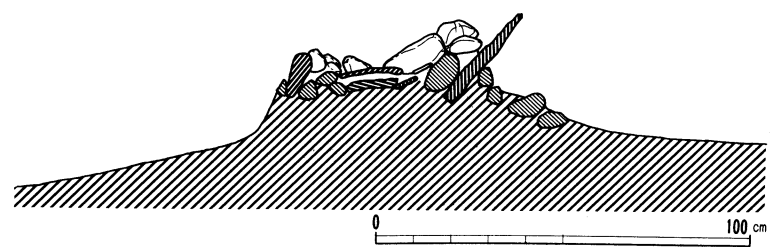
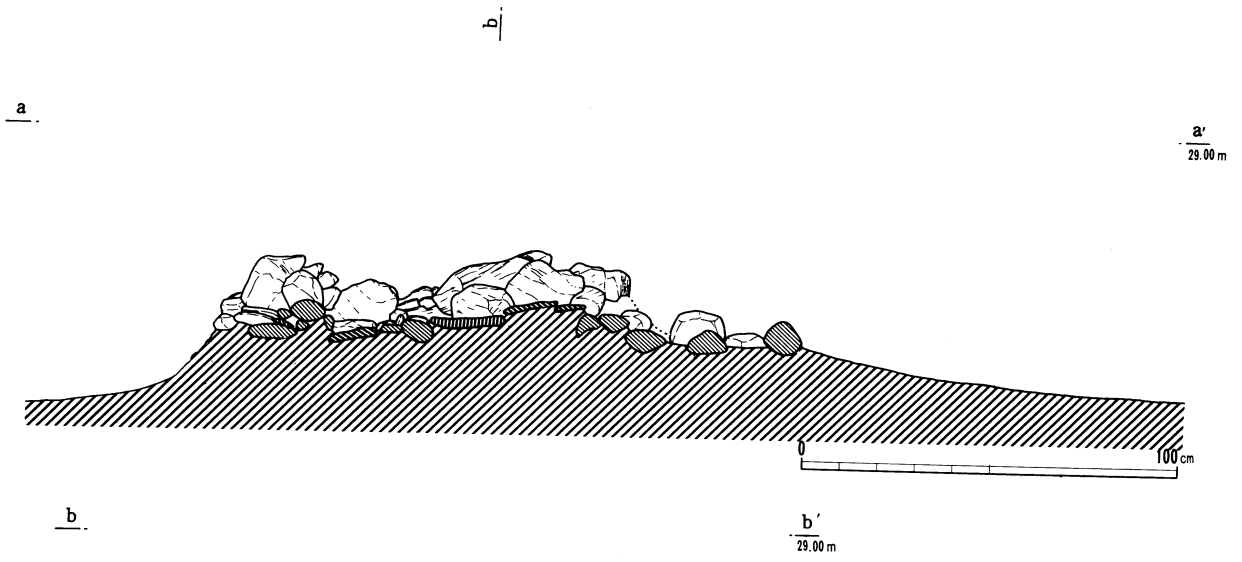
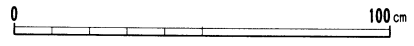
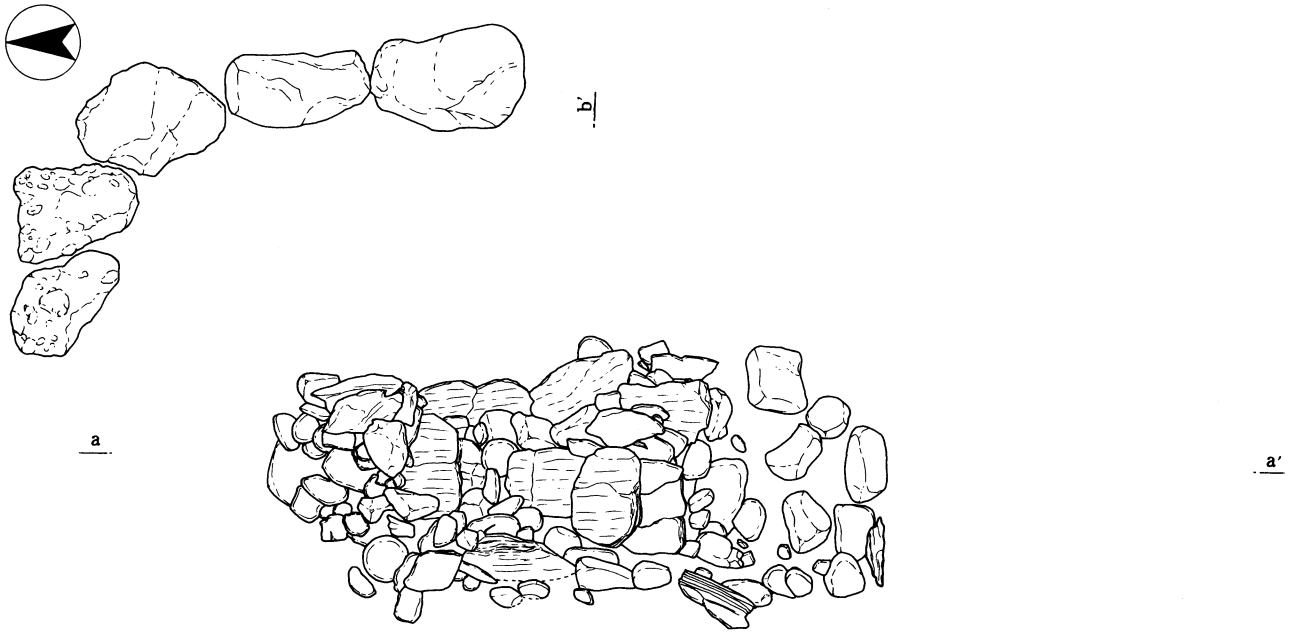
C. 中世の遺物

土師器小皿（3）は中央北東第Ⅱ層から出土した。口縁部を一部残す細片である。口径7.6cm、器高1.1cmになる。内面ナデ、口縁部ヨコナデ、外面は未調整である。細砂粒を含み、焼成は良い。黄橙色（10Y R 7/1）を呈する。

山茶碗（4）は表面から採集。高台径7.8cm、底部厚み0.8cmになる。高台はていねいに貼り付けてあるがつぶれて逆台形状になる。糸切り痕はナデ消しているが不徹底である。ロクロナデ成形で、体部



第29図 SZ 1遺構実測図 平面図・断面図 (1 : 50)



第30図 S Z 1 遺構実測図 東側部分 内部平面図・断面図 (1 : 20)

の立ち上がりは直線的である。胎土は3mm大の砂粒を含む。焼成は良い。色調は褐灰色(10YR 6/1)を呈する。

鑄貨(5)は中央北第Ⅱ層から出土。口縁を一部欠く永楽通寶である。直径は約2.4cmである。



第31図 出土遺物実測図(1・5～7は1:2, 2～4は1:4)

(4) 江戸時代の遺物

鑄貨(6・7)は集石東側部分の集石北端から採集された。ともに寛永通寶である。直径は2.4cmである。背面に銭銘はない。

4. 結 語

当遺跡は集石遺構が中心となる遺跡である。しかし、その性格は出土遺物や類例が少ないため不明である。ただ、東側部分の集石については石(結晶片岩)の配置やそれをさらに囲むように並ぶ石列から

人為的なものが感じられ、墓である可能性も考えられる。これと類似した遺構が近接する落合古墳群から数基検出されているので、今後その比較・検討が重要になると思われる。

(角谷泰弘)

〈註〉

- ① 本書で報告。
- ② 伊藤裕偉「V. 落合古墳群」『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
- ③ 日本道路公団『昭和63年度伊勢自動車道伊勢橋他3橋第2次基礎地盤調査報告書』1988
- ④ 落合古墳群では墳丘をもたない石組墓が3基確認されている。

当遺構のように前面河原石で覆われているものではないが、石組墓2、3が比較的類似しているので②より概要を紹介する。「底面と側面に結晶片岩の石を用い、石棺状を呈し、小礫を各所に用いる。その規模は、2が長辺約1m、短辺約0.5m、3が長辺約0.8m、短辺約0.4mのそれぞれ長方形を呈する。天井部に石は用いていない。主軸は2・3ともにほぼ東西を指す。その内部から出土遺物はない。」というものである。



調査前全景（北西から）

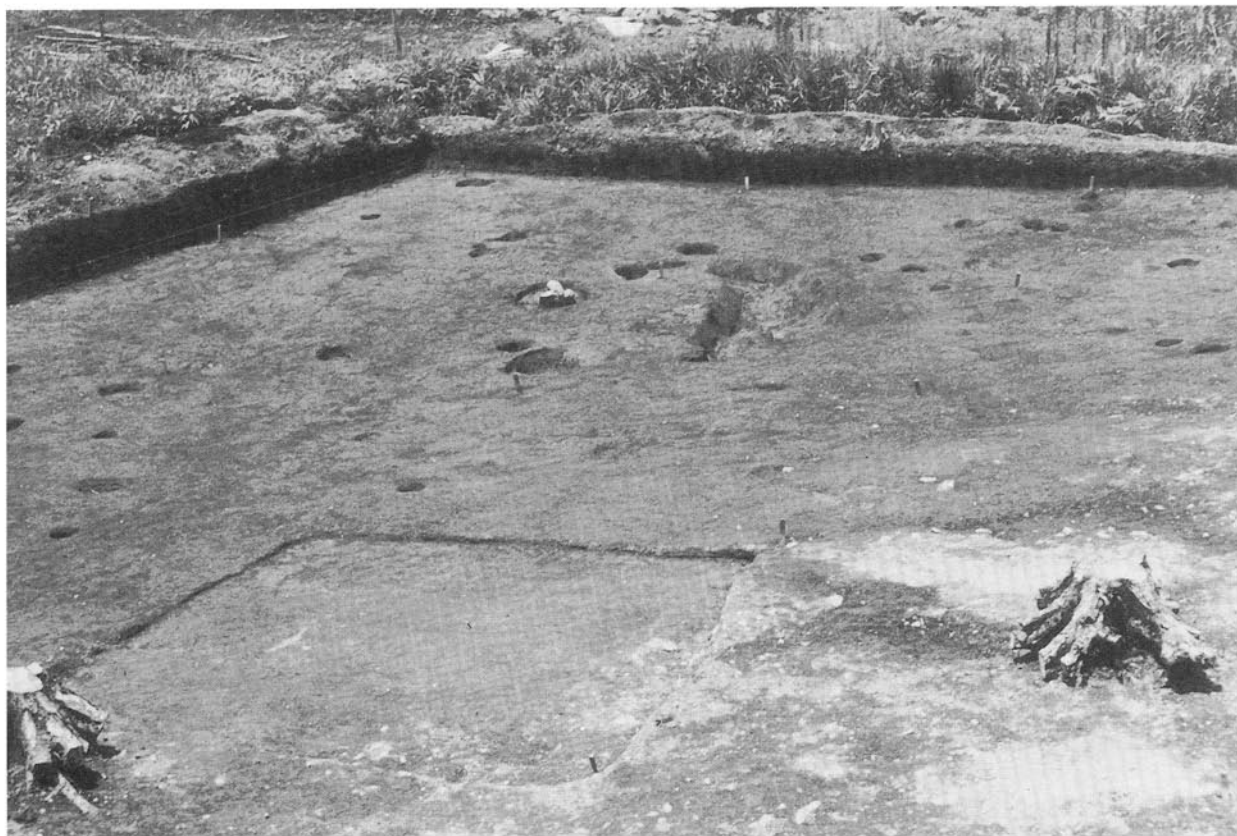


調査区全景（西から）

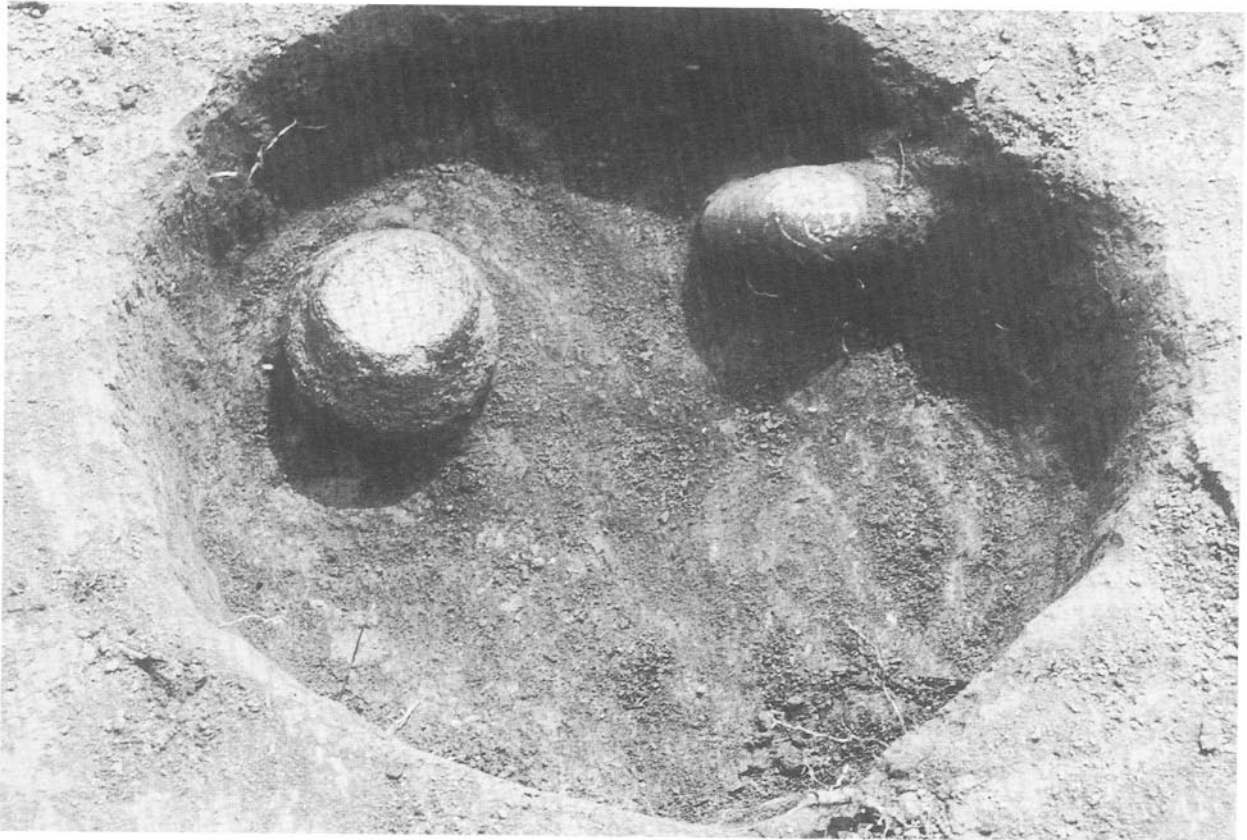
PL 2



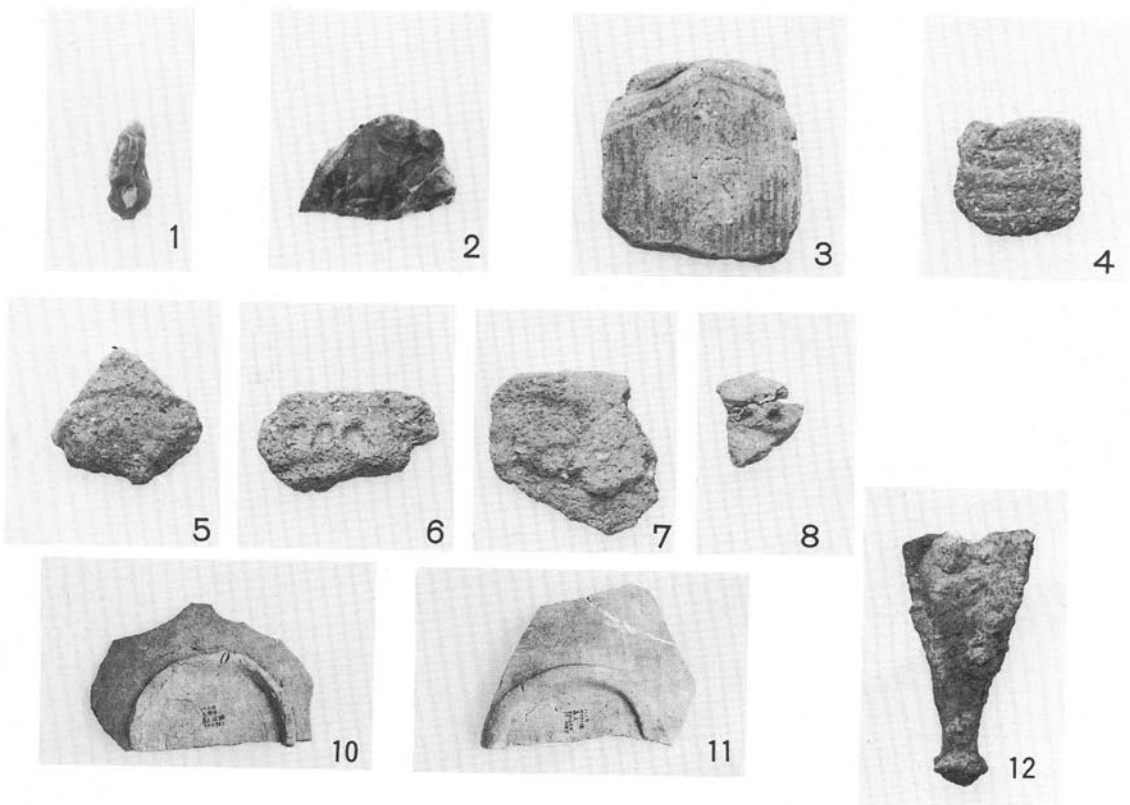
ピット群 (1) (南東から)



ピット群 (2) (北東から)



ピット4 縄文土器出土状況（東から）



出土遺物（1～8・12は1：2，10・11は1：4）

PL 1

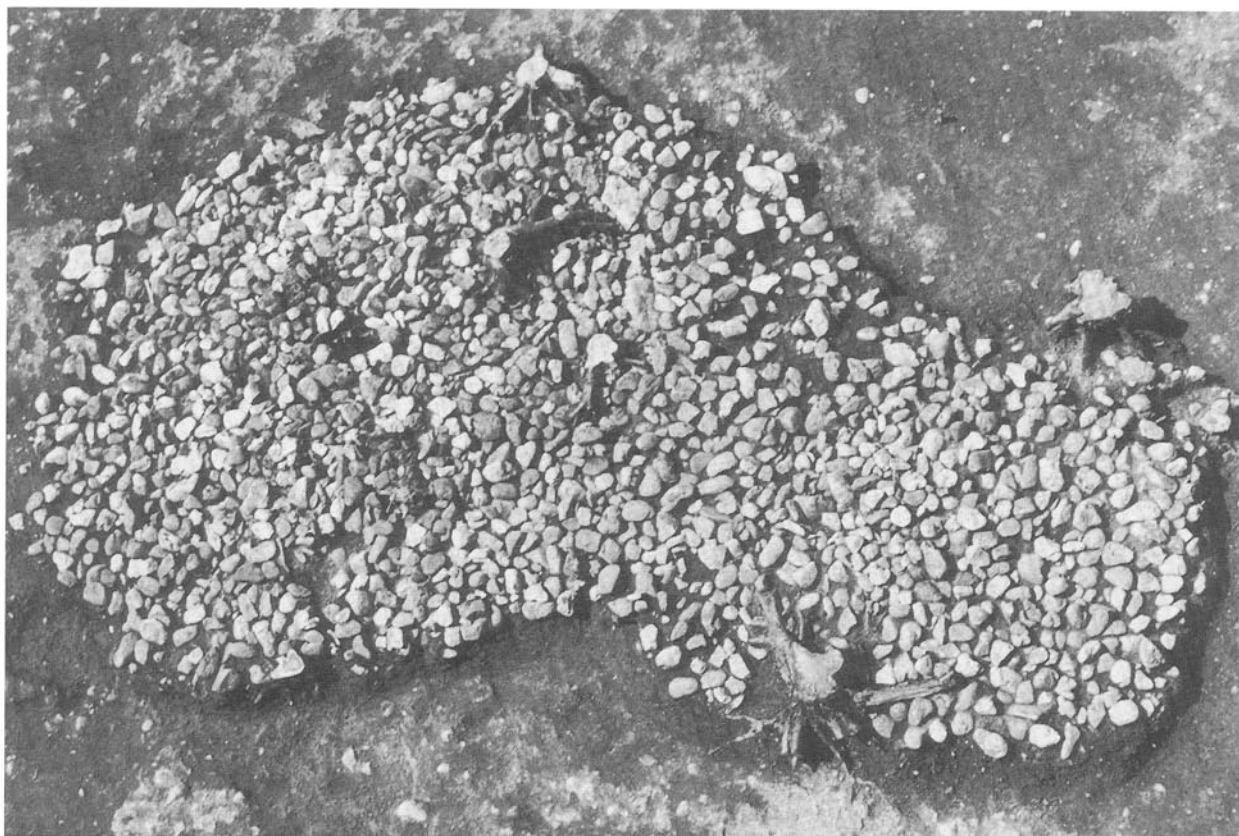


調査前全景（南東から）

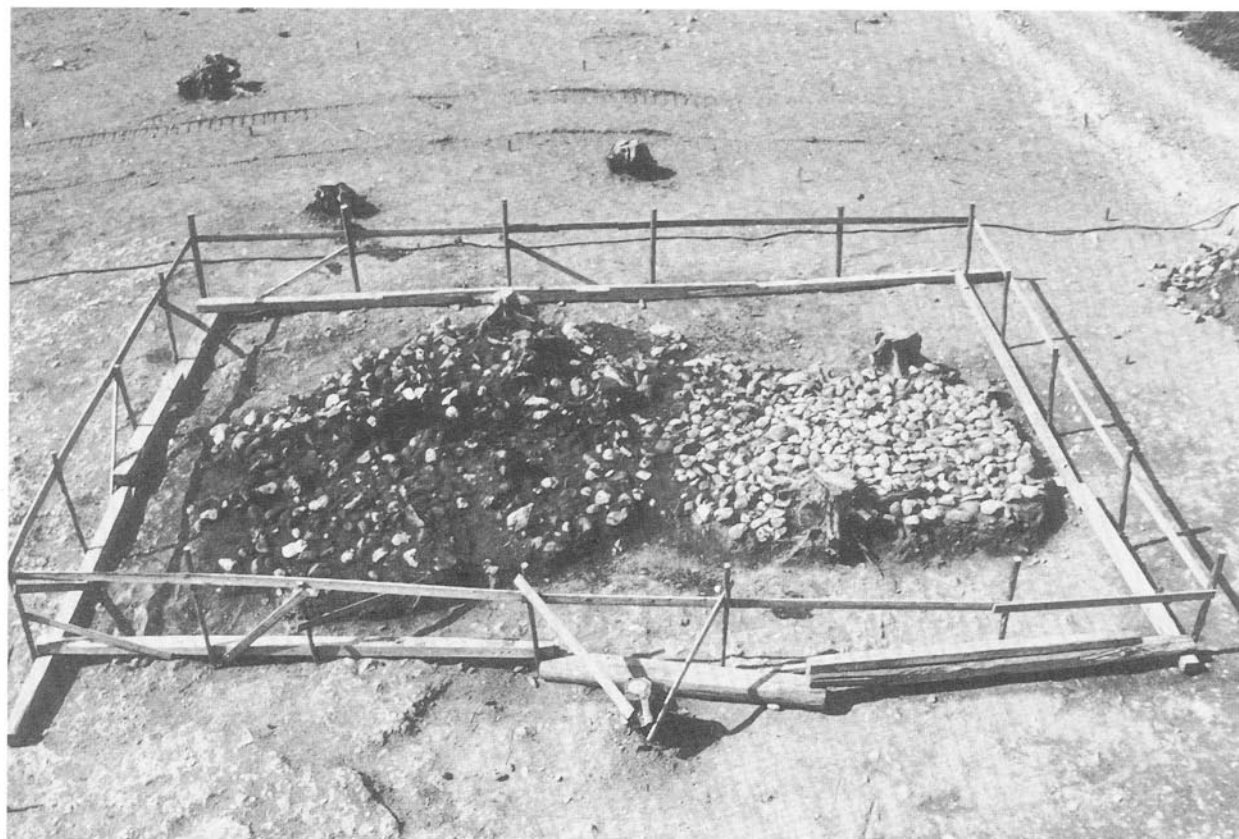


調査区全景（東から）

PL 2

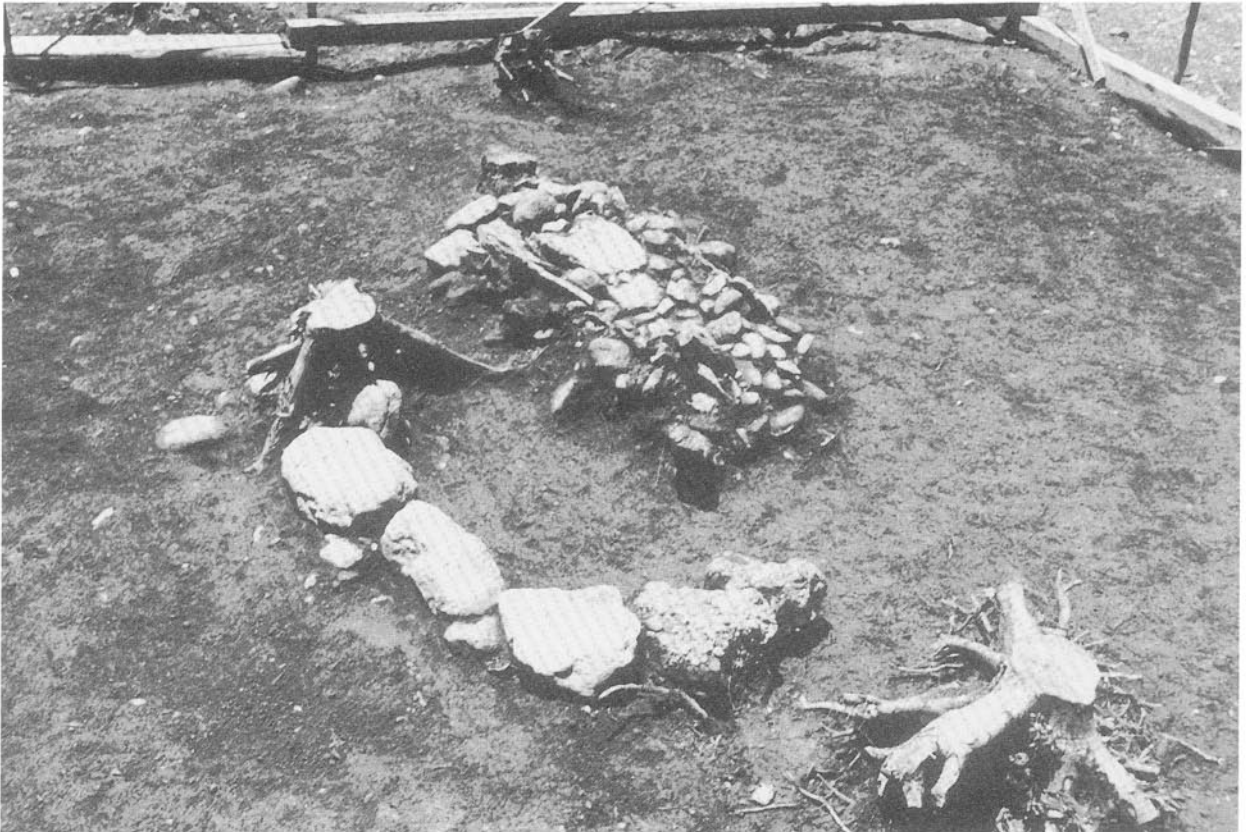


S Z 1 全景 (南から)

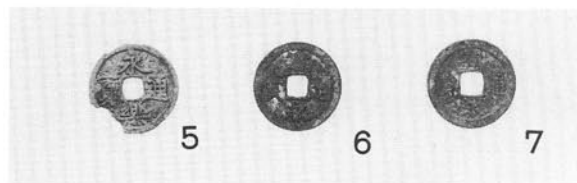
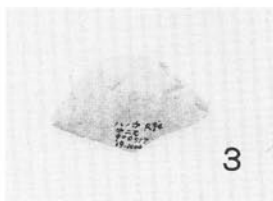
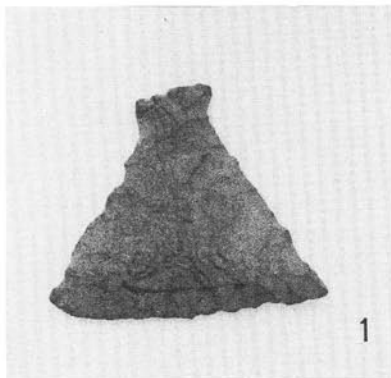


S Z 1 発掘状況 (1) (南から)

PL 3



S Z 1 発掘状況 (2) (北東から)



出土遺物 (1は1:1, 3・5~7は1:2, 2・4は1:3)

(付 篇) 口山田遺跡土壌分析について

口山田遺跡は集石遺構がメインとなる遺跡であるが、その性格は不明である。手掛かりとして、東側集石内部から、墓にまつわる石棺らしき配石（結晶片岩）を検出したが墓と断定するには至っていない。そこで、土壌化した人骨に含まれる、リン・カルシ

ウムの有無を確認するため5地点(No.1は結晶片岩の底石上面 No.2・No.3は結晶片岩の外 No.4・No.5は結晶片岩の底石下)から土壌を採取し、リン(P)カルシウム(Ca)の分析を三重県農業技術センターに依頼した。その結果は下記の通りである。

口山田遺跡土壌分析結果

三重県農業技術センター
 広瀬 和久
 原 正之

1. 分析の概要

口山田遺跡の土壌分析結果は以下の通りであった。

地点番号	1	2	3	4	5
P (ppm)	162.2	191.9	152.6	68.1	80.6
Ca (ppm)	91.3	140.0	87.5	95.0	112.5

図-1 P, Caの各地点濃度

2. まとめ

リンについては、No.1、No.4、No.5の地点が他の地点に比べて高い値を示した。カルシウムについては、No.2の地点でやや高い傾向が認められたが、その他の地点はほぼ100ppm程度で大きな地点間の差はなかった。

一般的に、リン、カルシウムそのいずれも各地点の数値的差は大きいといえるものでなく、人骨埋葬の有無は判定できなかった。これは、集石遺構の一部が表面露出の状態であったため、雨水その他の人為的影響を受けやすかったためでないかと考えられる。

以上の結果、土壌中のリン、カルシウム分析による人骨有無の判定方は、このような浅層遺構には適さないものと推察された。

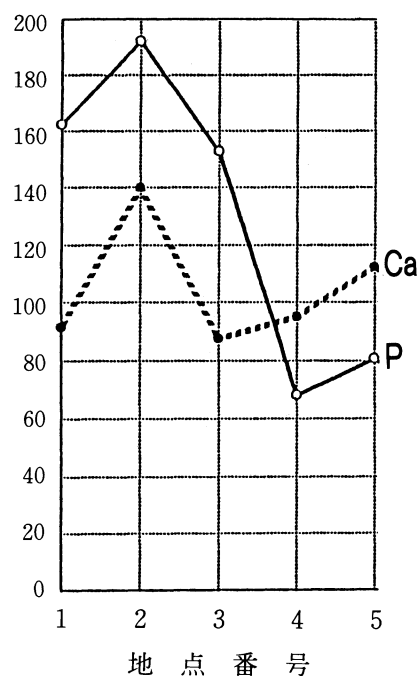


図-2 P, Ca濃度分布

●試料採取地点

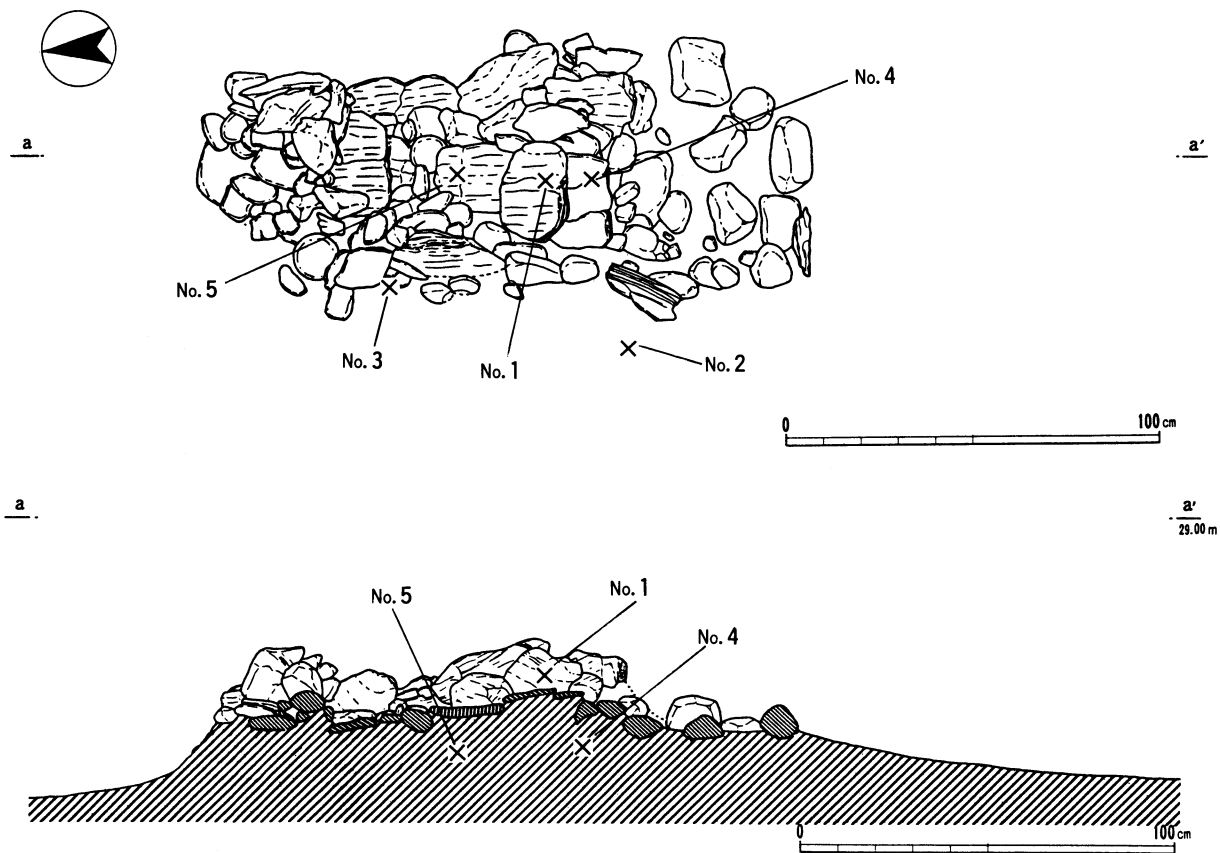


図-3 SZ 1 遺構実測図 東側内部 (1 : 20)

平成4(1992)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 1 0 1 - 5

近畿自動車（勢和～伊勢）

埋蔵文化財発掘調査報告

——第5分冊——

1 9 9 2（平成4）年3月31日

編 集 三重県埋蔵文化財センター

発 行 三重県教育委員会

印 刷 東海印刷株式会社
